

令和 5 年度
野洲市文化財調査概要報告書

2024 年 3 月
滋賀県野洲市教育委員会

序 文

野洲市は、琵琶湖の東南部に位置し、野洲川と近江富士の三上山に代表される自然豊かなまちです。埋蔵文化財では、大岩山出土の銅鐸 24 個をはじめ、国史跡大岩山古墳群や重要文化財西河原遺跡群出土木簡などが広く知られ、これらを支えた人々の営みが市内各地の遺跡として周知されているところです。

本報告書に収容する主な調査として市三宅東遺跡出土土器の復元・保存事業があげられます。こうした文化財の復元・保存事業は後世に貴重な文化財を残すだけでなく、公開等を行うことによって、野洲市の文化財が広く普及される重要な事業であります。

本書が郷土の歴史、文化財への理解と保護に寄与することができれば幸いと存じます。最後になりましたが、発掘調査にご協力いただきました関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

令和6年（2024）3月

野洲市教育委員会

教育長 西 村 健

例 言

1. 本書は、令和4年度から令和5年度に実施した、野洲市内の文化財調査の概要報告書である。
2. 調査は野洲市教育委員会文化財保護課が実施した。調査体制は以下のとおりである。

令和4年度 教育長 西村 健 教育部長 馬野 明 教育部次長 北脇康久
教育部次長兼文化財保護課長兼歴史民俗博物館館長 行俊 勉
課長補佐 河合順之 課長補佐 福永清治 専門員 進藤 武
技師 芦塚晶太 技師 渡邊貴洋

令和5年度 教育長 西村 健 教育部長 馬野 明 教育部次長 北脇康久
教育部次長兼文化財保護課長兼歴史民俗博物館館長 行俊 勉
課長補佐 河合順之 課長補佐 福永清治 専門員 進藤 武
主任 鈴木 茂 技師 渡邊貴洋

3. 本書の執筆は調査補助員の協力を得て、文末に記した担当者がおこなった。また、第3章については、國分政子氏が執筆した。
編集は課員の協力のもと鈴木が行った。
4. 現地調査における基準方位は、特に設定しない限り真北を示す。磁北や座標北を用いる場合はその旨を図中に表記する。
5. 標高は、野洲市公共下水道台帳図の水準を基準としている。
6. 遺構の表示記号は、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の略号を準用した。
7. 遺跡名や遺跡範囲については、『野洲市遺跡地図』（野洲市教育委員会 令和2年8月5日改訂）による。
8. 土色は、「新版標準土色帖」（1993年版）などを参考にした。
9. 出土した遺物および記録などは、野洲市教育委員会が保管している。
10. 現地発掘調査および整理事業は、下記の方々の参加・協力を得た。（敬称略）
山崎 馨 大黒康弘 松下嘉暢 中川九英 公益社団法人野洲市シルバー人材センター

目 次

序 文	
例 言	
目 次	

第1章 市三宅東遺跡出土土器復元	1
第2章 福林寺磨崖仏に残る矢穴と中世近江における採石技法の展開	8
第3章 五条遺跡第18次発掘調査出土遺物報告補遺	39
第4章 御明田古墳群第2次発掘調査出土遺物報告補遺1	51

報告書抄録

第1章 市三宅東遺跡出土土器復元

野洲市では、市内の発掘調査により出土した遺物中から、脆弱な木製品や劣化する恐れのある金属器等の出土遺物の保存処理や出土土器の復元業務を実施している。また保存処理や土器復元を実施した遺物は、博物館等において展示・公開するなど活用を図っている。

ここでは、平成30年度に市三宅東遺跡^{いちまやひ}から出土した弥生土器の復元結果を以下のとおり報告する。

調査地	野洲市市三宅 800 番地 他
調査原因	工場建築
調査期間	平成30年9月28日～平成31年3月29日（現地調査） 平成31年4月1日～令和2年3月31日（遺物の洗浄、接合作業、土器、木器実測、製図等）
所収報告書	滋賀県野洲市教育委員会 2021『市三宅東遺跡発掘調査概要報告書』
土器復元品	市三宅東遺跡出土 弥生土器・壺 1点
業務委託先	株式会社文化財サービス
委託期間	令和4年6月24日～令和5年3月28日
処理工程	処理前調査、記録→解体→クリーニング→強化→接合復元→彩色→処理後写真撮影
使用材料	解体：アセトン 再接合：接着剤セメダインC（セルロース樹脂系接着剤） 破断面の補強・表面の補強：「バラロイド B72」（アクリル樹脂） 着色料：「アクリラ」ホルベイン工業（アクリル絵具）



図1 調査地位置図

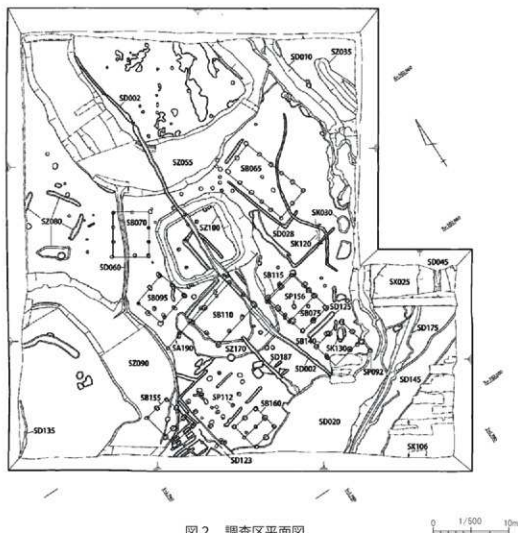


図2 調査区平面図

欠損部の復元：エポキシワーカーブルレジン WR-200

エポキシ樹脂同士の接合：シアノアクリレート系接着剤とエポキシ樹脂接着剤

遺物概要 今回復元業務を行った弥生土器・壺は SZ090 の下層から出土した。SZ090 は調査区南西隅で検出した大型の方形周溝墓であり、周溝の幅は 520 ～ 840cm、深さ 130 m を測り、墳丘長は南北長 20 m 以上と考えられる。主体部は検出されていない。出土遺物から最終埋没は奈良時代と考えられる。

当該資料は口径 30.0cm、高さ 80cm、胴部最大径 56cmを測る大型有段口縁の細頸甕である。総高に比して器壁が底部に至るまで厚さ 0.8cm～1.0cmと薄い。体部は外面下半にタタキ調整後、縦方向のヘラケズリ調整を施し、全面に縦方向のハケメ調整、内面に縦方向のハケメ後、上半にナデ調整を施し、内面上半にはユビオサエ痕がのこる。頸部には凹線文を施し、口縁部から胴部中位まで櫛描による直線文、刺突列点文、波状文、格子文で加飾する。当該資料の特徴としては以下のようなものがあげられる。

- ①土器破片が表面・裏面に剥離している場合があり、この表裏剥離は相当な面積に及ん

でいる。表裏剥離がなぜ発生したのかは不明であるが、粘土で土器を塑形した際に空気が入った、一度乾燥した面に上盛りした、焼成時の火の周りの不良があった、などが原因となった可能性がある。

②土器の焼成は柔らかいが、器面の土は大変緻密で砂粒等が少なく、また砂粒の剥落や落下がほとんど見られない。これは使用した粘土本来の性質であった可能性が高いが、丁寧に水庵されているか、あるいは泥汁のようなものを塗布している可能性も指摘できる。

③口縁側面には竹管紋を縦横に並べた装飾帯と線刻を縦横に配した装飾帯が交互に配され、実測の段階では6単位としている。この配置を今回の土器復元にあたり子細に検討した結果、等間隔での割付では6単位を配置する事は不可能で、(1)6単位配置し、そのうち1単位だけが狭い、(2)5単位配置し1単位だけが他より幅が広い、のどちらかであると考えられる。

なお、凸帯の一部に朱彩かもしれない部位があるが、ごく微量で石膏の汚損もあり確定は困難である。

まとめ 令和4年度は令和3年度に引き続き、市三宅東遺跡の弥生中期の大型周溝墓出土の弥生土器・壺1点について遺物復元業務を行った。復元作業が完了したことにより博物館等で展示することが可能となった。

令和5年4月22日～5月28日にかけて野洲市歴史民俗博物館（銅鐸博物館）において令和4年度埋蔵文化財発掘調査速報展を開催した。令和4年度に実施した市内の埋蔵文化財調査で主要な成果を歴史民俗博物館にて展示・公開するものであり、今回土器復元を実施した弥生土器壺は平成30年度に出土した遺物ではあるが、復元作業を実施したのが令和4年度であったため、令和3年度に復元した弥生土器壺と併せて展示を行った。来館者数は1000人以上を数えた。

当該資料は同時期の県内出土土器でも最大級の土器であり、弥生時代中期の大型周溝墓の性格、また市三宅東遺跡の位置づけを解明するうえで重要な資料である。今後も博物館等への展示や普及啓発活動等多様な活用供していく予定である。



S290 全景（北から）



速報展・展示風景



作業前①



作業前②



石膏解体



クリーニング後



接合検討



樹脂補填・接合



口縁部樹脂補填・接合



樹脂部品調整



着色



最終検査



完成①



完成②

第2章 福林寺磨崖仏に残る矢穴と中世近江における採石技法の展開

はじめに

野洲市小篠原に位置する福林寺磨崖仏には矢穴がみられる。本稿では矢穴について概要報告を行う。矢穴技法が日本で確認できるのは現在12世紀からで矢穴技法をつかう石工は比較的広範囲にいたと想定されるが矢穴を伴う採石痕を確認できる例は少数である。その中でも近江は比較的多まった資料があり矢穴の比較しやすい。中世段階の近江における矢穴の基礎資料を提示し比較することで福林寺磨崖仏の矢穴の位置づけを行い、同時に中世近江における矢穴技法の展開について考察を行う。

1. 福林寺跡磨崖仏

福林寺磨崖仏は野洲市小篠原531番地1外3筆に所在し、野洲中学校の北東側に位置する。福林寺は、現在の野洲中学校を中心とする地域にあった寺院で、天武天皇の時代の建立と伝えられ、白鳳時代の古瓦の出土がそれを裏付けている。平安時代には京都・東寺の末寺であったことが、東寺文書に取められた康和三年(1101)・長治元年(1104)・嘉承二年(1107)の宣旨によって知られ、これによると天武天皇の代に石城村宿禰が鎮護国家のために建立したという。以降詳しい寺歴は伝わらないが、御上神社所蔵両界曼荼羅の天文五年(1536)の裏書に同寺の名前が見えることから、この時代まで存続したことは確かである。また東側には福林寺古墳群が所在し、推定を含む6基の古墳が磨崖仏・石仏を囲うように立地する。

磨崖仏は4個の花崗岩の巨岩に合計33体の仏像が彫刻されている。石仏の周りには室町時代から江戸時代にかけての板碑、一石五輪塔や小石仏群が至る所に散在しており、ここがかつて庶民の墓地のようなところであったことを推測させる。周辺は後世の改変も考えられるが磨崖仏から北西側にかけてはゆるやかに傾斜している。

矢穴が確認できる磨崖仏は高さ2.0m以上、幅2.5m、奥行1.9mほどの巨岩に尊像が彫刻されたもので、磨崖仏群ではやや北西側の低地に位置し標高は122～123mを測る。地質では野洲花崗岩帯に位置する。矢穴が確認できる磨崖仏の西側、標高約120mでは東西約25m、南北約50mにわたって比較的平坦な平場となる。露岩であることや磨崖仏が正面に彫られていることから石材は原位置をとめていると考えられる。磨崖仏は尊像を取り囲むように舟形光背を深く掘りくぼめ、蓮華座に立つ観音立像1体(西側)と如

來立像2体(南側)を半肉彫りする。観音立像は蓮台を掛けており、髻を結う。観音立像から見て右下には斜め方向のノミの跡が確認できる。衣の裾は比較的深く彫られる。東側の如來立像は頭上や像に沿ってノミの痕が確認できることから製作途中と思われる。作風からみて室町時代ごろの造立と思われる【図3】【図4】【図5】。

2. 矢穴の特徴【図6】

磨崖仏で確認した矢穴の計測を行った。矢穴口長辺は10.6～12.0cm、深さは5.8～9.3cmを測る^①。矢穴間隔は2.0～8.0cmほどで、縦断面形状は船底を呈す。横断面はV字状を呈す。底部の調整は丁寧でなく、ノミの痕が随所に確認できる。矢穴口は隅丸の長方形となる。石材の上部から北西～南東方向に計11穴の矢穴が穿たれており、穿つ方向としては北側から4個はやや東側に穿たれ、少し間隔をあけたのちやや西側に穿たれる。平面形態としてみるとやや南西側に弧を描き、矢穴列は北側から3個ほどで屈曲部がある。風化面を飛ばすヤバトリは確認できない。

石材としては矢穴を穿ったのち半截には至っていない。南側では西側にむけ矢穴口が剥落していることから、矢打ちを行った矢、矢が効かなくなったことから放棄したと考えられる。

3. 矢穴の位置づけについて

(1) 先Aタイプの特徴

森岡秀人氏・藤川祐作氏は15世紀に登場する古Aタイプの矢穴に先駆ける存在として先Aタイプを設定した[森岡・藤川2008、森岡・藤川2011][図8]。特徴としては石造物に多くみられ矢穴口長辺7～13cmを測り、矢穴痕は浅いものが多く、U字状・舌状・船底状を呈する。矢穴口隅部は矩形をなす、隅取りがなく丸みを帯びる。矢穴彫成も甘いものが多く、全体的な統一感にかけるものが該当する[森岡2023]。

(2) 近江の先Aタイプのもの事例

近江における先Aタイプの矢穴については、中井均氏によって湖南市菩提寺に所在する南北朝時代の造立とみられる庵少菩提寺地藏菩薩像と、岩瀬谷古墳群に隣接する善水寺所在地蔵菩薩像の2件が紹介されている[中井2015]。また室町時代後期と思われる近江八幡市友定の板碑や[兼康1994]や鎌倉後期の天津市早尾神社板碑や蒲生郡川合願成寺の生安4年(1302)の水盤例なども知られている[森岡・坂田2005]。なかでも滋賀県湖南市正福寺岩瀬谷に所在す



図1 各城郭・寺院位置図
[国土地理院地図・傾斜量図より作成]

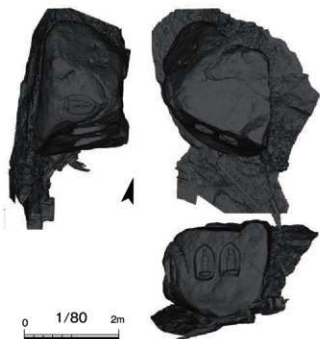


図3 福林寺摩崖仏



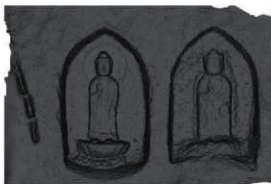
図2 福林寺摩崖仏位置図



図4 福林寺摩崖仏
・矢穴（南西から）



図5 観音立像と如来立像



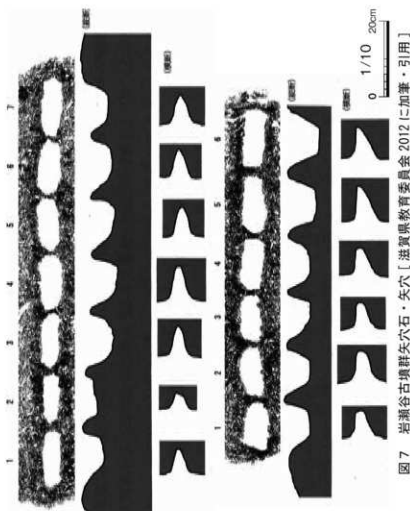
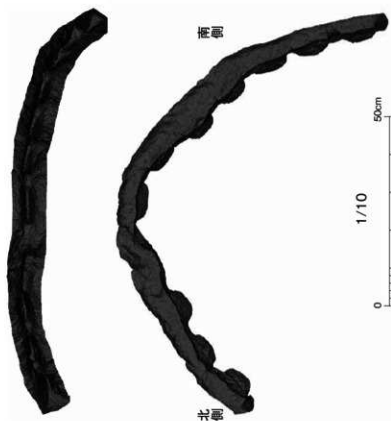


図7 岩瀬谷古墳群矢穴石・矢穴〔滋賀県教育委員会 2012 に加筆・引用〕



矢穴石 縦断面 横断面

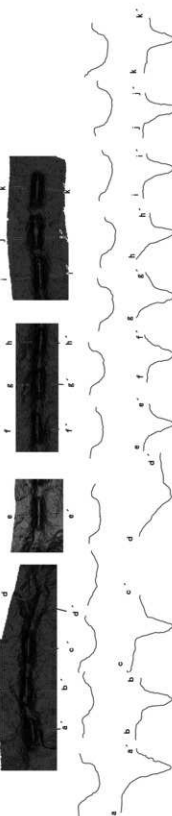


図6 福林寺摩崖仏・矢穴列

る岩瀬谷古墳群の河床では矢穴を2段に穿った石材が確認されている。辻川哲郎氏は隣接地出土遺物の年代観から矢穴について13世紀前後のものと推定する[辻川2012]。また13世紀でなくとも14世紀以降で中世の所産の可能性が坂本俊氏によって指摘されている[坂本2019]。

岩瀬谷古墳群矢穴の矢穴形状としては、横断面がV字の楔型で縦断面は船底状のものと同形状のものが混在している。矢穴口長辺は12.0～15.5cm程で、深さは4.2～9.0cm程を測る⁽²⁾。

近江の先Aタイプの矢穴について、矢穴口長辺にくらべ矢穴口短辺の割合が少ない【図9】。また深さは浅いものが多い。これは全国的な事例でも同じような様相である[森岡・藤川2008、佐藤2015、栗木2010]。【図10】から見るように7cm前後が平均的な深さとなる。深さが浅いのは基本的には転石などから応急的に剖面を得るための二分割や自然石からの部分採石を目的としていたからだと推定される。ただし岩瀬谷古墳群の矢穴石からわかるように厚い石材を裁断する場合でも矢穴の深さは変化していないということは留意される。

縦断面に関しては船底状のものが主体だが、底面が平坦で底角が鋭いものが混在する。

(3) 福林寺磨崖仏の矢穴の位置づけ

【図10】より矢穴口長辺と深さの法量の分布は岩瀬谷古墳群矢穴石等と一致する。横断面も楔状であり、森岡・藤川氏による分類の先Aタイプに該当すると思われる。

矢穴列は如来立像を避け矢穴が穿たれること、観音立像を切り出す意識があったことを合わせると如来立像を製作することと一連のもの可能性が高いと考えられ、中世後期のものと想定される。

矢穴が穿たれた順序を想定すると、矢穴列は南側の如来立像と10cmほどと近接している。観音立像と矢穴列の前後関係は明らかでないが、仮に矢穴列で半截を試みると近接する如来立像にも割れが入る可能性があることから観音立像を切り出すため矢穴を穿ったのち、分割を試みた後矢穴口が割落した後2体の如来立像を穿ったと思われる。そして如来立像は一体が製作途中のまま石材を放棄、または未完成ながら完成状態として信仰の対象となったと思われる。

4. 近江の中世における採石活動と採石技法について

矢穴技法による採石時の分割パターンは諸氏が各フィールドごとに類型化しているが[森岡・坂田2005、市川2015、佐藤2019、坂本2019]、本稿では栗岡氏の分類に従い、分割パターンについて再考す

る。なお、栗岡氏は1類は転石を母岩に単純に切断しただけで石材とするものでI-1類(半截型)、I-2類(整形分割型)、I-3類(輪切型)、II類は岩体肩部を随時切り落とす類型、III類は2度以上の分割を行うもので、直交する剖面を2面持つものをIII-1類、直交する剖面を3面以上持つものをIII-2類、平行する矢穴列を同時に穿つものをIII-3類、平行・直交する矢穴列を同時に穿つものをIII-4類、矢穴技法による剖面にさらに矢穴を穿って割るものをIII-5類、目的材の全面が剖面となるものをIII-6類とする。また同時に矢穴材・法量を比較することで近江における採石活動・採石技法について明らかにする。

(1) 長法寺【図12】

長法寺は滋賀県高島市鶴川に所在し、長法寺山の丘陵上に位置する。創建や廃絶した年代は不明であるが、開基は円仁と伝えられている。長法寺は室町時代には存在していたことは確かだが、中世のいずれのときにか廃絶していったとされている[下坂守・塚岡真弓1983]。長法寺は直線的に区画され、随所に石垣が確認できる。また石垣や転石には矢穴痕を有する石材が散見される。石垣石材は花崗岩である。矢穴石材の分布に偏りは見られない。なお北垣聡一郎氏は築石部の配石の仕方から16世紀前半ごろの技能者、穴太の技術と評価している[北垣2016]。

① 矢穴

矢穴口長辺は10.4cm～16.2cmを測り、比較的ばらつきがみられる【図25】。また深さ5.0cm～8.0cmほどで8cm以下に収まる【図11】。矢穴間隔は1.0～7.0cmほどでばらつきが見られる【図28】。一石あたりの矢穴数は2～6石と比較的ばらつきがある【図27】。

長法寺で確認できたのは石材半截後の矢穴痕のみで推定にはなるが、縦断面形状に関しては底が平坦を志向するもの、しないものがある。縦断面形状からすると先Aタイプの範疇であり、横断面形状はV字状を呈する。

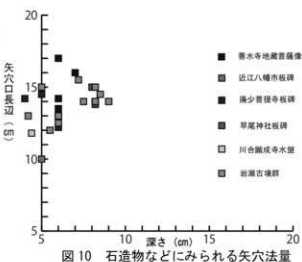
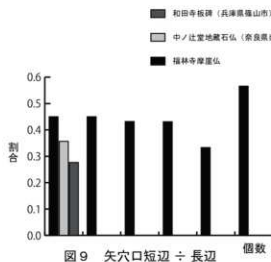
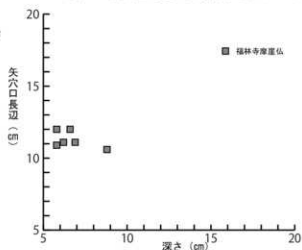
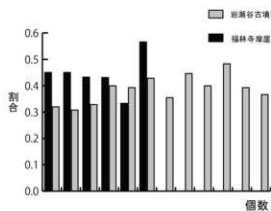
以上を踏まえると長法寺は山岳寺院でありながら古Aタイプの矢穴に先行する先Aタイプの矢穴が石垣石材にみられるという点で注目される。また石造物にも矢穴が見られることから[滋賀県2010]⁽³⁾、石造物から寺院石垣に矢穴技法をつかうようになったという点で橋渡しの存在に位置づけられる。ただし、矢穴石は数石しか確認できなかったように築石などはほとんどが自然石または割石であり、矢穴技法は副次的要素にすぎない。それは石垣構築のために矢穴技法を導入したわけではなく、石造物用に矢穴技法を使い裁断し

表1 福林寺摩崖仏・矢穴計測値

番号	矢穴口長辺(a)	矢穴口短辺(b)	深さ(c)	矢穴間隔(d)	備考
1	12.0	4.0	5.8		如來立像のほうから 南から
				2.0	
2	11.1	5.0	6.9		
				2.0	
3	11.1	4.8	6.2		
				2.8	
4	9.6+	3.7	9.3		
				3.7	
5	10.2+	3.6+	8.6		
				3.8+	
6	10.4+	5.0	5.8		
				4.0+	
7	10.9	4.7	5.8		
				8.0	
8	10.5+	3.0+	3.8+		
				2.0+	
9	11.0+	4.8	6.0		
				2.8+	
10	12.0	4.0	6.6		
				3.4+	
11	10.6	6.0	8.8		



図8 矢穴基本型式(森岡・藤川2008)



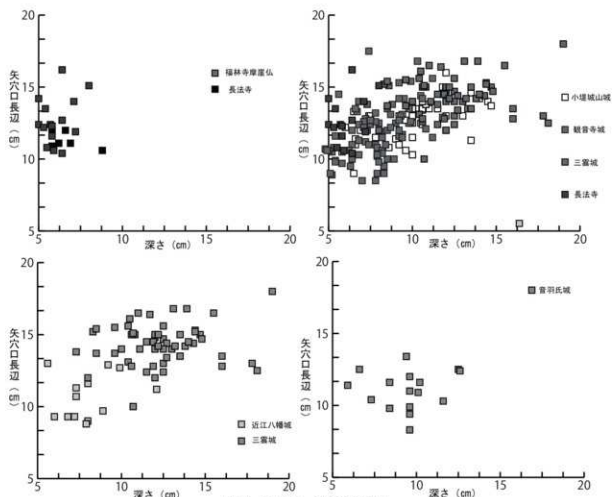


図 11 各城郭・寺院矢穴量



転石



石壇



矢穴痕と矢穴痕を伴わない断面を持つ石材



境内内の石遺物

図 12 長法寺境内

たのち、不必要になった刃材などを石垣に積んだなどの可能性が考えられる。

②採石技法

長法寺では採石対象となった母岩や矢穴は現時点では確認できない。一点転石として矢穴痕を伴う割石があるが、周辺にコッパや割石が見あたらないため、石垣からの崩落石として考えるのが妥当であろう。

矢穴痕を伴う石は少量であり、採石活動は小規模であったと考えられ丁場を形成していない。境内には露岩が多くみられ、転石から石を採石・切り出していたと考えられる。

石割工程について、転石を単純に切断する乗岡分類の1類を確認したが、複数の剖面を伴うものもある【図12】。石垣には割石が多く積まれているが基本的には矢穴を使わずに裁断している。また寺院内には石仏や石塔の一部が多数散在する。

(2) 小堤城山城

小堤城山城は滋賀県野洲市小堤に所在し、城主は六角氏の被官である永原氏と伝わる。廃城時期は1568年から1580年間であると考えられる【北原2008】。石垣がみられるが全体的に矢穴技法による石材の使用率は低く、石材の裁断面を石垣の表面としない場合も多い。対して曲輪Ⅳへの進入路脇の石垣は矢穴技法によって石材を裁断したのち裁断面を表面にだす石材が多く使用され、見せる石垣としての効果が見受けられる【福永2003】。

①矢穴

矢穴について、坂本俊氏と乗岡実氏の各氏による計測データの提示と考察がある【坂本2019、乗岡2023】。矢穴口長辺は9.0～16.0cmとやや幅があるが、12.0～13.0cmにピークがあり、大小の矢の使い分けはおこなっていないようである。深さは8.0～14.0cmである。矢穴間隔は3.5cm～7.5cmを測る。

縦断面は不揃いでありU字状のものが主体である。横断面形状は楔状で底が尖るもの（狭底型）、底に面を有するものがある⁽⁴⁾。【図24】のように同じ石材の隣り合う矢穴でU字状のものと楔状のものもみられる。また矢穴口は完存する例がないが、隅丸の矩形で若干短辺側に膨らむことが想定される。

②採石技法

1郭で採石対象となった母岩が確認できる【図15】。当石材は羊羹割により分割されたと考えられ、郭内で採石活動が行われたことが示唆される。石材の分布等から丁場は形成していない可能性が高い。

採石パターンとして羊羹割、平行分割、回転分割、均等二分割等がある。乗岡氏の分類では1類やⅢ類に

該当する。

(3) 観音寺城

観音寺城は滋賀県近江八幡市安土町に所在する。観音寺城は建武三年（1336）に山岳寺院観音寺を利用・取り込む形で六角氏が整備拠点を配備し、築城した。16世紀前半に整備が進み、永禄11年（1568）に織田信長の近江進行により廃絶されたとされる。「金剛輪寺下倉米銭下用帳」より観音寺城の石垣が弘治2年（1556）には築かれていたことが判明している。観音寺城が六角氏の居城として、石垣を多用した姿に整備されたのは、修築の記録が集中する1530年から1550年代のことと考えられ、石垣構築にあつては金剛輪寺の技術によったものであることが指摘されている【中井1996】。

観音寺城にも丘陵の南西側の尾根部に位置する大石垣、池田丸、南東側に位置する伊庭邸、伝御尾形、北西に位置する檜崎丸などの石垣に矢穴痕が見られ、石垣石材には湖東流紋岩を使用している。

①矢穴

観音寺城の矢穴長辺は8～17cmほどで、深さは10～12cmのものが多く、矢穴間隔は2.0cmから10.5cmで、4cm～5cmが主体となる。矢穴口短辺は6.2cm～6.5cmほどである。縦断面は船底状のものが多く、横断面形状は底広のU字状のものが多く、確認した限りではV字状のものは確認できない。矢穴口長辺を計測したところ、伝池田丸石垣の矢穴と大石垣の矢穴は大きさが類似していた。大石垣周辺で切り出した石材は伝池田丸にも供給されていたのであろう。

②採石技法

観音寺城の採石場所としては大石垣上郭内に採石痕を確認できるため、伊庭功氏により採石場と推定されている【伊庭2006】。その後の踏査により、上部斜面に割石や矢穴痕を伴う割石を多数確認した。【図17】では約0.6mの石材を切り出している。当該地点では上方地点の池田丸等の石垣や下方地点の大石垣等、採石場付近の石垣へ石材を供給していたと考えられる。採石パターンとしては均等二分割・回転分割が確認できる。

また伝伊庭邸付近にも採石場を確認している⁽⁵⁾。そのうち標高が高い地点を α 、 α より低い地点を β と呼称する。 α 地点では3.0mほどの自然石が点在しており、矢穴痕を伴う割石は2石確認できた【図18】。石材2は推定約1.5m程の石材を切り出している。また当該地点には石材3を中心として幅約5mの凹状地形となる箇所があり、推定であるが採石土坑とした。下方には自然石・割石ともにみられないため、標高の低

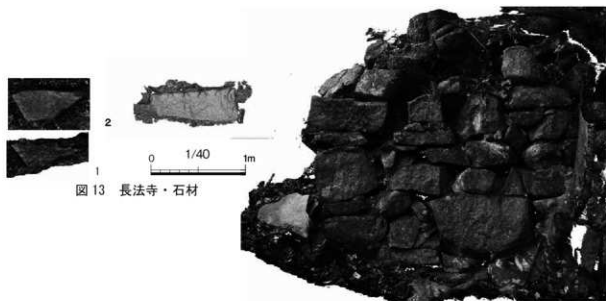


図 13 長法寺・石材



図 14 長法寺・虎口石垣



平行分割

1郭



半圓割

1郭



部分採石

1郭



均等二分割

豊城遺

図 15 小堤城山城・矢穴痕を伴う割石

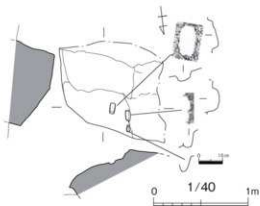


大石垣周辺



伝伊庭邸採石場周辺

図16 観音寺城・採石箇所
〔藤岡英礼氏作図 藤岡 2007 に加筆〕



大石垣上郭 石材4



大石垣上斜面 石材



大石垣上斜面 石材2・3



図17 大石垣上斜面 採石痕跡

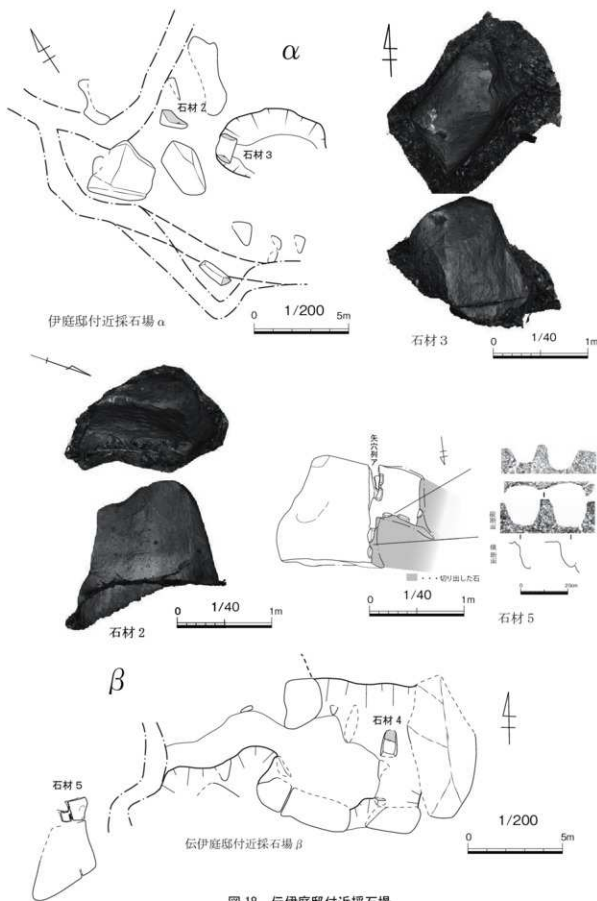


図 18 伝伊庭邸付近採石場

いところから高いところへと採石範囲を拡大していったとみられ、北側に残る自然石は採石範囲が及ばなかった、また何らかの理由で裁断されず残ったと考えられる。当地点は恒常的に丁場として稼働していたと考えられる。β地点は伝伊庭邸の石垣の南西側に位置する【図16】。平坦面を形成しており、矢穴痕を伴う割石は2石確認できた【図18】。石材5は小面が0.6×0.6mほどの石材を切り出しており、一つの母岩に二列以上の矢穴列を設定しているが、矢穴列Aは矢穴2穴を穿ったのち間隔をあけて2穴を穿つことから、石材をひとつずつ切り出していると判断される。当該地点は北側の矢穴痕がみられる伝伊庭邸の石垣までは10～20mほどの距離をはかる。石曳道等は明らかでないが、伝伊庭邸の石垣へ向けた採石場と考えられる⁽⁶⁾⁽⁷⁾。

伝伊庭邸で付近採石場での採石パターンとしては均等二分割（観音寺城技法）、複数に石材を分割するものがある。乗岡氏の分類ではⅡ類、Ⅲ-1類が該当する。

観音寺城では矢穴列を複数配列し、無駄なく石材全体の利用を意図した「全体採石」の出現がみられるという【坂本2019】。坂本氏の指摘のように石材5は全体採石の出現の証左⁽⁸⁾となる。

なお全体で見た場合では部分採石がほとんどである。基本的に矢打ちが成功した場合母岩は残らない。均等二分割により矢打ちが成功した場合、石材が2つ確保できるため両方の石材を利用するためである。しかし観音寺城では矢打ちが成功しているのにも関わらず残存した母岩が多い【図16】。このことから母岩からは基本的に一つの石材を切り出し、切り出した石をさらに分割・またはそのまま利用していたと想定でき、基本的には長法寺などと同じ部分採石が繰り返されることが考えられる。

(4) 三雲城

三雲城は滋賀県湖南市吉永に所在する。15世紀末に六角高頼の命令で三雲氏により築かれ、天正年間の廃絶まで三雲氏が城主を務めたとされる。石垣を多用しており石材の材質は花崗岩である。三雲城の矢穴について福永清治氏の報告が知られ、【福永2003】、その後伊庭功氏や乗岡実氏によって矢穴形状・法量の報告がされている【伊庭2012、乗岡2023】。なお石垣については櫛形虎口の存在から六角氏滅亡後に織豊系城郭に改変された結果との考えがある【木戸2006】。

①矢穴

矢穴間隔は3cmから4cmのものが多い。矢穴口長辺は10cm～10.8cmを測り、深さは7.3cm～19.0cmを

測る。縦断面形状は底が平坦なものの、船底状のものがある。また横断面形状はV字状で、深い位置で矢を利かせている。矢穴数は3穴が主体となるが、1～10穴まで広く分布する。

②採石技法

矢穴痕を伴う割石は基本的に石垣に見られるが、Ⅲ郭に転石として数石確認している。割石が一か所に集中していることから、石置き場としての機能が考えられるが、近代に周辺で採石活動が行われているため、近代の改変による可能性がある。

採石パターンとしては回転分割【図20】、均等二分割（観音寺城技法）、均等二分割（連続矢穴技法）が確認できる。また回転分割による割石が虎口に確認できる。乗岡氏の分類ではⅠ類も多いがⅢ-5類に一部到達する。

(5) 音羽氏城

近江の事例とは異なるが、近江周辺で矢穴痕が確認できる城郭として音羽氏城が挙げられる。三重県伊賀市に所在し、音羽氏の城とされる。音羽氏城の石垣は伊賀退却時の拠点として、六角氏が縄張に關与している可能性が指摘され、石垣の積み方について、三雲城や観音寺城・伝三国丸との共通性が指摘されている【福永2023】。

①矢穴

矢穴口長辺は8.3cm～13.4cmを測り、深さは9.6cm～12.6cmを測る。縦断面形状は底が船底状のものがある。横断面形状はV字状を呈す。矢穴口短辺は7.5cmほどである。

②採石技法

採石技法としては、均等二分割（連続矢穴技法）などがある。乗岡氏の分類ではⅠ類の他Ⅲ-4類に一部到達する。

(6) 近江八幡城東山腹採石場跡

近江八幡城は天正13年(1585)に築城が開始され、文禄4年(1595)に廃城となる。本丸から南東方向に下った尾根太平に岩石が露出している箇所があり、その岩石の数が所に矢穴痕を確認できる【近江八幡市教育委員会2008、林2014】。当採石場の矢穴は、矢穴口長辺と深さの分布域が近江八幡城の石垣石材の矢穴法量の分布域と整合することから【乗岡2023】、石垣石向けの採石場と想定される。

①矢穴

矢穴口長辺は8.8cm～13.0cmほどで、縦断面形状はU字状を呈す。深さは5.6cm～12.1cmほどで、矢穴間隔は3.1cm～14.1cmほどを測る。横断面形状は比較的底が広く、観音寺城の底広のものと近世のAタイプ



採石痕



石材5

図19 伝伊庭邸付近採石場

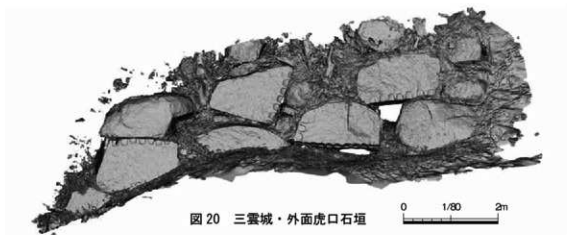


図20 三雲城・外面虎口石垣



図21 三雲城・内面虎口石垣

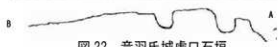
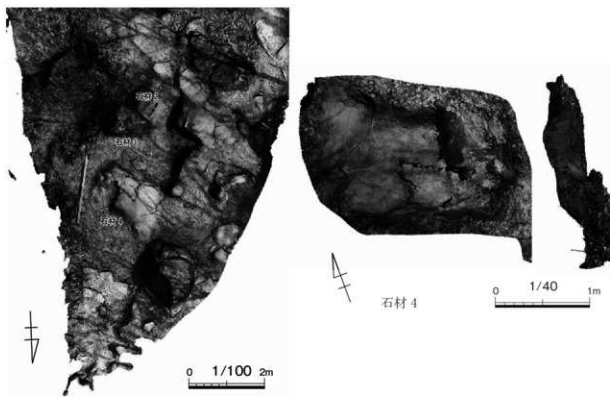
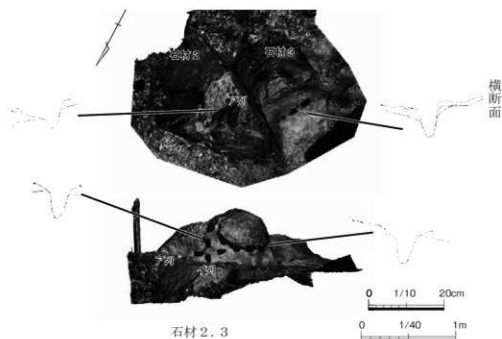


図22 音羽氏城虎口石垣



近江八幡城東山腹採石場跡



石材 2.3

図 23 近江八幡城 採石場

のものの中間的要素をもつ。

②採石技法

採石技法としては四分分割にする石材2【図23】、部分採石である石材3が確認できる。乗岡氏の分類ではⅠ類やⅢ—Ⅳ類などである。

あくまで地表に見えている部分での推測になるが、石材2は2列の矢穴列が直交し、石材3は1列、石材4は2列の矢穴列が確認できる。石材4は複数の石材の採取を目的としているが矢穴列が石材の端まで穿たれていないことから、石材全体を利用するのではなく、あくまで必要な数の石材、もしくは使用用途にあった石材のみを切り出していることがわかる。このことから全体採石への移行段階とも評価できる。

(7) 比較

以下、矢穴の形状や法量からみて各城郭・石切場の様相を比較する。

矢穴間隔【図28】としては三雲城、観音寺城、小堤城山城の順に間隔が広くなる。長法寺は間隔にまとまりがないが2cm前後と6cm前後にピークがある。

矢穴口長辺からは各城郭とも矢の大小の使い分けはしていないことが読み取れ、三雲城は14cmを測るものが登場し、かなり大きな矢が採用されている。また長法寺は矢穴口長辺に関して突出が認められず、比較的ばらつきがみられる。

一石あたりの矢穴数としては観音寺城は一石あたりの矢穴数が1個から2個が圧倒的に多い。小堤城山城も観音寺城と同様に矢穴数が1個から2個の矢穴数が主体を占めるが、矢穴数が3個から4個の石材がより多くなる。三雲城は一石あたり矢穴数3個が一番多く、観音寺城・小堤城山城には見られない矢穴数5個以上のものも見られる。音羽氏城は矢穴数が1個から4個で、長法寺は矢穴数が2個から6個であり、観音寺城のように矢穴数1から3個に集中するわけではない。

5. 近江における矢穴技法変遷【図31】

矢穴の深さについて、先Aタイプの矢穴は深さが浅く、ほとんどが7cm以内に収まる。また岩瀬谷古墳群矢穴石や福林寺磨崖仏の事例から石材の厚さによって矢の深さを変えているわけではないことがわかる。矢は深いところで力が効かないと矢穴口の剥落や意図しない割れが発生してしまう。そこには石の深くで力を利かせるといふことよりも、応急的に石材に適した石を切り出すという意識があると思われる。徳川期大坂城のように工期が限られ大量生産がとめられた状態ではないことが想定され、露岩から切り出す際など条件に応じて矢穴技法をつかっていたと判断される。

先Aタイプの矢穴口短辺は約3～7.5cmほどで後出する。または同時並行期の観音寺城等と比べると矢穴口短辺の幅は狭い。福林寺磨崖仏の矢穴口短辺の平均は4.7cm、岩瀬谷古墳群矢穴石は5.3cm程である。対し観音寺城では平均6.3cm、音羽氏城は7.5cmを測る。近江八幡城では平均5.8cmであり、天正期以前の矢穴は一時的に矢穴口短辺が広がり、やがて6cm以下に集約されると思われる。

また三雲城では密に大きな矢穴を連続的に穿つ。それは裁断する石材の厚みも関係し、文禄期のAタイプのものへの萌芽が見える。

矢穴口の形状としては小堤城山城、観音寺城、三雲城はすべて隅丸の矩形で、すこし膨らむ。残存する例は少ないが、観音寺城の矢穴口短辺は6～7cmほどである。石造物にみられる横長の矢穴よりも横に広がる楕円の印象を受ける。

矢穴の縦断面形状では、古Aタイプは個々の形状のばらつきが多いのが特徴である[森岡・藤川2008]。その中でも小堤城山城は観音寺城に比べ、形状において個々のばらつきが少ない。また三雲城は他の城郭と比較し、より矢穴底が広いものが多い。近江八幡城では縦断面に関して形状がそろい始め全体的に近似した形を示すようになり、近江における一種の到達点となる。

矢穴の横断面形状としては石造物に見られる矢穴や岩瀬谷古墳群矢穴石、長法寺の矢穴では横断面形状はV字状を呈するものがほとんどを占め、13～16世紀にかけて横断面形状はさほど変化していないと考えられる。矢穴横断面形状は楔状のものからコ字に変化していき[高田2016]、それに伴い巨大な石材を切り出すことが可能になるが、長法寺では石材が矢打ちに失敗せず半歳できている点には留意する必要がある。つまり割れるのであれば一定の厚さの石材なら掘る労力が少ない分楔状のほうが効率がよい。後出する観音寺城などではより裁断する石材が厚くなるのと同時にU字状の広底型の横断面となっていることから、この段階で一定の大きさの石材裁断にむけた試行錯誤の様相がみてとれる。小堤城山城・観音寺城は先述したように狭底型のもの、広底型のものが見られる。矢穴壁も両側が均等の形状・角度を示されないものも多く、矢割をする際かなり矢がふらついたことが考えられる。

小堤城山城や観音寺城は割れそこないの石材が多く、横断面形状を復元できる事例が多く存在した。対して三雲城は深く、底が狭いため、より大きく先端が細い矢を使っていたのであろう。縦断面も広底型のもの

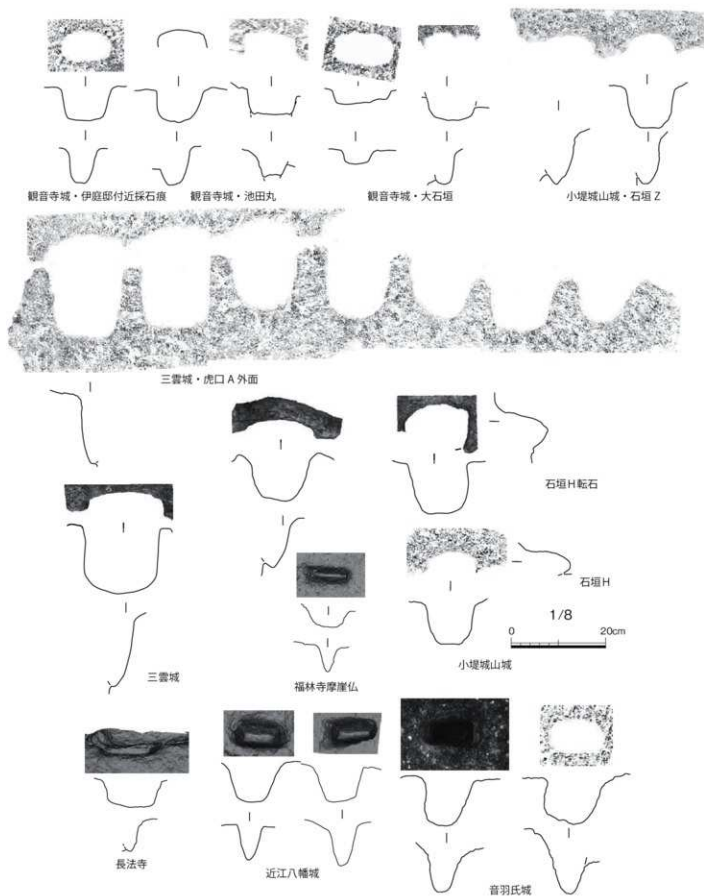


图 24 矢穴形状

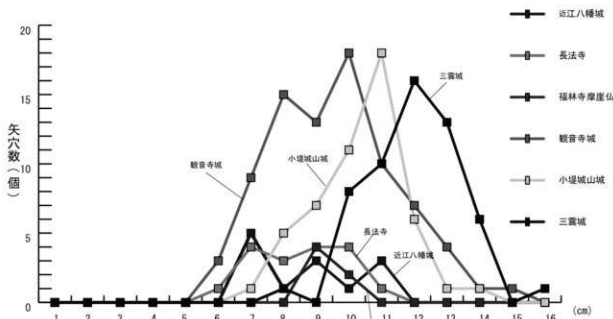


図25 矢穴口長辺比較図

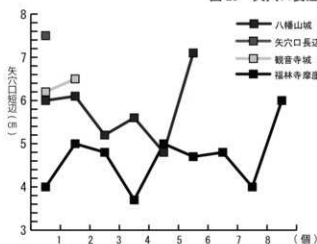


図26 矢穴口短辺比較図

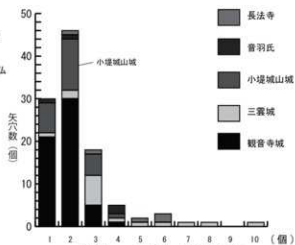


図27 一石当たりの矢穴数

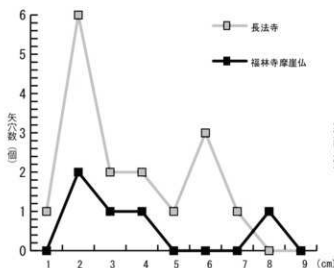
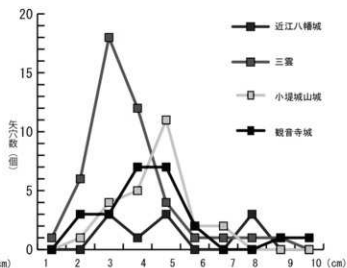


図28 矢穴間隔比較図



のとなり矢が接触しないよう矢底の調整を行っている。三雲城では石材の意図しない方向への割れも確認できず、目的とした石材を裁断できている。近江八幡城では観音寺城等と比べると矢穴底から矢穴口への広がりを感じられなくなり、横断面を重ね合わせると形状の統一が図られている。

まとめると近江における先AタイプからAタイプへの変化としては、横断面がV字状で、比較的小さな石材を割っていたのが石垣における築石の巨大化、またみせる石垣の出現等の理由により、より深い位置で力を加え石材を確実に裁断するため観音寺城から小堤城山城、三雲城等で矢穴深さが深くなる。横断面形状は栗岡氏が指摘するように〔栗岡2023〕、観音寺城段階では広底型が主体であるが小堤城山城などでは広底型のみものと狭底型のものが併存する。三雲城段階で矢がふらつかないよう矢穴底への意識が顕在化し縦断面は全体的に底が広底型の逆台形状になる。また労力等の簡便化が図られ、天正～慶長期の近江八幡城では矢穴法量が小さくなり矢穴形態の統一が進みつつあるが矢穴口の四隅・矢穴底が鋭角になりきっていないことから古AタイプとAタイプ両方の属性を持つ。Aタイプの確実な出現は木幡山伏見城の石垣普請の段階とされており〔坂本2019〕、Aタイプに移行段階のものにとらえられる。なおAタイプの範疇でも両形状の矢穴が併存する場合もあること指摘されている〔森岡・藤川2011〕。

矢穴間隔としても密なものから効率化の影響が間隔が比較的広くなる傾向が見て取れる。

先Aタイプ・古Aタイプの特徴として矢穴列が不揃いで蛇行していることが挙げられる。近江八幡城段階でも比較的蛇行しており矢穴軸は設定していないと考えられる。ただし岩瀬谷古墳群矢穴石など比較的軸がばらつかない例があることに留意する必要がある。

観音寺城・大石垣の石材には石の目と逆に割れている例がある〔図30〕。技術として観音寺城では石の目に沿っていないことから、石材を「矢穴を使い割れる」という考えは持っているが、割石に対し矢穴痕をとまなう石が圧倒的に少ないことから、北原氏が述べるように矢穴を使うことはあくまで補助的な手段〔北原2008〕であり、石目まで意識されていない可能性がある。

採石技法としては栗岡氏の分類に従うと〔栗岡2023〕、石造物などではⅠ～Ⅰ類などであったが長法寺では矢穴列を設定していないものの、石材を半裁したのち矢穴列を穿つ例がある。後出する、または並

行する観音寺城段階では矢穴列が2列以上確認できる例が確認できるようになり、小堤城山城・三雲城ではさらに矢穴技法により断面を形成したのちさらに矢穴を穿つ例（Ⅲ～Ⅴ類）が一部確認できるようになる。Ⅲ～Ⅴ類は石材の利用範囲が広がったことを意味しており、これは石材の需要に対応すると思われる作業工程も複雑化している。Ⅲ～Ⅴ類に対応する回転分割技法は肥前名古屋城では確認できている、複数矢穴列を設定している例も見られる^{〔12〕}〔市川2007、2010〕。

6. 作業風景の復元における一試論

作業風景の復元にあたって、矢穴が何人の手により穿たれていたかということが重要になる^{〔13〕}。

森岡・坂田氏は徳川期大坂城に向けての採石場の一つである岩ヶ平石切丁場において11次調査で検出した刻印石1について石材が端から3つ、中央部で4つ掘られた段階で廃棄されていることから一つの矢穴列に少なくとも2人の石工が携わっていることが容易に想定されるとしている〔森岡・坂田2005〕。また岩ヶ平石切丁場跡A地区53号石材において、矢穴列中央付近で矢穴の矢穴口長辺や深さが明瞭に変わることから、両サイドから別々の石工が同時にほり進めている作業の結果と考えており、一石の母岩に携わる小単位集団や現場分業体制を把握できる視点として今後の問題提起としている〔森岡・坂田2005〕。また、三瓶氏は、江戸城にむけて開発された神奈川西部の石切丁場においても、矢穴を穿つ作業が複数数の手により同時並行的に行われていることを指摘している〔三瓶2015〕。

高田氏は黒田家が採石したことが文献史料で確認できる岩谷石切丁場の石材225の様相から作業者の一人単位の作業単位は矢穴3～4個であると、多人数を特定石材に集中的に投下し、短期間に石材を採石する様子を明らかにしている。また、矢穴の縦断面形状から、作業者個人による技術のバラつきを指摘した〔高田2015〕。

奥田氏は交野山の石切丁場の矢穴石を観察したところ、矢穴は二人によってあけられたとし、うち一人は新米かへたくそな石工と結論づけている〔奥田2017〕。ここでも作業者によって技量の差があるということを示唆している^{〔14〕}。

松田氏は小豆島の八人丁場にて、3つおきに掘りかけで残存する石材から複数の職人が互い違いに向かい合った状態で並んでいたと推定しており、一人の担当分が連続する3つの矢穴であると結論づけている〔松田2018〕。また同氏は19世紀の石切図屏風や高度成長期までの石切丁場の光景から、並んで作業するのではなく、互いに向かい合うことで空間を確保し、効率



図29 失敗した石材（伝伊庭邸付近採石場・石材4）



図30 観音寺域・石の目と逆に割れている石材

	横断面形状			部分採石	全体採石	矢穴列の数			分割回数	棄置分類
	V字状	広底型	狭底型			1	2	3	12(回転採石含む)	
鈴瀬谷古墳群	○			○		○	○			Ⅱ-3
福林寺摩崖仏	○			○		○				Ⅱ
長法寺	○			○		○				Ⅰ-1
観音寺域		○		○	△	○	○	○	○	Ⅰ-1, Ⅰ-2, Ⅱ, Ⅲ-1など
小塚城山城		○	○	○	△	○	○	○	○	Ⅰ-1, Ⅰ-2, Ⅲ-1類, Ⅲ-3類など
三雲城			○	○	△	○	○	○	○	Ⅰ類, Ⅲ-5類など
曾羽氏城		○		○	△	○	○	○		Ⅰ-1類, Ⅲ-4類など
近江八幡城			○	○	△	○	○	○	?	Ⅰ類, Ⅲ-2類, Ⅲ-4類など

図31 変遷図・採石技法



石材1~4 南東から



石材2~8 北西から

図32 龍間石切場

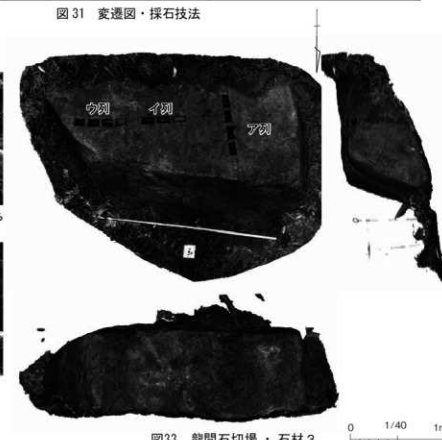


図33 龍間石切場・石材3

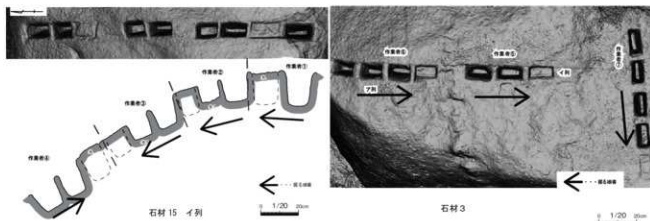


図34 龍間石切場・石材15・石材3



図35 龍間石切場・石材3 横断面形状

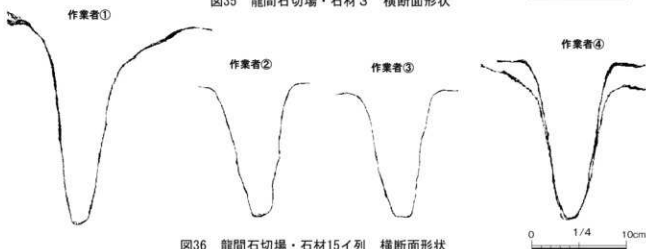


図36 龍間石切場・石材15列 横断面形状

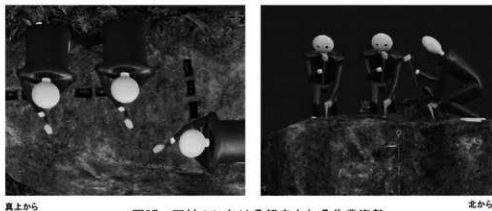


図37 石材3における想定される作業姿勢

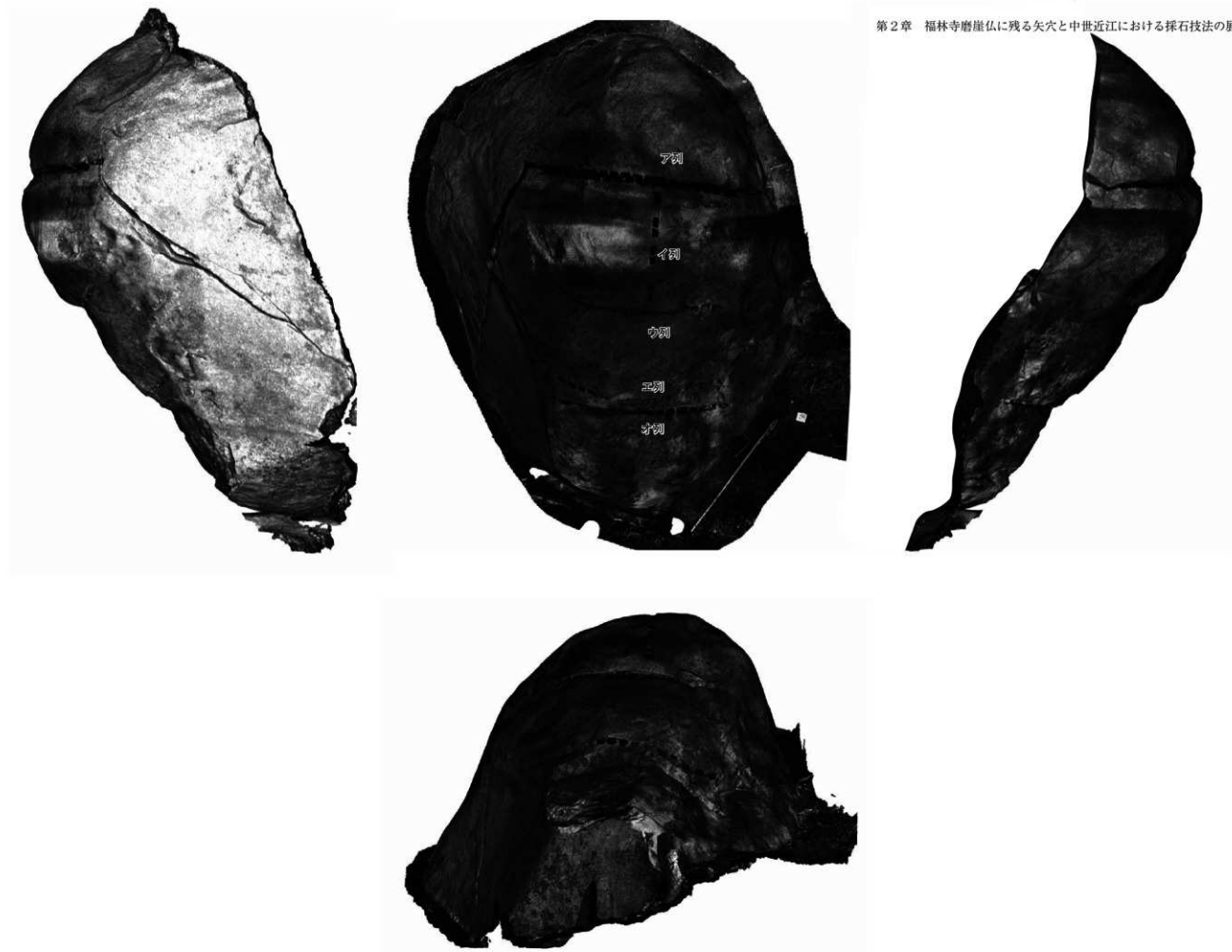


図38 龍間石切場・石材15

的に作業を進めるとし、さらに各職人に同じ数の矢穴を割り当てることでお互いの競争心をあおる効果もあったと具体的な作業風景についてさらに言及している[松田 2019]。

北野博司氏は文献資料と小豆島岩谷石丁場による残石から矢穴廻りの作業実態と労働生産を明らかにした[北野 2021]。北野氏は4人編成を基本とする石切組の存在を想定し、作業者が狭いスペースの中でおおむね等分された矢穴数を一定方向に掘っていったとし、窮屈な作業形態が矢穴形状や道具の規格化を促したと結論づけている。

以上をまとめると、徳川期大坂城や江戸城など近世段階では一石に複数人が作業していたことが指摘されつつあり、文献資料と照らし合わせることで具体的な石切場の様相が明らかになりつつある。中でも北野氏の研究は作業体制に迫った一つの到達点として注目される。

一方、中世の矢穴技法に関して中世の採石事例の確認例が少ないことも相まって、作業単位などは不明である。また彫りかけの矢穴が均等に配され残存しない場合も多い。しかし中世においても近世の事例から各作業者のくせをよみとることで汎用的に作業体制を復元することが可能であると考えられる。作業体制を復元することで一石あたりの集中度や採石活動の活発性を知ることができる。またそのために比較的良好に石切場が残存しており、作業工程がわかる龍間石切場B地点と奥山刻印群五枚岩の穿孔途中の矢穴から作業者のくせを読み取り、どこから作業単位が抽出できるかにについて検討を行う。

(1) 龍間石切場B地点

龍間石切場は大阪府大東市に位置する。なかでも龍間B地点は分銅、輪違いの刻印が認められ刻印から堀尾山城守の石切丁場と想定される[残念石研究会 2021・坂本 2022]。当地点は大阪城再築に伴う丁場であると考えられると同時に穿孔途中の矢穴が認められる石材や分割前の石材が集中する様子から石材の搬出までの過程をうかがうことができる。

龍間石切丁場B地点では担当が判断できる石材が確認できる⁽¹⁵⁾⁽¹⁶⁾。石材3は龍間B地点の北端に位置する。長軸2.6m、短軸1.2m以上を測り、矢穴列がT字状に設定される。掘削途中の矢穴列が配置されていることから最終段階で3人が作業に従事していたと考えられる⁽¹⁷⁾。なお、人員の配置としては【図37】のような光景が想定される。

石材15は龍間B地点の北端、標高約279m地点に位置する。長軸6.7m、短軸4.9mを測り【図38】、

龍間石切丁場最大の石材である。南からA列～O列の5列の矢穴列が設定されている。意図しない方向に亀裂が入っている箇所が多くあり、放棄に至ったと考えられる。

石材15・イ列、石材3では、矢穴は周縁に沿って掘り進めるため、底が浅く周縁にノミの痕が確認できるものは完掘していないと判断できる。また、均等によりかけの矢穴があるため、同時並行的に作業が行われたことは明らかである。そしてほろ速に違いはあるが、最終段階には現在穿孔途中の矢穴がある場所に作業者がいたことがわかる。この前提条件を踏まえたうえで、同じ作業区内で矢穴の形状が一致し、かつ作業区同士で差異が見あたる箇所が作業者のくせと判断できる。なお、石材3は一人当たりの担当分の矢穴は5個、石材15は一人当たり2～3個となり、明確に一人当たりの作業量が設けられていたわけではないことがわかる。

作業区同士の分析にあたり、矢穴横断面の形状に注目した。石材3の作業区⑦の矢穴は外側に膨らみ形状を呈し、作業区⑤の矢穴は逆台形状を呈し平坦な矢穴底を有する。作業区⑥の矢穴は内側に膨らむ形状である。横断面形状は作業区ごとに形状の違いがみられ、また同じ作業区は重ね合わせが一致することから横断面形状に作業者の差異が表れているように見える【図35】。また石材15のイ列に関しては矢穴壁が直線となるものと矢穴壁がカーブを描くものに分類でき、作業区ごとに形状の差異がみられる【図36】。以上のことから矢穴底の有無と矢穴壁の形状を見ることで作業区同士の分類できると想定した。またこれは掘削途中のものだけではなく、矢穴列の横断面から何人単位で作業していたかが想定できることを意味している。

横断面からは石材1【図42】は3人で作業していたと考えられ(5・3・7)【図43・44】、石材2でも3人で作業している【図45】。石材3では3人で作業しており(5・5・5)【図35・37】、石材4⁽¹⁸⁾は密接した状況から一列ずつ矢穴を穿つと考えられる【図39】。

また、A列は4人以上(4・3・4・2以上)、B列は5人以上(4・2・2・4・2)作業している【図40・41】。なお横断面形状からA列とB列は別の作業区であったと考えられる⁽¹⁵⁾。

(2) 奥山刻印群・五枚岩

奥山刻印群は兵庫県芦屋市に位置する、大坂城へ向けての採石場である東六甲採石場の一つである。奥山刻印群はA地区からM地区まで石材集積区が認められ、五枚岩はB地区に存在する。B地区では福井藩松



図39 石材4

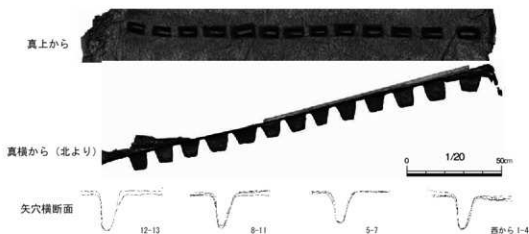


図40 石材4 A列

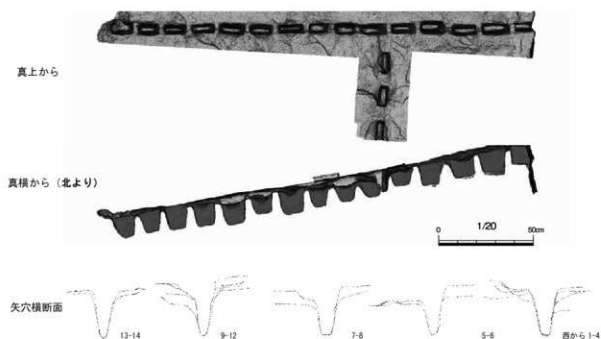


図41 石材4 B列



図 42 龍間石切場・石材 1



図 43 龍間石切場・石材 1・矢穴横断面

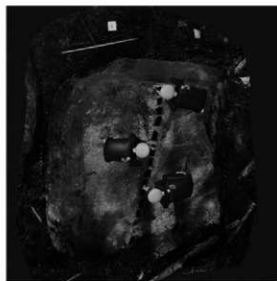


図 44 龍間石切場・石材 1・人員配置図



図 45 龍間石切場・石材 2・矢穴横断面



北西から

清掃前



北西から

清掃後

図 46 奥山刻印群・五枚岩

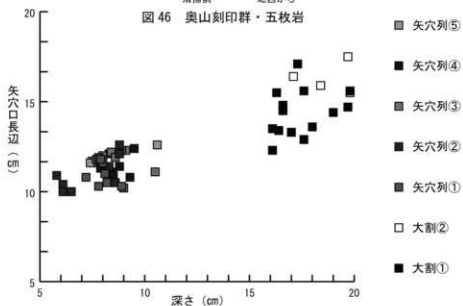


図 47 奥山刻印群・五枚岩 矢穴法量

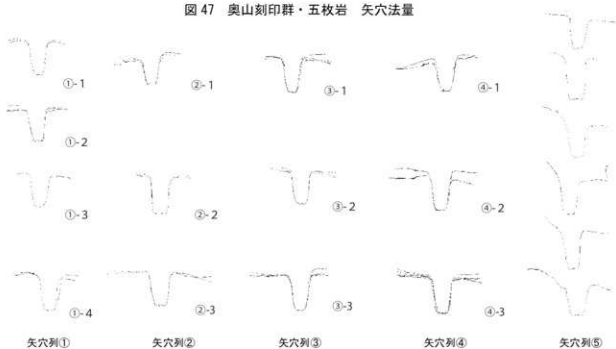


図 48 奥山刻印群・五枚岩 矢穴横断面形状

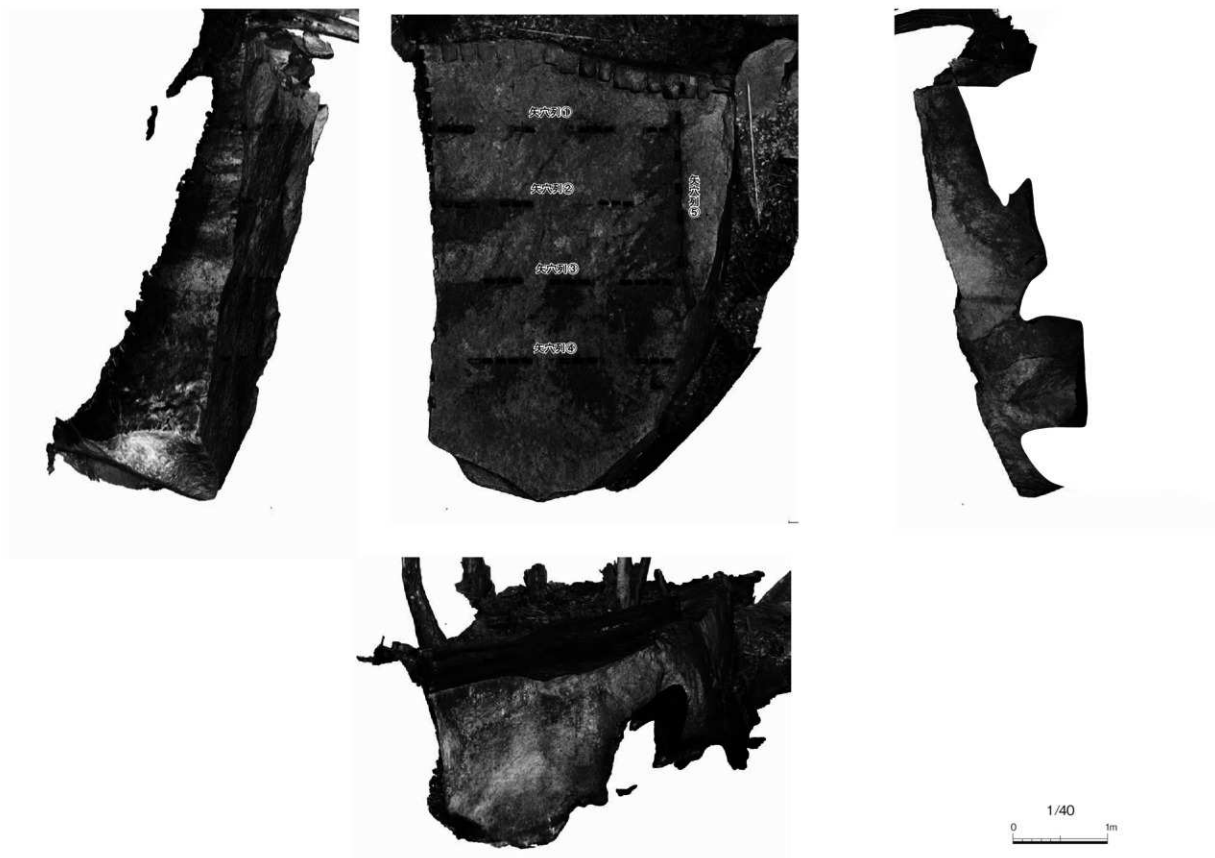


図49 奥山刻印群・五枚岩

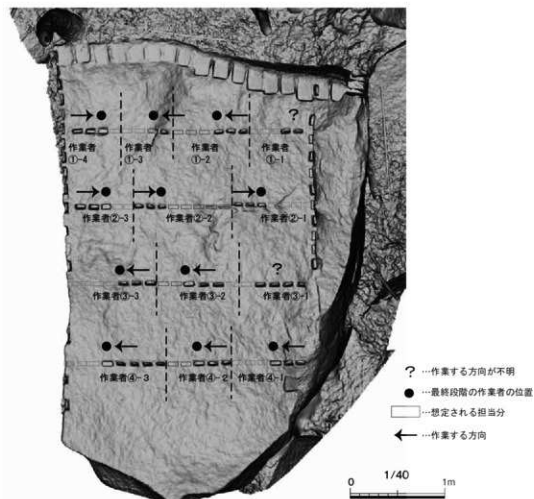


図50 奥山刻印群・五枚岩

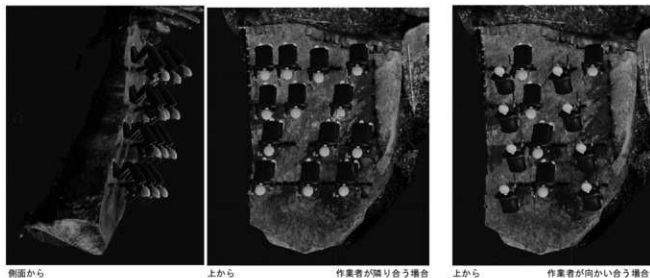


図51 奥山刻印群・五枚岩 作業風景

平家の刻印等がみられ〔藤川 1980〕、1620 年から始まる工期内での採石活動を行っていることがわかる。五枚岩⁽¹⁰⁾には北西から南東方向に4列、南西から北東方向に1列の矢穴列が残されており、①～④列には最終段階に13人が同時並行的に作業していたことを示している。五枚岩では明確に矢の大小を使い分けており〔高田 2019〕【図 47】、既に大割を終え、更に①～④列で分割を志している。

五枚岩において、矢穴の横断面形状は同じ作業区内ではほぼ一致した。さらに矢穴列②では②-1の矢穴は逆台形であり、②-2の矢穴は長方形である。②-3の矢穴は逆台形であるが②-1より若干大きい【図 48】。このように当該地点でも違う作業区では異なる形状を呈している。なお、一部は違う作業区でも似た形状の矢穴が見られた。このことから当該地点でも横断面形状で作業者の数が推定できることが判明した。また五枚岩からは、同じ石材でも複数列を担当する作業者が存在することが想定され、一人当たりの矢穴担当分は5～8個と龍岡石切丁場より数は多い。さらにある程度担当分に幅を持つことから当該地点においても明確に数を規定しているわけではないことがわかる。これらのことからその場で臨機応変にほろ箇所を変えている可能性がある。また、位置関係でいえば、作業者は隣り合っており、もしくは互いに向かい合った状態で作業している。

なお、北野氏の指摘するように作業スペースとしては窮屈であり、粉塵などの疑問もある〔北野 2021〕。しかし公儀普請により急ピッチで進められた採石活動では集中度を高めたほうが効率よく、大量の人員を投下し一気に作業を行う姿が石切丁場では想起される。

小結

作業者の差は横断面形状に表れることが判明した。高田氏は縦断面の立ち上がり角度に矢穴底の立ちあがり角度が作業者の間で差があるとし、作業者の「くせ」を指摘しているが、横断面形状により明確に作業者のくせがあらわれる可能性がある。

形状に差ができる要因としては手首の返しなどや力の強弱などの人の差と考えられる。また細かい視点で考えるとノミの先端の形状の差異なども表している可能性がある。

なお、作業者レベルの形状の差はあっても、基本的に形状は類似していることに留意する必要がある。

7. 福林寺磨崖仏の矢穴列からみる作業単位の復元

近世の事例から作業者の差は横断面形状に表れることが判明した。

では中世においても横断面形状から作業者の差が読み取れるのであろうか。

小堀城山城では同一石材でも横断面が異なる例がある。このことから中世段階では横断面を重視しておらず、未発達な様相が見られる。中世段階では最低限矢の形状に対応する矢穴を穿てていたと思われる。そのため横断面形状から作業者の差は抽出しにくい可能性がある。

横断面形状からではなく、ほかに作業者の数が推定できる点としては北側から4穴で矢穴を穿つ向きが変化している。また矢穴間隔も4～5穴目で変化していることから作業者が二人おりお互い端から矢穴を現場合わせでほり進んでいた可能性が指摘できる。その場合一人当たり作業量は5個ほどかと思われる。なお、作業者の向き・姿勢の変化によるものの可能性も否定できず、あくまで可能性にとどめておくべきであろう。近世になると石切技術の進展に伴い横断面が重要視されていくため同じ形状を志向していくが一方で長時間での作業や経験から知らず知らずのうちに手首の角度等の影響で作業者同士の差異も確認できるようになるのであろう。

まとめ

ここまで、中世近江・またその周辺における矢穴技法について概観し基礎資料を提示した。また矢穴横断面の形状から作業者が判別できる可能性を指摘し作業単位の復元をすることで作業風景の復元における一試論を示した。

福林寺磨崖仏について、大正11年(1922)に滋賀県保勝会が発行した『滋賀県史蹟名勝天然記念物調査概要報告』は四個の花こ岩に合計22体の立像が彫刻されていることを確認しているという〔野洲町 1987〕。またその時既に二つの石が「大阪地方に売却せられたり」と云うことを記録しているという。矢穴は石を売却する際に穿った可能性も考えられるが、矢穴口自体も風化もしていることから大正時代ではなく、形状や法量からも中世の採石痕跡と考えられる。

近江では連絡と矢穴技法を使う石工が中世段階で存在する。近江では先Aタイプの矢穴による採石が確認された事例は岩瀬谷古墳群の矢穴石など類例が少ないが、福林寺磨崖仏の矢穴は採石活動があったことを証左するものであり、観音寺域や小堀城山城に先行する・または同時期の矢穴として注目される。

なお、本論では近江八幡市馬淵町宇宮に所在する岩倉石切場や彦根市荒神山古墳群周辺の石切場については計測や考察を行っていない。近江の矢穴技法の変遷を考える上では資料不足は否めず、今後とも基礎的

資料を含めた調査と考察を行い、技術の諸相の解明を目指す必要がある。(渡邊)

謝辞

本論にあたって以下の方々に指導・ご協力いただきました。ここに礼申し上げます。
井上ひろ美、三宅正浩、三原彰吾、野洲市教育委員会の方々、木立雅朗、高正龍、長友友子、田中寿信(田中家石材)(順不同)

註

- (1) 磨崖仏と矢穴について、Sfm-MVSによる3D計測を行った。解析にはAgisoft社のMetashape standard版を使用し、編集にはCloudCompare、Blenderを用いた。また測量にあたり箱尺を映しこみ、ピンホールに水平の水糸をはりそれも映しこむことで3D画像からX・Y・Z軸がわかるようにした。
- (2) 岩瀬谷古墳群の矢穴石の実測図は1/20のスケールであるが、文章上の数値と整合しないことから1/10スケールの表記違いと思われる、1/10スケールとして実測図から数値の計測を行った。
- (3) 調査時には確認できなかった。
- (4) なお、横断面の形状について、乗岡氏も広底と狭底があることを指摘している[乗岡2023]。
- (5) 乗岡氏も伊庭部付近に採石痕跡が確認できることを指摘している[乗岡2023]。
- (6) なお、付近では近代においても採石活動があったようである。近代の矢穴と近いのは①矢穴が6cmと他の箇所の10cm以上する矢穴と明らかに大きさが異なる、②断面が輪縁で新しい様相を持つ③すべての面が断面となり直方体に加工されていたためである。
- (7) 大石垣周辺は数石から見つかっていないことから坂本氏の指摘するように石採場と呼ぶべきであろうが[坂本2019]、佐伊庭部付近では採石痕が確認できているだけで6石あり、平坦面を形成することから石切丁場と呼んでよさそうである。
- (8) 矢打ちに関しては、矢穴で行うというよりも截断する石材毎に矢打ちを行っている。
- (9) 徳川期大坂に向けての石切丁場と比較すると矢穴口短辺は狭いようである。
- (10) 矢穴が深さ10cmを超えている城郭があることに関して、乗岡氏は湖東流紋岩の岩質、矢穴されるにおける矢穴数の少なさを補完、断面の長さで密接に組み合った結果と見做せるとしている[乗岡2023]。
- (11) 石の目などの判断するため、彦根市の田中家石材の方に観音寺城や龍岡石切丁場等の石材の写真や3Dデータを送り見ていただいた上話を伺った。田中氏は若いころ数年間修行をされていたこともあり、石材に関する知識は豊富である。観音寺城では花崗岩でなく黒雲母流紋岩岩溶結晶灰岩(湖東流紋岩)の地質を基礎としており、矢穴痕がみられる石材も黒雲母流紋岩岩溶結晶灰岩である。当石材は非常に硬質で風化しにくいのが特徴である。
田中氏によれば黒雲母流紋岩岩溶結晶灰岩について、石材が層になっており、御影石のように加工に適した石材でないとのことであった。
また観音寺城・大石垣の石材は石の目と逆に割れているとのことであった【図89】。当石材は本来、縦目に沿って割るべきであ

- るが断面には横目が見えているためである。
- (12) 森岡氏は古Aタイプの矢穴について、基本回転分割などの高度な技術は導入されていないとしている[森岡2021]。
 - (13) なお、筆者は作業単位が横断面形状に現れるということは大坂府大東市善根寺の矢穴石で指摘している[残念研究会2021]。
 - (14) なお、なをもつて新米もしくはへたくそな石工としたかは明記されていない。
 - (15) 作業者の推定について、本稿では十分な調査成果を示していない。石材15や他の石材についても横断面を抽出している。石材15は多くの矢穴列が重なり残存することから作業工程を復原することが出来る。石材15は石材の風化部分を削り取るヤマトリを施した後、ア列を穿つ。また部分により小割も行う。イ列がア列を切るため、ア列のちイ列の前後関係が成り立つ。ア列は矢打ちで失敗し、不規則な亀裂が走っているため、イ列を設定する際他の列より深く穿っている。イ列は作業途中であり4人で作業したことがわかる(一人当たり2・3・3・3)。ウ列は矢穴口が剥落していることから矢打ちで失敗したと考えられる。横断面形状から5人で作業していたことが伺える。エ列でも、矢打ちを行った際、西側の矢穴口が剥落している。その上からヤマトリを施し、オ列を穿っている。なお、オ列は矢穴口が剥落していることから矢打ちで失敗していると考えられる。石材15では矢穴はより矢打ち→矢穴はりの工程を繰り返している。横断面の形状からはエ列では5〜6人が作業していたことが考えられる。
 - (16) 石材番号に関しては、残念研究会で呼称している石材番号と同一である。
 - (17) 作業者の方向・位置関係の解明に向けて身長158cmの人のモデルを3D制作ソフトであるBlenderで作成し、動かすことで姿勢を考察した。石材3では向かい合う作業だと作業スペースの都合上不可能なことから【図37】のような作業風景が想定される。
 - (18) また田中氏によれば龍岡石切丁場・石材4ではざらざらしている面に矢穴列を設定していることから石材は石の目に沿って割れているとのことであった。
 - (19) 角石は小面の長さが0.9〜1.5mほど必要であるが[森岡・坂田2005]、当石材はそれほどの大きさの石材を確保できないため、角石でなく築石用であったと思われる。

図版出典

岩瀬谷古墳群矢穴石の計測データは滋賀県教育委員会2010から、また中世石造物の矢穴(他)計測データは佐藤2015、中井2015、森岡・坂田2005の図・記載をもとに計測した。

参考文献

- 市川浩文 2007「名護城域周辺の石採り場跡について」『研究紀要』第13集 佐賀県立名護城域博物館
- 市川浩文 2010「近世城郭石垣における石割技術―肥前名護城域跡の矢穴調査―」『先史学・考古学論』V 龍岡考古会
- 市川浩文 2015「肥前名護城域の石切丁場とその石割技法について」『観音寺城跡』第15号 観音寺城跡研究会
- 伊庭功 2006「観音寺城跡に残る採石場(推定)と石垣の矢穴痕」『研究紀要』第12号 滋賀県立土城跡調査研究所
- 伊庭功 2014「湘南三雲城跡の石垣に残る矢穴痕」『淡海文化財論叢』第四輯 淡海文化財論叢刊行会
- 近江八幡市教育委員会 2008「八幡山城・北之庄城跡詳細測量調査報告書」近江八幡市埋蔵文化財発掘調査報告書42
- 奥田尚 2017「C 文野山の石切場跡」『石造物の石材研究』IX 考古石材の研究会
- 兼盛保明 1994「友定の板碑」『民俗文化』滋賀県民俗学

北田聖一郎 2016 「城郭石垣の構造的変遷と釜山近郊の倭城石垣」『釜山城郭』釜山博物館

北野博司 2021 「広義普請の採石活動と組織—大坂城石垣石丁場跡小豆島石丁場跡における採石作業の復元—」『歴史遺産研究』第15号 東北芸術工科大学歴史遺産学科

北野博司 2023 「史跡大坂城石垣丁場跡」分布調査報告—岩谷石丁場跡南谷丁場—『歴史遺産研究』第17号 東北芸術工科大学歴史遺産学科

北原治 2008 「矢穴考—観音寺城技法の提唱について—」『紀要』2 滋賀県文化財保護協会

北原治 2011 「矢穴考—八幡城跡にみる矢穴石材分割技法」『琵琶湖と地域文化』林博通先生追記記念論集刊行会

木戸重孝 2006 「三雲城」『近江の山城ベスト50を歩く』サンライズ出版

栗木崇 2010 「中世石造物にみる矢穴痕について」『中世東アジアにおける技術の交流と移転：モデル、人、技術』国立歴史民俗博物館

小林裕季 2013 「比良山系の山寺（2）—高島市長法寺遺跡について—」『紀要』第26号 滋賀県文化財保護協会

坂本俊 2016a 「中世から近世への採石技術の展開」『第2回 中世採石・加工技術研究会発表資料集』中世採石・加工技術研究会

坂本俊 2016b 「中近世移行期の採石・加工技術」『第3回中世採石・加工技術研究会発表資料集』中世採石・加工技術研究会

坂本俊 2019 「中近世移行期の採石・加工技術の諸相と技術平準化」『中世石工の考古学』高志書院

坂本俊 2021 「第4章 生駒山地西斜面石切丁場跡の外観 7 龍岡地区」『生駒山地西斜面石切丁場跡の研究—大坂城再築普請における生駒山石切場跡の考古学的調査—』

坂本俊 2022 「第3部 分布調査からみた生駒山の石切丁場」『史集 高松 第2号』高松市教育委員会

佐藤重幸 2015 「城郭石垣採石技術の成立—中世石造物研究からの視点—」『織豊城郭』第15号 織豊期城郭研究会

三瓶裕司 2015 「江戸城修築にかかると奈良川北西部域の石丁場」『江戸築城と伊豆石』江戸遺跡研究会

滋賀県教育委員会 2010 「埋蔵文化財活用パンフレット3（近江の山寺3 長法寺跡—高島市龍川）」

滋賀県教育委員会 2012 「岩瀬谷古墳群 湖南市正福寺」

下坂守・堀田直子 1983 「高島と延暦寺」『高島町史』高島町史編さん室

高田祐一 2016 「採石・加工技術研究における研究方法」『第3回 中世採石・加工技術研究会発表資料集』中世採石・加工技術研究会

高田祐一 2017 「近世石工石割技術および道具の復元的研究」『奈良文化財研究紀要 2017』奈良文化財研究所

高田祐一 2019 「矢穴研究の方法と可能性」『中世石工の考古学』高志書院

高田祐一 2023 「佐賀藩の巨石採石技術の変遷—慶長期佐賀城石垣・川上石丁場および元和・寛永期大坂城石垣・甲山石丁場の調査を通じて—」『公益財団法人鶴岡報効会研究助成研究報告書』第11号 公益財団法人鶴岡報効会

辻川哲郎 2012 「矢穴石—採石関連遺構」『岩瀬谷古墳群』滋賀県文化財保護協会、滋賀県教育委員会

中井均 1996 「安土城築城前後—主として寺院からみた石垣の系譜—」『織豊城郭』第3号 織豊期城郭研究会

中井均 2015 「近江における矢穴技法の展開」『織豊城郭』第15号 織豊期城郭研究会

中井均 2022 「戦国の城と石垣」高志書院

仲川靖・伊庭功・松下浩・上原幸徳 2012 「史跡観音寺城跡石垣基礎調査報告書—基台調査および伝本丸跡周辺の発掘調査—」

福永清治 2003 「小堀城山城・三雲城の縄張り構造と郡境域における六角氏の城郭運営について」『中世城郭研究』第17号 中世城郭研究会

福永清治 2005 「小堀城山城における石垣について」『野洲市歴史民俗博物館研究紀要』第11号 野洲市歴史民俗博物館

福永清治 2015 「小堀城山城・三雲城の縄張り構造と郡境域における六角氏の城郭運営について」『近江六角氏』戎光祥出版株式会社

福永清治 2023 「戦国期の城郭石垣と伊賀・甲賀の一役」『戦国の城と一役』高志書院

藤岡英弘 2007 「鶴山」『忘れられた室場をさぐる』2 栗木市教育委員会

藤川祐作 1980 「奥山印即」『芦屋市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表』芦屋市教育委員会

松田勝彦 2018 「現役石材採掘職人が見た大坂城石垣石切丁場跡」『国立歴史民俗博物館研究報告』第210号 国立歴史民俗博物館

望月悠佑・高田祐一 2011 「徳川大坂城における石切丁場の発達について」『歴史と神戸』第50巻 4号

森岡秀人 2021 「矢穴形式編年の考古学上の意義と年代観再考説」『滋賀県立大学考古学研究室論集』滋賀県立大学考古学研究室

二橋慶太郎 2022 「名古屋城跡石垣における矢穴形状の基礎的検討」『名古屋城調査研究センター研究紀要』第3号 名古屋城調査研究センター

栗岡実 2022 「城郭石垣の矢穴考」『岡山市埋蔵文化財センター研究紀要』第14号 岡山市教育委員会

栗岡実 2023 「松江城石垣の石材調達」『論集松江城』1 松江市

栗岡実 2023 「織豊期城郭に用いられた矢穴技法」『岡山市埋蔵文化財センター研究紀要』第15号 岡山市教育委員会

林明男 2014 「八幡山城築城採石場」『織豊期城郭の石切場』織豊期城郭研究会 2014年度 市民研究集会

森岡秀人・坂田 2005 「矢穴・矢穴痕の多様性と機能的配置づけについて」『岩ヶ平石切丁場跡』芦屋市教育委員会

森岡秀人・藤川祐作 2008 「矢穴の型式学」『古代学研究』180 古代学研究会

森岡秀人・藤川祐作 2011 「矢穴調査報告」『観安寺宝篋印塔修理報告書』大和郡山市教育委員会

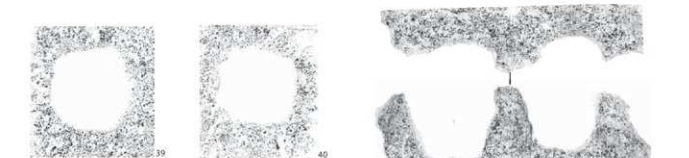
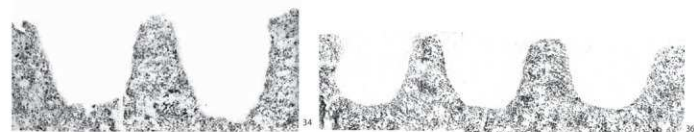
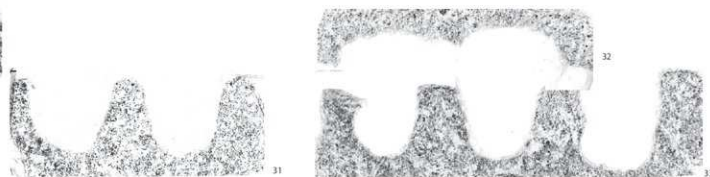
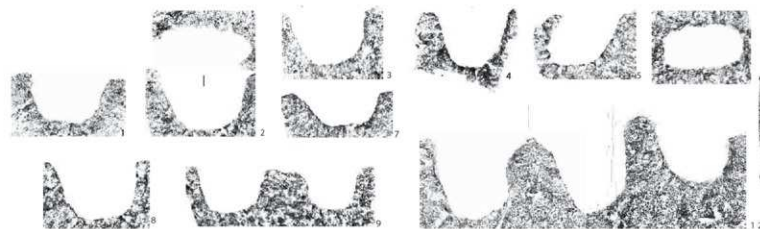
森岡秀人・天羽育子 2009 「丁場類型からみる花崗岩の石切丁場」『考古学の視点と石垣発掘の考古学 田原啓子先生追記記念論文集』田原啓子先生追記記念論文集刊行会

野洲町立歴史民俗資料館 1997 「地蔵・仏教美術と信仰—」

野洲町 1987 「野洲町史 第1巻 通史編1」

矢野定治郎 2023 「デジタル技術を活用した矢穴の記録方法」『奈良大学大学院研究年報 第28号』奈良大学大学院歴史遺産研究

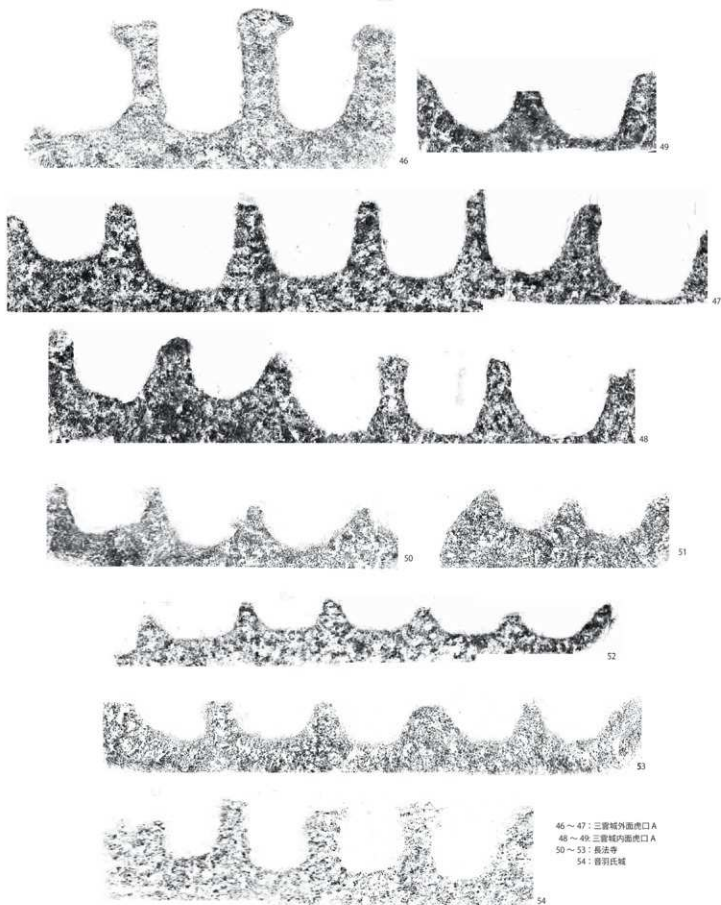
渡邊貴洋 2023 「第2章 小堀城山城の表探遺物について」『令和4年度野洲市文化財調査概要報告書』



- 12 裏面
3~6: 大石壇上の部 31~35: 城道
7, 8: 池田丸西側 36~38: 石垣 9
9, 10: 池田丸付添 39: 1 御膳西側
11: 御膳北側 40: 1 御膳西側
12: 大石壇切取 41: 石垣 4
13, 14: 大石壇切取 42: 石垣 1 一段目
15: 16: 御膳北側 43: 石垣 2
17: 大石壇切取 (上記小石壇切取)
18, 22: 池田丸 44: 大石壇
23: 御膳丸 45: 三寶城跡内池田口 A
24, 30: 大石壇 (上記+御膳寺跡)

0 1/6 40cm





1/6

0 20cm

第3章 五条遺跡第18次発掘調査出土遺物報告補遺

調査地 野洲市六条字八ノ宮374番地

調査原因 主中學校部室建築

調査期間 平成6年(1994)4月25日

～7月22日

本発掘調査の成果は、平成18年(2006)に『野洲市内遺跡発掘調査集報Ⅲ』に概要報告している。

しかしながら、概要報告には、出土遺物の大半が報告されないままであったため、ここに補遺する。

1. 出土遺物の概要

第18次調査では、Bトレンチ第1遺構面・第2遺構面の遺構及び各遺構面を覆う遺物包含層から整理用コンテナ約12箱分の土器・陶磁器類が出土した。遺物の年代は、ほぼ鎌倉時代を中心とする時期のもので、その他若干の古墳時代・奈良時代・室町時代以降のものを含む。遺物の多くは土師器の小皿・黒色土器の碗で、供膳形態にはその他若干の輸入青磁・白磁、東海系の山茶碗等に加わるが、東播系須恵器・常滑焼・信楽焼などの須恵器・陶器の捏鉢・甕と土師器・瓦質土器の鍋・釜類とともに、当地域の中世集落に一般的に見られる構成である。

以下、遺構および遺物包含層から出土した主要な遺物についてその概要を述べる。

2. 第1遺構面出土遺物

溝跡SD18101下層(図2-1～7)

土師器小皿、黒色土器碗、瓦質土器足釜、土師質土鉢が出土している。

土師器小皿(1)は口縁部をヨコナデして外反するもの。(2～4)は口縁部をヨコナデして短く立ち上がるもの。

黒色土器碗(5)は内面にラセン状のヘラミガキを施し、炭素吸着したA類。森氏の編年のⅡ・5段階(13世紀前葉)に属する。土師器小皿・黒色土器ともに器壁の摩滅が激しい。

瓦質土器(6)は三方に脚部の付く足釜の破片である。13世紀中頃のもの。(7)は土師質の大型管状土鉢で、曳網系のもの。

溝跡SD18101中層(図2-8～10)

黒色土器碗、近世陶器が出土している。

黒色土器(8)は小さな貼付高台をもつやや浅い碗である。内面に炭素を吸着したA類。内外面の摩滅が激しく、調整は不明。

(9・10)は近世の施釉陶器。(9)は削り出しの平高台で、体部外面には菊花状の凹凸があり、オリブ黄色の釉を施す。瀬戸・美濃窯系の鉢か。(10)は小さく窄まる口縁部の端部のみ無釉で、大きく膨らむ体部の外面には数条の凹線紋が施される。瀬戸・美濃窯系の水注か。

3. 第2遺構面出土遺物

井戸跡SE18201(図2-11～23)

SE18201からの出土遺物は井戸の掘形・最上層・井筒内に分けて取り上げている。掘形からは土師器の小皿・中皿が出土している。

土師器小皿(11・12)はほぼ扁平な底部からヨコナデして短い口縁部を作り出す13世紀代のもの。(13)は中皿で、外面指オサエした体部から屈曲して大きく開く口縁部を持つ14世紀代のもの。最上層からは土師器小皿、黒色土器碗が出土している。

土師器小皿(14～16)はいずれも口縁部をヨコナデしてやや内湾する13世紀代のもの。

黒色土器碗(18～20)はやや浅い形態で口縁部外面に横方向の体部内面にラセン状のヘラミガキを施す。底部(17)には退化した小さな貼り付け高台を持つ。(19)は内外面に共に炭素吸着するB類。他は内面のみ炭素吸着するA類。森氏の編年のⅢ・2～3段階(13世紀後葉～14世紀前葉)に属する。

井筒内からは土師器小皿と中世陶器の捏鉢が出土している。

土師器小皿(21・22)は口縁部をヨコナデして屈曲して立ち上がるもの。

常滑焼の鉢(23)は、体部外面下部をヘラケズリし、断面三角形のやや高い貼付高台を持つ。内面見込み部の摩滅が激しく、捏鉢として使用されたと考えられる。

井戸跡SE18202(図2-24～33)

土師器小皿と土鉢が出土している。

土師器小皿にはやや深い形態のもの(24・25)と、口縁部をヨコナデして大きく開く形態のもの(26)、幅の狭いヨコナデで口縁部を作り出す形態のもの(27～29)がある。

土鉢(30～33)は土師質で小型の管状刺網系のものの。

不明土坑SX18201(図2-34)

瓦質土器が1点出土している。三方に短い方形柱状の脚の付く火鉢の破片と思われる。

溝跡 SD18201 (図3-35～38)

土師器小皿と土鍾が出土。

土師器小皿(35・36)は外面指オサエする体部から屈曲して大きく開く口縁部の続く14世紀代のもの。土鍾は土師質の管状のもので、(37)は小型の刺網系、(38)は大型の刺網系のもので考えられる。

溝跡 SD18211 (図3-39・40)

土師器が出土。(39)は口縁部をヨコナデして内湾する小皿。(40)は大型の脚台付き皿の脚部。

溝跡 SD18213 (図3-41)

黒色土器が出土。碗(41)は口縁部内外面は横方向、体部内外面はラセン状のヘラミガキを施すもの。内面に炭素を吸着したA類。森氏の編年のⅡ-4～5段階(12世紀後葉～13世紀前葉)に属する。

溝跡 SD18206 (図3-42～54)

土師器の小皿・大皿、黒色土器の小皿・碗、須恵器が出土している。

土師器小皿(42)は、口縁部をヨコナデし外反する形態。(43～45)はやや深い形態で口縁部の内湾して終わるもの。(46～50)はやや浅い形態で、幅の狭いヨコナデで口縁部を作り出す。

土師器大皿(51)は、口縁部をヨコナデして内湾するもの。(52)は底部から屈曲して口縁部の立ち上がる形態。

黒色土器(53)は小皿で内外面ヘラミガキし、炭素を吸着する。(54)は碗の底部で断面四角形の貼付高台をもつ。見込み部はヘラミガキを施し、炭素吸着するA類。

溝跡 SD18203 (図3-55～82)

土師器小皿・中皿・大皿、黒色土器碗、信楽焼、青磁などが出土している。

土師器小皿(55～63)は器形的にはややバラエティーに富むが、概ね口縁部の幅狭くヨコナデして内湾する形態である。(64～69)は底部から屈曲して立ち上がる口縁部に続く13世紀代のもの。(70～72)はやや上げ底の底部から屈曲して大きく開く口縁部に続く14世紀代のもの。土師器中皿には、口縁部の屈曲して開くもの(73)と、ほぼまっすぐに開くもの(74)がある。

土師器大皿(75・76)は底部から屈曲して立ち上がる口縁部に続く形態。(77)は薄い器壁の外面を指オサエし、口縁部をヨコナデするもの。

黒色土器碗はやや深い形態のもの(78)と浅い形態のもの(79)がある。底部(80)は断面三角形の貼付高台をもつ。いずれも内面に炭素吸着したA類。森氏の編年のⅡ-5～Ⅲ-1段階(13世紀前葉～中葉)

に属する。

(81)は信楽焼で、内面の摩滅が激しく捏鉢の底部と思われる。

(82)は中国製輸入青磁碗。やや丸みを持った体部から外反する口縁部に続く。内外面に明緑灰色の釉を施す。龍泉窯系のものである。

溝跡 SD18208 (図4-83～88)

土師器小皿・大皿、黒色土器碗、土鍾が出土している。

土師器小皿(83～85)は口縁部をヨコナデして内湾する形態。13世紀代のもの。

土師器大皿(86)は口縁部をヨコナデして外反する形態。

黒色土器碗(87)は口縁部内外面は横方向、内面はラセン状のヘラミガキを施す。森氏の編年のⅡ-5段階(13世紀前葉)に属する。

(88)は土師質の刺網系小型管状土鍾。

溝跡 SD18207 (図4-89～99)

土師器小皿、黒色土器碗、土師器羽釜、緑釉陶器碗、土鍾などが出土している。

土師器小皿(89～94)はいずれも口縁部をヨコナデして内湾する形態。

黒色土器碗(95)は口縁部内外面に横方向、内面に斜方向のヘラミガキを施す。内面に炭素を吸着したA類。

(96)は土師器の羽釜で、内傾する口縁部の直下にやや低い鐙をもつ。13世紀前半のもの。

(97)は緑釉陶器の碗底部で、断面三角形の貼付高台をもつ。硬質焼成で緑灰色の釉を内外面に施す。高台内は無釉。底部に回転糸切りの痕が残る。森氏の編年によるⅡ-b段階(10世紀後葉)のもので、混入品と考えられる。

土鍾(98・99)はいずれも土師質で小型の管状のもの。刺網系。

溝跡 SD18205 (図4-100～125)

土師器小皿・大皿、黒色土器、瓦質土器、東播系須恵器、土鍾などが出土している。

土師器小皿(100・101)は口縁部に二段のヨコナデを施すもの。(102～111)は口縁部をヨコナデして内湾するもの。やや深い形態のものと浅く扁平な形態のものがある。(112・113)は外面指オサエするやや深い体部から屈曲して大きく開く口縁部に続くものの。

土師器大皿(114)は平らな底部から大きく内湾する口縁部に続くもの。

黒色土器(115)は碗の底部で断面三角形のやや外側に張り出す貼付高台を持つ。内面にはラセン状のヘ

ラミガキを施し、炭素を吸着する。

(116・117)は瓦質土器の足釜である。(116)は口縁部が内傾する形態。(117)は口縁部の内面に面を持つ形態で、外面には踵の直下から脚が付く。

(118)は瓦質土器の鍋で、口縁部はやや鋭い受口状を呈する。14世紀代のもの。

(119)は東播系須恵器の鉢。口縁端部を上下に拡張する、森田氏の編年の第IX期第1段階(13世紀中葉～後葉)に属する。

土鍾はいずれも土師質で管状のものであるが、小型で刺網系のもの(120～124)と大型で曳網系のもの(125)がある。

溝跡 SD18210 (図5-126～140)

下層からは土師器小皿・大皿、黒色土器小碗・碗、土鍾などが出土している。

土師器小皿(126)は口縁部をヨコナデしてやや外反するもの。(127～130)は口縁端部をヨコナデして短く立ち上がるもの。(131)はやや深い形態のもの。土師器中皿(132)は口縁部の真っすぐに終わるもの。黒色土器碗(133)は口縁部外面に横方向、体部内面にラセン状のヘラミガキを施すやや浅い形態。内外面共に炭素を吸着するB類で、森氏の編年のⅢ-1段階(13世紀中葉)に属する。(134)は小型の碗で内外面ともラセン状のヘラミガキを施し炭素を吸着するA類。

土鍾は土師質で小型管状の刺網系のもので2点出土した(139・140)。

上層からは土師器小皿・大皿、黒色土器碗が出土している。

土師器小皿(135)は指オサエした体部から大きく開く口縁部に続く形態のもの。土師器中皿(136)も体部から屈曲して大きく開く口縁部に続く形態のもの。

黒色土器(137・138)はいずれも碗の底部である。(137)は断面三角形の高台を、(138)は退化した小さな高台を貼り付けている。内面のみ炭素吸着したB類である。

溝跡 SD18209 (図5-141～143)

土師器小皿、黒色土器碗、輸入白磁碗が出土している。

土師器小皿(142)は口縁部をヨコナデし内湾するもの。黒色土器(141)は碗の底部で、外面にヘラ記号を持つ。(143)は中国華南地方からの輸入白磁碗の底部である。断面四角形の低い削出高台をも、底部付近を除く内外面に施釉する。大宰府での分類の白磁Ⅳ-1類にあたる。

Pt75 (図5-144・145)

土師器小皿、輸入白磁碗が出土している。

土師器小皿(144)は口縁部がやや外側に開く深めの形態のもの。完形品である。(145)は口縁部が玉縁状を呈する中国華南系の白磁碗である。大宰府での分類の白磁Ⅳ-1類にあたる。

Pt13 (図5-146～152)

土師器大皿、黒色土器碗、土師器羽釜が出土している。

土師器大皿(146)は、口縁部をヨコナデしてやや外側に開く形態。(147)は口縁部を2段ヨコナデし内湾する形態のものである。

黒色土器(148～151)はいずれも内面にラセン状のヘラミガキを施すものであるが、口縁部外面に横方向の、体部外面に放射状あるいはラセン状のヘラミガキを施すもの(148・149)、外面のヘラミガキが口縁部のみ施されるもの(151)、外面にはヘラミガキの認められないもの(150)がある。(151)のみ内外面炭素吸着するB類。他はいずれもA類である。森氏の分類のⅡ-3～Ⅱ-5段階(12世紀中葉～13世紀前葉)に相当する。

土師器羽釜(152)は内湾する口縁部の下方に低い踵を廻らすもの。外面には煤が付着している。

Pt14 (図5-153～165)

土師器小皿・大皿、黒色土器碗が出土している。

土師器小皿(153～158)はいずれも口縁部をヨコナデして短く立ち上がる形態。(159・160)はやや深めの形態で、(161)は口径が小さく深い形態である。ほぼ13世紀代におさまる。

土師器大皿(162)は底部がやや上げ底を呈し、大きく開く体部からやや内湾する口縁部に続く形態。器壁が非常に薄い。

黒色土器碗(163～164)は、口縁部外面に横方向の、内面にはラセン状のヘラミガキを施すものである。底部には断面三角形の低い高台を貼り付けている(163・165)。いずれも内面に炭素吸着するA類である。森氏の編年のⅢ-1段階(13世紀中葉)に属する。

Pt16 (図6-166～173)

土師器小皿・大皿、黒色土器碗が出土している。

土師器小皿(166～171)は口縁部をヨコナデして短く立ち上がるものである。大皿(172)は口縁部を二段ヨコナデするもの。器壁がやや厚い。

黒色土器碗(173)は、口径がやや小さく器壁も薄い形態。摩滅が激しく調整は不明。口縁部外面にヘラミガキがあったかと思われる。内面のみ炭素吸着するA類である。森氏の編年のⅢ-2段階(13世紀後葉)に属する。

Pit24 (図6-174～186)

土師器小皿・大皿・脚台付皿、黒色土器碗、土鍾が出土している。

土師器小皿(174)は口縁部をヨコナデして外反する形態。(175～181)は口縁部をヨコナデして短く立ち上がる形態のものである。いずれも13世紀代のもの。

(182)は土師器大皿で、内湾する口縁部を二段ヨコナデするもの。(183)は土師器脚台付皿の脚部である。内外面指オサエにより成形する。

(184)は黒色土器碗。口径はやや小さく、内面は板ナデののち粗いヘラミガキを施す。外面には指オサエ痕が残る。内面のみ炭素吸着するA類である。

(185・186)はいずれも土師質で紡錘形の管状土鍾である。曳網系のものである。

Pit405 (図6-187～199)

土師器小皿・大皿、黒色土器碗が出土している。

土師器小皿(187)は口縁部をヨコナデしてやや内湾するもの。(188～191)は口縁部をヨコナデする浅い形態のもの。

土師器大皿は器壁が厚く、深い形態のもの(192)と、器壁がやや薄く、口縁部をヨコナデして内湾する浅い形態のもの(193・194)がある。

黒色土器碗(195・196)は内面と口縁部外面にヘラミガキを施し、内面に炭素吸着するA類である。(195)は口径がやや小さい。底部(197・198)にはやや低い高台を貼り付けている。(199)は小型の黒色土器碗である。内外面にヘラミガキを施し、炭素吸着するB類である。

Pit404 (図6-200～204)

土師器小皿、黒色土器碗が出土している。

土師器小皿(200・202)はやや深い形態。(201・203)は口縁部をヨコナデして短く立ち上がる形態のもの。

黒色土器碗(204)は摩滅が激しく調整は不明であるが、口縁部内面に沈線を持ち、底部には断面三角形の貼付高台を持つ。内面のみ炭素吸着するA類である。

Pit358 (図6-205・206)

土師器小皿、黒色土器碗が出土している。

土師器小皿(205)は体部を指オサエし、口縁部はヨコナデして大きく開く形態のもの。完形品である。14世紀代のもの。

黒色土器碗(206)は、断面四角形のしっかりと外側に踏張る高台を貼り付けた底部から内湾して立ち上がる体部に続く形態。口縁部外面には横方向、外面には放射状のヘラミガキを施す。内面にはラセン状の織

密なヘラミガキを施す。内面のみ炭素吸着するA類。ほぼ完形品である。森氏の編年でⅡ・2段階(12世紀前葉)に属するもの。

Pit72 (図6-207～213)

土師質の土鍾が7点出土している。いずれも小型で管状を呈する。刺網系のものである。

4. 包含層出土遺物 (図7～8-214～288)

包含層には、土師器小皿・大皿、黒色土器碗、土師器羽釜、瓦質土器、陶器(常滑焼・信楽焼)、輸入青白磁、土師質土鍾など中世前半期に一般に見られる遺物のほかに、若干量の平安時代前期以前に遡る須恵器・土師器や近世の陶磁器類も含まれていた。

(214)は古墳時代の須恵器杯蓋である。

(215～221)は奈良～平安時代初頭の須恵器・土師器である。(215～218)は須恵器杯Bの蓋。(219)は須恵器で有高台の杯Bの底部。(220)は須恵器杯A。(221)は口縁部が内湾するいわゆる「近江型土師器」の長胴甕である。

(222～248)は土師器小皿である。(222)は口縁部を二段ヨコナデするもの。(223～244)は口縁部を一段ヨコナデするもので、口縁部がやや内湾して終わるものと、短く立ち上がる形態のものがある。いずれも13世紀代のもの。(245～248)はやや上げ底気味の底部から大きく開く口縁部に続く形態で、14世紀代のものである。

(249)は脚台付土師器の脚部である。

(250～259)は土師器の大皿である。(250～255)のように底部から体部が内湾して伸びるやや深い形態のものが多いが、(256～259)のように口縁部の大きく開く形態のものもある。

なかでも(258)は特に器壁が薄く、体部外面に指オサエを施すものである。

黒色土器(260・261)は、口縁部の大きく開くやや浅い形態の碗である。底部には低い高台を貼り付ける。内面のラセン状ヘラミガキは粗く、外面には(260)のみヘラミガキが施される。いずれも内面のみ炭素吸着するA類である。

(262)は緑釉陶器碗で、焼成は硬質で内外面にオリブ灰色の釉を施す。森氏の編年によるとⅡ・a段階(10世紀中葉)のもの。

(263)は東海系の山茶碗底部である。高台は低く接底部に糊圧痕が認められる。13世紀中頃のもの。

(264～267)は近世の陶磁器である。(264)は瀬戸・美濃系陶器の小皿。(265)は陶器の碗。外面に鉄釉で施紋。産地不明。(266・267)は肥前系磁器の碗。

(267) の見込部の軸は輪状に剥がれ、重ね焼きの痕跡かと思われる。

(268～271) は輸入青磁・白磁である。(268) は華南系白磁碗。(269) は華南系白磁碗の底部。内面には1条の沈線が廻り、高台は低く削り出す。底部外面は露胎。大宰府での分類の白磁Ⅳ-1類にあたる。(270) は龍泉窯系青磁の碗。(271) は龍泉窯系青磁の皿。内面に段をもつ。

(274) は古瀬戸系施軸陶器の折縁皿。藤沢良佑氏の編年の後Ⅱ期(1380～1420年)のもの。(275) も古瀬戸系施軸陶器で、片口が付き内面には卸目が認められる。藤沢氏の編年の後Ⅳ期(古)(1440～1460年)のもの。

(272) は常滑焼の鉢の底部。やや低い貼付高台をもち、外面の底部付近にはハラケズリを施す。(273・279) は信楽焼の甕。(279) は口縁部の形態より14世紀中葉のものと思われる。

(276) は土師器の羽釜。口縁部は内傾し、体部は大きく膨らむ。口縁部と体部の境に低い罫が廻る14世紀代のもの。

(277) は瓦質土器の足釜で、14世紀代のもの。(278) も瓦質土器で、甕かと思われる。体部外面に一部ハケ目が認められる。

(280～288) は土師質の土鍾である。(280～284) は大型あるいは中型で管状の支網系のもの。(285～288) は小型の管状で刺網系のものである。

この他、図化できなかったが類部に柳描直線文をほどこす弥生時代第Ⅱ様式の広口壺の破片が出土している。

(國分分子)

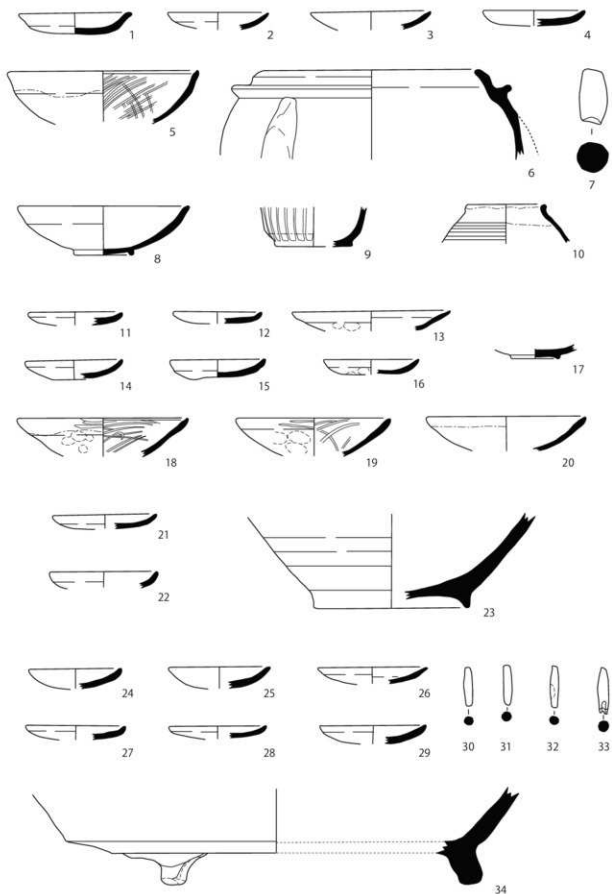
(平成6年(1994)12月脱稿)

備考

本補遺に掲載した図版類の作成および編集は、野洲市教育委員会事務局文化財保護課が行った。

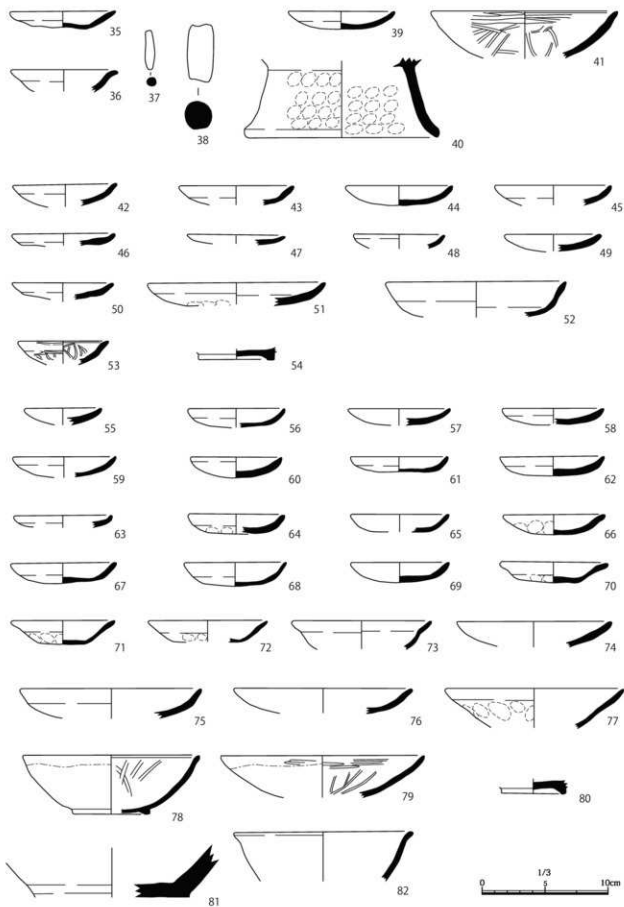


図1 調査地位置図(昭和61年2月測図「中主町図(8)」をベースマップに使用)



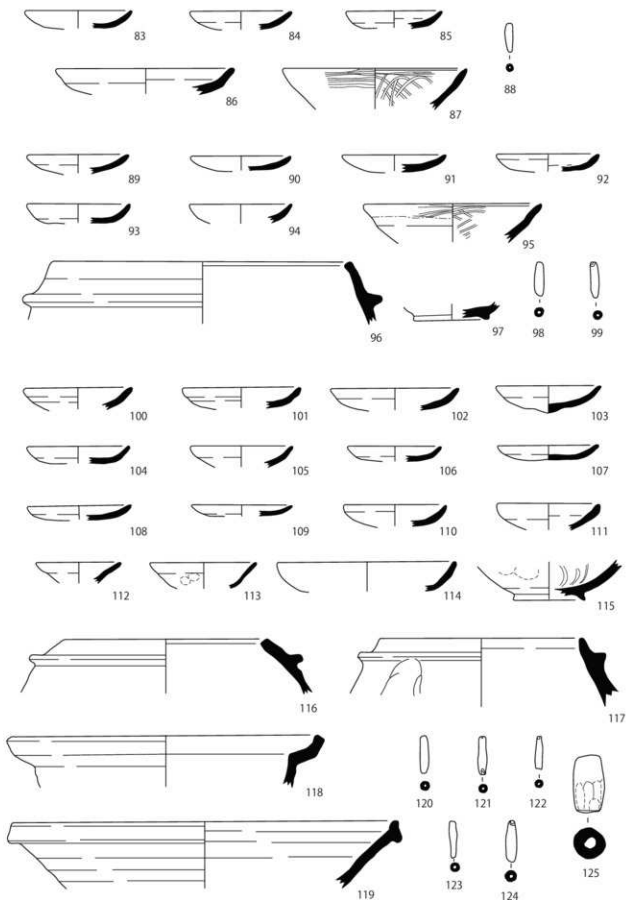
SD18101 下層 (1~7)、SD18101 中層 (8~10)、SE18201 掘形 (11~13)、
SE18201 最上層 (14~20)、SE18201 井筒内 (21~23)、SE18202 最上層 (24・25・27~33)、
SE18202 井筒内 (26)、SX18201 (34)

図2 出土遺物実測図 (1)



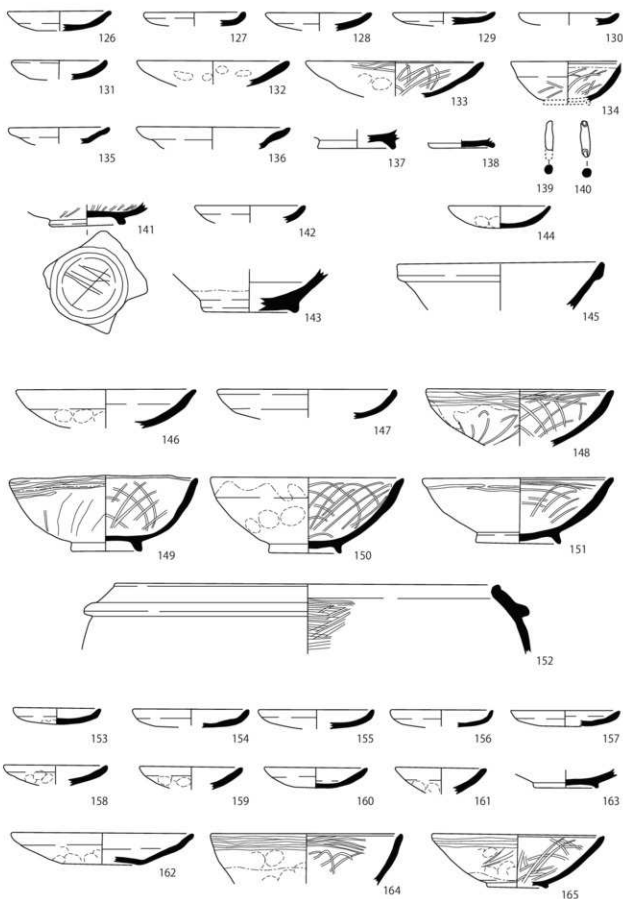
SD18201 (35～38)、SD18211 (39・40)、SD18213 (41)、SD18206 (42～54)、SD18203 下層 (55～82)

図3 出土遺物実測図(2)



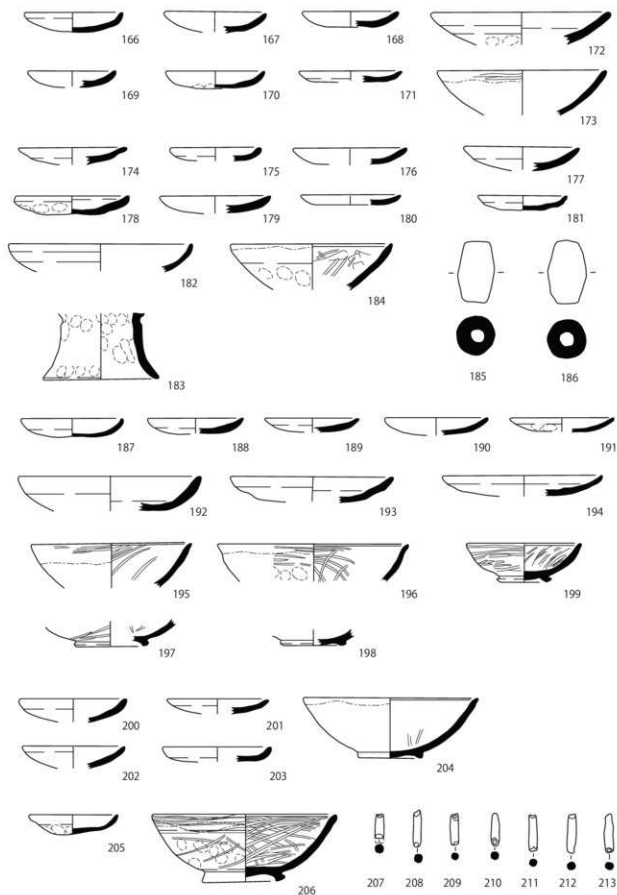
SD18208 (83~88)、SD18207 上層 (89~99)、SD18205 下層 (100~125)

図4 出土遺物実測図 (3)



SD18210 下層 (126 ~ 134・139・140), SD18210 上層 (135 ~ 138), SD18209 (141 ~ 143),
P75 (144・145), P13 (146 ~ 152), P14 (153 ~ 165)

図5 出土遺物実測図(4)



P16 (166 ~ 173), P24 (174 ~ 186), P405 (187 ~ 199)
P404 (200 ~ 204), P358 (205 ~ 206), P72 (207 ~ 213)

図6 出土遺物実測図(5)

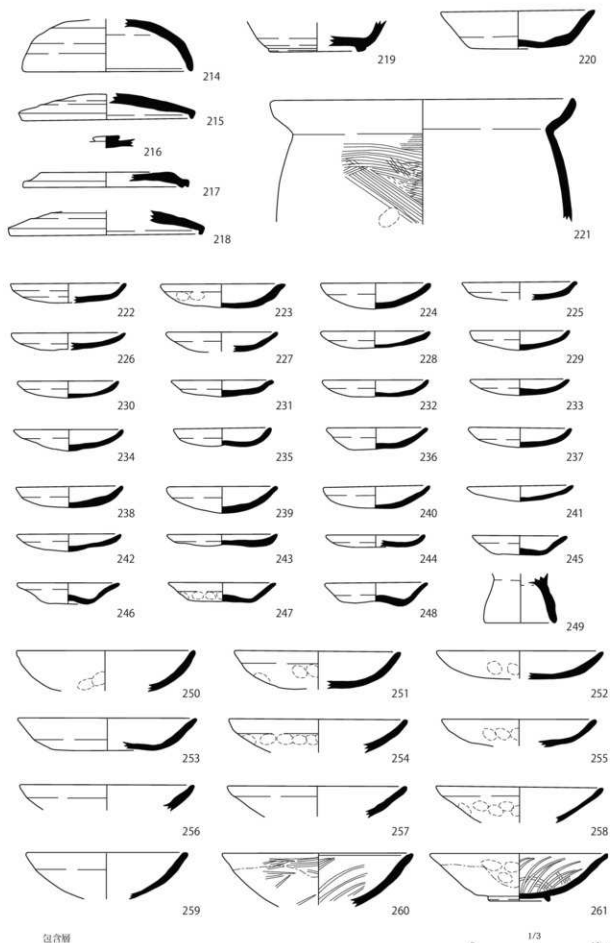


図7 出土遺物実測図(6)

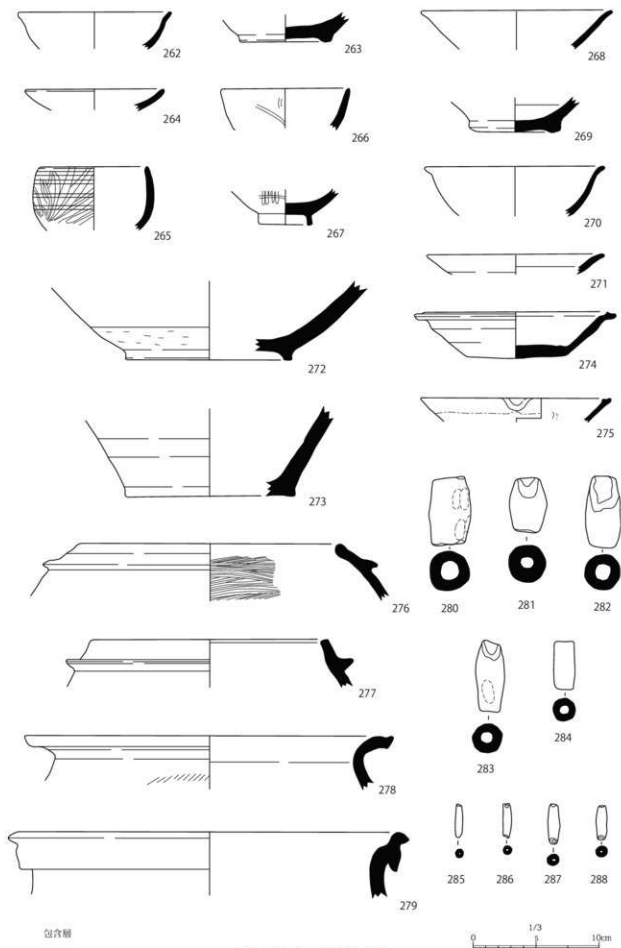


図8 出土遺物実測図(7)

第4章 御明田古墳群第2次発掘調査出土遺物報告補遺1

調査地 野洲市六条字下金光寺、御明田 外地先

調査原因 県道野洲中主線改良工事

調査期間 昭和58年(1983)10月1日～

昭和59年(1984)3月31日

調査面積 調査対象面積2,700㎡のうち約1,500㎡

1. はじめに

五条遺跡第7次調査として実施した御明田古墳群第2次発掘調査の成果概要は、『西河原宮ノ内・比留田法田遺跡発掘調査報告書』(野洲市2007B)に記載されている。しかしながら、出土木製品の大半は未報告のままとなっていた^{①)}。

本補遺では、等高線の入った平面図、出土須恵器の一部を掲載するとともに木製品を資料紹介する。あわせて、市内遺跡出土の関係遺物について整理したい。

2. 御明田古墳群の概要(図1～3・5、写真8)

御明田古墳群は、琵琶湖東岸に所在する野洲市の北部沖積低平地に形成された、古墳時代の古墳群として周知されている。もともとは、北にひろがる五条遺跡の範囲内であったが、古墳の発見を契機に、別の遺跡として新規追加と範囲の見直しをおこなった。当該地周辺は、「かつて畑状の高まりをもつものがあつたといわれており、他に前後する時期の古墳の存在が予想され」ている(中主町1984A、辰己1989)。

遺跡の現況は水田地帯の一角にあたり、これまでの発掘調査には県道改良工事とは場整備関係に先立つ事例がある。昭和57年度(1982)から5ヶ年にわたっておこなわれた表探法による分布調査では、弥生時代、古墳時代、古代Ⅰ(飛鳥～奈良時代)、中世の遺物が認められ、とくに弥生時代～奈良時代に多いことが知られている(中主町1986)。

昭和57年度の第1次調査では、弥生時代後期後半の方形周溝墓3基、庄内期と奈良時代の遺物を確認している(中主町1983・野洲市2006A)^{②)}。

昭和59年度(1984)のは場整備関係遺跡発掘調査では、とくに遺構は検出されていないが、少量の遺物が出土している(滋賀県他1985)。

第2次調査のD区とE区の第2遺構面では、古墳時代前期の円形・方形周溝状遺構(周溝墓、区画溝、その他)を各1基、古墳時代後期初頭(陶色MT15型式墳)の円形墳(埋没古墳/1号墳)1基、奈良時代の河道跡1条を確認している(中主町1984A・B、

野洲市2007B)。1号墳は「円形・方形周溝状遺構が一旦埋没してから、これらを切る形で」つくられた(中主町1984B)。墳丘長は約20m、「周溝も含めた全長は約42mで、周溝は奈良時代の自然河道によって壊されており明瞭でないが、幅12～13m、深さ1.5～2.0mと考えられる」(中主町1984A)。埋葬施設は、後世の削平や現代の農業用水路敷設によって詳細をしりえないけれども、木棺直葬と推測される。墳丘裾部には、須恵器杯身(図3-6)・壺(図3-8^{③)}他)・甕^{④)}、人物(馬子・馬飼人カ)・馬形の形象埴輪、円筒埴輪や朝顔形埴輪を伴出する。円筒埴輪は紀伊・大和南部型を採用(辻川2003A・2012等)。その他、両調査区の遺物には、古墳時代初頭、6世紀後半、8世紀代の土師器・須恵器^{⑤)}も一定数出土している。

3. 第2次調査出土木製品の概要

(図2・3、写真1～8)

D区・第2遺構面の1号墳東側周溝、E区・第2遺構面の円形周溝状遺構西側周溝跡では、土器や埴輪とあわせて木製品が出土している。今回報告する木製品のうち、収蔵資料を確認できたのは、図3-13の1点のみである。以下、調査区ごとに説明をくわえる。

(1) D区・1号墳周溝(古墳時代後期初頭)

図3-10は、用途不明の棒状部材。図面上の上側に約3cm幅の擦痕がのこる。長さ43.4cm、最大幅3.6cm、厚さ1.2～1.95cm。図面下側を薄く仕上げる。

図3-11は用途不明の円形板。直径は23.7cm、厚さ1.2cmである。

(2) E区・円形周溝状遺構(古墳時代前期^{⑥)})

図3-12(写真1・2)は、機織に使用する緯打具^{⑦)}の刀杼^{⑧)}(^{ハネヒコ}ハネヒコ^{⑨)})。半月形に整形し、両端を薄く仕上げる。表面および刀部には糸擦痕がのこる。径約0.1cmの小孔が7ヶ所にあく。長さ77cm、最大幅11cm。カシを使用。東村純子氏の「背部の両端がなだらかに幅を減らす」I類(東村2011)、黒須亜希子氏の背部に突帯をもつB類(黒須2010B)にあたる。

刀杼の南約2.5mには、「工」字形木製品と有段丸棒(図3-13)が重なって出土している(写真3・4・7)。

角棒を「工」字形に組み合わせたものは、製糸具の棒^{⑩)}(一宮市博物館1992)。寸法は、図3-13の丸棒を基準に写真上で計測すると、腕木の長さ約65cm、幅約4.5cm、支え木の長さ約40cm、幅約4cmとなる。腕木にくらべて支え木が短い。『木器集成図録 近畿原

始篇(解説)』(奈良国立文化財研究所 1993)の「支え木さしこみ式」、東村純子氏の「無帶型:握り部に加工をほどこさないもの」(東村 2011)に属する。

図3-13は、両端をのこして身の部分を細くけずりだした丸棒。昭和58年度(1984)に出土後、自然乾燥によって変形、収縮、破損等が顕著であったが、令和5年(2023)1月に実測した。現存長64.8cm、身の長さ51cm、径(身)4.9cm・(端)7.15cm。表面に糸擦れ痕はみられない。製織具の経送り具^⑩(棒状)の可能性がある(東村 2011、黒須 2012)。

図3-14は用途不明の長板。長さ116.8cm、最大幅6.35cm、厚さ1.4〜2.8cm。図面上右側の下部には幅約2.8cm、長さ3.4cmの突起をつくりだす。上部にも同様の痕跡がみえる。本資料は4片に折損しており、図面上右側2片と左側2片では糸擦れ痕の様相が異なる。したがって、本来は別製品とみるのが適当かもしれない。すると、右側2片の長さは約51.4cm、左側2片が長さ約66.6cmとそろそろ。刀鈔と製織具の布送り具^⑪あるいは経送り具の可能性もある。

図3-15(写真5・6)は、台形材1点(15-1)と丸棒3点(15-2〜4)を組み合わせる用途不明品。

図3-15-1は片面中央に段を有する。台形上部の長さは18cm、下部の長さが28.4cm、幅7.8cm、厚さ3.8〜5.8cm。図3-15-2は長さ41.6cm以上、径1.5〜1.7cm。図面上の上側を欠損。図3-15-3は長さ121.2cm以上、径1.3〜1.7cm。図面上の左側を欠損。図3-15-4は長さ29cm、径1〜1.5cm。写真上で計測した図3-15-2〜図3-15-4までの長さは約85cm。

出土状況(写真5・6)が使用時の状況を反映するものとかなげると、図3-15-1は軸台を構成する部材または軸棒を固定する補助材のひとつ、図3-15-2を軸棒、図3-15-3を支え木(舞羽)、図3-15-4を腕(木)にあて、製織具の認めかけ^⑫の用途を復元したい(角山 1991・1992、黒須 2010A、東村 2011)。しかし、同様の木製品は、管見のおよぶかぎり類例をみつけることができなかった。また、認めかけとするには、図3-15-2・3・4の結束方法や、糸をかけたときの強度に懸念がのこる。今後も、検討の余地がある。

(3) E区・その他(古墳時代)

E区・第2遺構面出土の剣筒容器・槽【9】(以下、【】内は既刊報告書の遺物番号とする)は報告済(野洲市 2007B)。長さ50.8cm、幅16.7cm以上、高さ4.8cm。

その他には、出土地点および用途不明の穿孔部材1点がある。長さ116.3cm以上、幅2.5〜3.5cm。方孔が長さ約4.5cm、幅1.1〜1.6cmの大きさで2ヶ所にあく。方孔中心間の寸法は約63.3cm。両端は欠損。

(4) 小結

棒と図3-12〜15の木製品は、輪状式の無機台炭機(原始機)に関係する紡織具とかなげえた。円形周溝状遺構は、その性格が判然としないことから、出土木製品も祭具^⑬と実用品の別を決めたい。しかしながら、製糸具の様、さらに使用痕のある緯打具の刀鈔が伴出することは、同じ場所での一連の工程の使用を推測できる(黒須 2010B、東村 2004・2021等)。

4. 野洲市内遺跡出土の紡織具(図4・5)

本節では、市内の遺跡から出土した紡織具と推測される資料を整理する。

(1) 製糸具・紡錘車(紡輪)^⑭

滑石製紡錘車は、古墳時代中期後半〜後期に多く、「実用品」(早野 2009 他)、「祭器から実用品へと変化」(黒須 2012 他)、「実用品と模造品の共存」(平尾 2021 他)と、その使われ方をめぐっても様々なかなげえや位置づけがある。

市内遺跡出土の石製紡錘車は、7遺跡に計8点ある。

①は片岩系、③〜⑦は滑石製、②は未詳、④⑧は未報告。

①湯ノ部遺跡・西河原宮ノ内遺跡 [T-35・第3遺構面・包含層] 1点【S-7】(弥生時代前期)(滋賀県他 1999)

②野々宮遺跡[竪穴建物跡S104] 1点(図4-1)(弥生時代後期前半)(野洲市 2005D)

③久野部遺跡[方墳ST01] 1点【32】(5世紀後半)(野洲町 2003) ※模造品(祭器)カ

④五条遺跡[不詳/竪穴建物跡S12201] 2点(図4-3・4)(5世紀後半〜6世紀)(野洲市 2006A)

⑤吉地薬師堂遺跡[D区・第10層] 1点【175】(6世紀後半〜7世紀前半)(中主町 1990B)

⑥光相寺遺跡[焼土坑SX26204 断割] 1点【163】(7世紀後半頃)(中主町 2001)

⑦西河原森ノ内遺跡[第5遺構面] 1点【77】(7世紀後半頃)(野洲市 2006C)

土製紡錘車は、7遺跡に計8点ある。③は未報告。

⑧市三宅東遺跡[第2調査区・包含層] 1点【359】(縄文時代後期)(野洲町他 1990)

⑨湯ノ部遺跡・西河原宮ノ内遺跡 [T-34・第2遺構面・ビットSP34211 / T-35・第4遺構面・土坑SK35431] 2点【6 / 172】(弥生時代前期)(滋賀県他 1999) ※【172】は紡錘車形土製品

⑩下々塚遺跡[第2遺構面・溝跡SD01] 1点【26】(弥生時代後期〜古墳時代前期)(野洲町 2003)

⑪虫生遺跡[第3遺構面] 1点【30】(古墳時代前期)(中主町 2004)

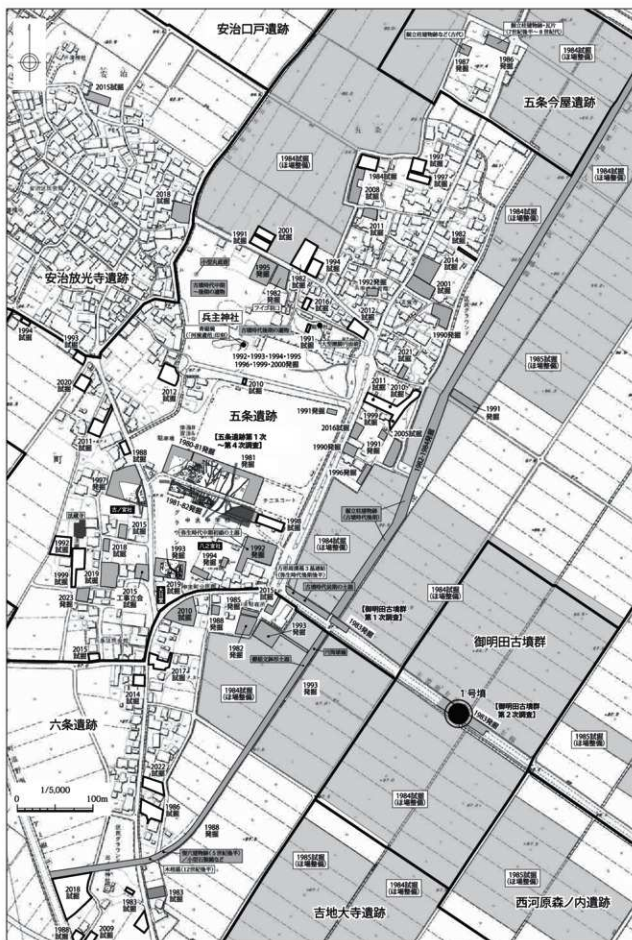


図1 御明田古墳群および周辺遺跡既往調査位置図（昭和61年2月測図「中土野（8）」をベースマップに使用）

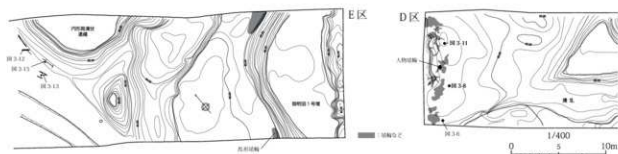


図2 御明田古墳群第2次調査・第2遺構面 遺構平面図(部分)

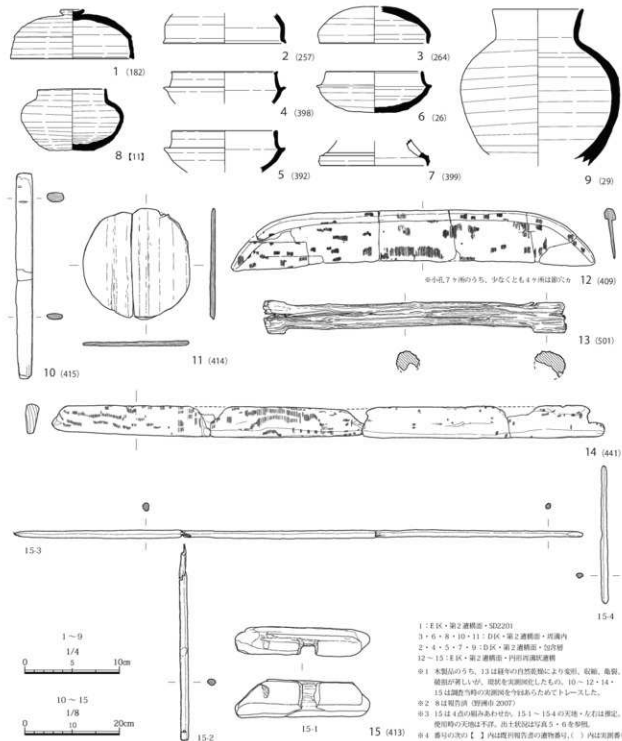


図3 御明田古墳群第2次調査・第2遺構面 出土遺物実測図

⑫富波遺跡【第2調査区・包含層】単孔円盤状土製品 1点【75】〔古墳時代前期末〕（元興寺文化財研究所1998）※別用途か

⑬五条遺跡【不詳】1点（図4-2）〔5世紀後半～6世紀〕（野洲市2006A）

⑭夕日ヶ丘北遺跡・大篠原西遺跡【1地区・溝跡SD17】紡錘車状土製品1点【図9-18-193】〔7世紀前半頃〕（滋賀県他2007A）

石製・土製の紡錘車は12遺跡、計16点を確認できた。出土遺構は、石製の竪穴建物跡、方墳周溝、包含層、土製のピット、土坑、溝跡、包含層となる。

木製紡錘車は、西河原森ノ内遺跡の第1・2次調査・H区・第2遺構面と第5次調査・第4遺構面の包含層から出土した有孔円板【756／実測図未掲載】〔7世

紀後半～8世紀初頃〕（中主町1990A／野洲市2006C）、光相寺遺跡第14次調査・第3遺構面・溝跡SD14303出土の蓋【397】〔7世紀末～8世紀初頃〕（中主町1991）、久野部遺跡・C区・沼沢地出土の蓋【PW24】〔6世紀中葉～8世紀末〕（滋賀県・野洲町他1977）の4点に可能性がある⁽¹³⁾。小堤遺跡・第20調査区の土坑SK-01では、木製紡錘が組み合う紡錘車【図18-3】〔中世末〕を確認できる（野洲町1988）。

鉄製の紡錘車は、吉地薬師堂遺跡第2次調査・D区・第3遺構面の溝跡SD2301から出土した有（単）孔円板（図4-5）に可能性がある。直径3.9cm、厚さ0.2cm、中央に径0.3cmの円孔をあける。時期は7世紀（徳綱1987、中主町1990B）。東村純子氏は、「7世紀前半から中頃における鉄製紡錘の出土例は、ミヤケ

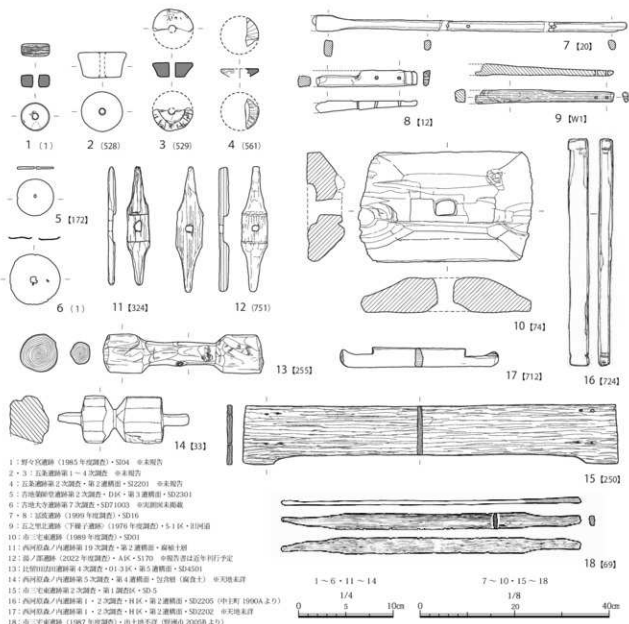


図4 野洲市内の主な紡織具・農具出土事例

にかかわる遺跡、あるいは後に評価が成立する遺跡に多い」ことを指摘している（東村 2011 等）。このことは、安評家・野洲郡家に比定される西河原遺跡群⁽¹⁴⁾の評価（市 2008 他）を迫認するものとなる。

この他、吉地大寺遺跡第7次調査の溝跡 SD71003 から出土した銅製有（単）孔門板（図 4-6）に可能性がある。最大径 5.4cm、厚さ約 0.8mm。中央には約 0.6cm 四方の方孔があく。時期は 9 世紀。素材が鉄でないこと、厚さが 1mm 以下の軽量であることを考慮にいとると、飾金具と捉えるのが適当か（中主町 1985、野洲市 2009、野洲市 2019【写真 6】）。

(2) 製織具・総かけ⁽¹⁵⁾

図 4-7・8 は、富波遺跡の溝跡 SD16 から出土した棒材・角材状と報告される木製品（野洲市 2004）。

図 4-7 は、長さ 66.6cm 以上、幅 1.7～3.4cm、厚さ 1.3～1.5cm。報告には「表面を丁寧に調整している。折れているが、3ヶ所に斜めに穴が貫通し、端部がやや太い」とある。その平面形や孔のあけ方より、端部（図面上左端）は相欠き仕口の軸孔部、3ヶ所以上の小孔を腕（木）の差し込み孔（腕孔）にあてると、中央の切り欠き部分から左半を折損した総かけの支え木（舞羽）である可能性が高い（角山 1992、東村 2004、黒須 2010A 他）。推定される軸孔（中央孔）の中心より小孔外側までの長さは、29.6cm、34.1cm、約 52.3cm。小孔中心間の寸法は左から 4.4cm、約 18cm となる⁽¹⁶⁾。

図 4-8 は、長さ 21.4cm 以上、幅 2.8～3.35cm、厚さ 1～2.35cm。図面上右側上面には幅 1.1cm の段をもうける。断面形状は、図面上左側にむけて厚みを増す。3ヶ所の小孔中心間の寸法は、左から 4cm、4.8cm。右から 2 番目の小孔は斜めにあけるが、他 2ヶ所はほぼ垂直にあく。本資料は、左側を折損し、全形を明らかとしないが、図 4-7 と同様に総かけの支え木、あるいは製糸具の棒となる可能性がある。

同溝跡から出土した木製品は、この他にも紡織具が含まれているかもしれない。時期は古墳時代（後期）。

図 4-9 は、五之里北遺跡（下線子遺跡）・S-1 区の旧河道から出土した柄と報告される木製品。長さ 29.3cm 以上、幅 2.5cm、厚さ 1.2～2.5cm。図面上左側を折損し、右側端に 2 孔を垂直にあける。小孔中心間の寸法は 2.3cm。総かけの支え木または棒の可能性はある。作目の用途不明品【W2】は、糸巻の使用を推測する。時期は古墳時代前期（瀬賀泉 1977）。

図 4-10 は、市三宅東遺跡の大溝跡 SD01 から出土した笠形木製品と報告されるもの。平面形は、短辺にやや丸みをもつ長方形。長さ 36.6cm、幅 23.2cm。

側面は高さ 7.8cm の台形をなす。平面中央には長さ約 4cm、幅約 3cm の方孔があく。孔は上方を長辺 6.8cm に、下方を約 9cm 四方にひろげる。上面の方孔外側には、左右の方向へ長さ約 25cm、深さ約 1.2cm の V 字の溝をもうける（割れカ）。本資料の用途を特定することはむずかしいが、総かけあるいはタタリ（柄、多多利他）の基台（台座）としてかんがえたい⁽¹⁷⁾（角山 1991・1992、奈良国立文化財研究所 1993、三重県 2000、黒須 2010A・B、石橋 2016）。時期は 5 世紀中頃（野洲市 2005C）。

(3) 製織具・糸棒⁽¹⁸⁾

糸棒の横木は、西河原森ノ内遺跡と湯ノ部遺跡⁽¹⁹⁾から各 1 点、計 2 点が出土している。

図 4-11 は、西河原森ノ内遺跡第 19 次調査・第 2 遺構面の包含層から出土した糸巻き状木製品と報告されるもの。長さ 12.5cm、最大幅 2.4cm、厚さ 0.8cm。時期は 7 世紀中頃～8 世紀初頭（中主町 1995）。

図 4-12 は、令和 4 年度（2022）に発掘調査を実施した湯ノ部遺跡・A 区・第 1 遺構面の落ち込み S-170 から出土した木製品。長さ 12.2cm、最大幅 2.8cm、厚さ 1.1cm。時期は 7 世紀後半～8 世紀前半である。

(4) 製織具・経送具⁽²⁰⁾

図 4-15 は、市三宅東遺跡第 2 次調査・第 1 調査区の溝跡 SD-1 から出土した建築部材と報告される木製品。長さ 78.2～79.5cm、幅 10.3～12.5cm、厚さ 0.9～1cm。板目材を使用。図面上の下側は、両端より 6.6cm のところから 2.3～2.4cm 削り込み、長さ 48.4cm の平坦面をつくりだす。左右端には、径 0.3～0.5cm の小孔 2 対をあける。図面上右側上の小孔中心間の寸法は 2.5cm、同下は 3cm、上下間は 6.7～6.8cm。図面上左側上の小孔中心間の寸法は 2.35cm、同下は 3.25cm、上下間は 6.25～6.4cm。糸擦れ痕や欠損の有無は明らかでないけれども、形状の特徴⁽²¹⁾から推測すると、輪状式無機台履機を構成する経送具の可能性はある。しかしながら、幅は他の出土事例（幅 25～30cm / 東村 2011）と比べて狭く、小孔は補修孔や足を固定するための紐孔ともかんがえがたい。よって、本資料は経送具を転用・再加工したもの、あるいは別用途の部材となろうか。

同溝跡からは、この他にも布巻（送）具と推測される木製品【230】が出土している。時期は古墳時代中期【5 世紀中～後半】である（野洲町 1990）。

(5) 機織具・紡織具

久野部遺跡・C 区の沼沢地では、機織具の梭（布巻具）・綜棒⁽²²⁾【PW46】、藤（経巻具）あるいは中筒【PW47】と分類される木製品が出土している。時期

は6世紀中葉～8世紀末(滋賀県・野洲町他1977)。

小比江遺跡・T12の包含層では、織機部材または漁具と報告される断面菱形の木製有頭棒【W19～W23】が出土している。時期未詳(滋賀県他1994)。

木部遺跡・T61・第4面の溝跡S-230では、織機部材【287・288】と報告される木製品が出土している。時期は6世紀後半～7世紀前半(滋賀県他2002A)。

図4-16は、西河原森ノ内遺跡第1・2次調査・H区・第2遺構面の溝跡SD2205から出土した織機の開口具中筒の可能性が指摘される木製品。長さ47.8cm、幅4cm、厚さ2.6cm。図4-17は、同溝跡SD2202から出土した用途不明の木製品で、『古代地方木簡の世紀』(滋賀県立安土城考古博物館他2008)において紡織具と分類される。長さ33.4cm、厚さ1.5cm。2点の時期は7世紀後葉～8世紀前葉(中主町1990A)。

(6) その他

その他関連遺物には、以下のものがある。

甲山古墳出土の鉤状鉄製品4点【第132図-1～3他】は、「石室側石材の間詰に突き刺し、幕や武器を設置する釣り金具の可能性」がある。古墳の時期は陶器TK10型式～MT85型式(野洲町2001)。

西河原森ノ内遺跡第1・2次調査・H区・第2遺構面の溝跡SD2208から出土した3号木簡には、公的な布の集積場所あるいは縫製にかかわる工房の存在にくわえて、守山市服部遺跡周辺に比定される野洲郡服部郷(服里)との関連を示唆する内容が記されている。木簡の時期は7世紀後葉である(山尾1990A・B、中主町1990A、市2008、大橋2015他)。

図4-18は、市三宅東遺跡出土の木製有刻板。上長側面には1.2～1.7cmの間をあけた2ヶ1組の刻みを4.1～5.5cmの間隔で、下長側面には5.3～5.9cmの間隔で、それぞれ6ヶ所に刻む⁽²³⁾。これは、俵やムシロ等をつくるもじり編み用の農具・編台目盛板の可能性がある。時期は古墳時代(野洲市2005B)。木鏝は、古墳時代に市三宅東遺跡や富波遺跡、六条遺跡等、7世紀以降では西河原遺跡群とその周辺に確認できる。図4-13は、比留田法道遺跡第4次調査・01-3調査区・第5遺構面の溝跡SD4501から出土した木鏝。一木式の糸巻か。時期は7世紀前半(野洲市2007B)。図4-14は、西河原森ノ内遺跡第5次調査・第4遺構面の包含層から出土した木製品。糸巻(車)あるいは揚杵や回転台他の回転軸・滑車等の可能性がある。時期は7世紀末～8世紀初頭(野洲市2006C・2007C)。

(7) 小結

市内遺跡から出土する縄文時代後期から古墳時代前期までの紡錘車8点は、湯ノ部遺跡・西河原宮ノ内遺

跡と野々宮遺跡の2点が石製で、他6点は土製となる。出土遺構は竪穴建物跡およびピット、土坑、溝跡、包含層である。5世紀後半には、竪穴建物内での使用や、方墳へ副葬・供献された石製紡錘車がみられる。7世紀～8世紀では石製紡錘車が西河原遺跡群に集中し、土製は夕日ヶ丘北遺跡・大篠原西遺跡から出土している。また、木製と鉄製の紡錘車の可能性のあるものがくわわる。出土遺構は溝跡、沼沢地、包含層である。

この他の紡織具は、五之里北遺跡(下線子遺跡)、富波遺跡、市三宅東遺跡から、総かけの支え木(舞羽)[古墳時代前期・古墳時代後期]とその台[5世紀中頃]や経送具[5世紀中～後半]と推測される部材等と、7世紀中頃以降には西河原遺跡群に糸巻の横木等を確認することができた。出土遺構は、落ち込み、溝跡、旧河道、包含層である。

5. おわりに(表1、図5)

これまでに、御明田古墳群第2次調査の出土木製品等を紹介し、あわせて市内遺跡出土の紡織具について整理してきた。最後に、紡織具が出土した遺跡をとおり、任意に設定した地域(○番号)ごとの特徴をみていくこととする。まずは、時系列に遺跡を列挙する。

縄文時代後期 (1) 市三宅東遺跡⑦

弥生時代前期 (1) 湯ノ部遺跡・西河原宮ノ内遺跡②

弥生時代後期 (1) 野々宮遺跡⑦

古墳時代前期 (1) 御明田古墳群①

(2) 下ヶ塚遺跡⑧ (3) 虫生遺跡④ (4) 富波遺跡⑦

(5) 五之里北遺跡(下線子遺跡)⑦

古墳時代中期 (1) 久野部遺跡[方墳]⑦

(2) 市三宅東遺跡⑦

古墳時代後期 (1) 五条遺跡① (2) 富波遺跡⑦

6世紀後葉～8世紀 (1) 吉地薬師堂遺跡②

(2) 木部遺跡④ (3) 夕日ヶ丘北遺跡・大篠原西遺跡⑤

(4) 光相寺遺跡② (5) 西河原森ノ内遺跡②

(6) 久野部遺跡⑦ (7) 湯ノ部遺跡②

次いで、古墳時代以降、順を追って記す。

古墳時代前期の紡織具は、①五条・六条地域、⑧小篠原地域、④木部・八夫地域、⑦市三宅・富波地域より出土しており、いずれも前代から集落の継続性が認められる。特徴的な遺物には、①六条遺跡の櫛形文鉢形土器、同遺跡と西河原薄窪遺跡の皮袋形土器⁽²⁴⁾、④虫生遺跡の小銅鏡、⑦五之里北遺跡の土製支脚や古富波山古墳に三角縁四神二獣鏡他2面の銅鏡がある。

古墳時代中期の紡織具は、⑦市三宅・富波地域にみられる。紡錘車が出土した方墳は、同地域の市三宅東遺跡と野々宮遺跡、⑥辻町・小堤地域の辻町遺跡でも

検出されている。⑦の地域は、初期須恵器(角2000他)や韓式系軟質土器^{②③}、製塩土器^{②④}、下駄^{②⑤}、弩が出土している。これらは、⑦の地域が弥生時代の玉つくりから広範囲の交易・流通を確保し、ひと、もの、知識や情報、技術等様々な文物の取得・受容に長けた優位性をそなえていたことを明らかにする。

古墳時代後期には、直^{ヒカキ}状式の有機台地機(地機)や有機台固定機(高機)が伝来し(図7-8・14～16他)、渡来系集落との関連も考慮されている(黒須2010B・2012、東村2021等)。市内出土の紡織具は、①五条・六条地域と⑦市三宅・富波地域に認められる。

①の五条遺跡では、かまどを伴う堅穴建物跡や掘立柱(側柱・総柱)建物跡、土器(甕)^{②⑥}、陶器TK23・47型式以降の把手付椀^{②⑦}、付台壺^{②⑧}、器台^{②⑨}、焼け歪み等の不良品^{②⑩}を含む多種多量の須恵器、韓式系軟質土器、ガラス小玉、石製模造品、フイゴ羽口等を確認できる。なかでも、須恵器短脚高杯の多いことが注目される。御明田1号墳や六条遺跡から出土する紀伊・大和南部型円筒埴輪は、⑧小篠原地域の林ノ腰古墳(陶器MT15型式～TK10型式)、小篠原遺跡、⑦の久野野1号墳(畿内型と併用)[5世紀末～6世紀初頭]、⑤大篠原地域の大篠原西遺跡[6世紀前半頃]にも採用される(辻川2003A・2012等)。

その他の集落遺跡には、③三上地域の三上遺跡で掘立柱(側柱)建物等が検出されている。

6世紀後葉～8世紀の紡織具は、②西河原・吉地地域や④木部・八夫地域、⑤大篠原地域、⑦市三宅・富波地域から出土している。

②西河原・吉地地域は、7世紀後半～8世紀前半にかけて官衙跡・西河原遺跡群が最盛期をむかえる。西河原遺跡群は、一部に弥生時代・古墳時代前期、5世紀末、6世紀後半の遺構・遺物が確認されているけれども、遺跡群の発展期は7世紀中葉以降である。そのはじまりは、7世紀前半の②比留田法田遺跡・敷葉工法の採用や④木部遺跡・導水施設の築造(滋賀県他2004A)等にもとめることもできよう。しかしながら、特記すべきは、7世紀に突然、国家と結びつく施設が当地域に出現することである(山尾1990B等)。

⑤大篠原地域の夕日ヶ丘北遺跡・大篠原西遺跡は、鏡山古窯跡群北西麓にかかわる須恵器生産関連集落の可能性が高い。注目される遺物には、7世紀前半頃のカタ形土器や筒形土製品がある。6世紀末～7世紀前半の鏡山古窯跡群は、6世紀代に独占していた須恵器生産技術を開放し、各地へ開窯・生産が拡散する転換期にあたる(林1991、畑中1993、細川1996B他)。

⑦の市三宅・富波地域の市三宅東遺跡や富波遺跡で

は、掘立柱(側柱・総柱)建物跡、掘立柱跡跡(牧の周囲をめぐる柵カ)、墨書人面土器、馬鐙、久野野遺跡や野々宮遺跡ではカタ形土器が確認されている。

この他の集落遺跡をみると、市内各所に生活の痕跡を確認できるようになるが、なかでも⑧小篠原地域では長倉を含む掘立柱(側柱・総柱)建物跡、鍛冶炉、カタ形土器・筒形土製品^{③③}、最古級の中空円形硯(杉本1992)、台形須恵器^{③④}、コップ形須恵器(井上尚1994)、鳥摘蓋、墨書人面土器、木製鉢(釣瓶カ)、銅製鐙(中村1999)が注目される。⑥辻町・小堤地域では筒形土製品が出土し、交通関連あるいは鏡山古窯跡群にかかわる集落跡の可能性が高い。墳墓には、⑥の板生7号墳に副葬された刻書須恵器^{③⑤}、⑤大篠原地域の夕日ヶ丘古墳群にくわえて、③三上地域で須恵器生産への関与を示唆する塚の本古墳、西田井遺跡の古墳(井上尚2020)の配置が留意される。

以上、紡織具の出土遺跡を取りまき地域等についてみてきた。そこで、気づいた点を記してまとめとする。

A 古墳時代前期～後期には、広範な交易網の確保あるいは王権から分配をうけた⑦市三宅・富波地域の先進性や技術伝播の拠点的な位置づけを確認できた。

B 古墳時代中期末～後期には、①五条・六条地域の五条遺跡が湖辺部で大きく発展する^{③⑥}。この時期は、⑤大篠原地域の鏡山古窯跡群北西麓の開窯期とほぼかざる。両者は、生産・流通・管理・経営を分担する一連の施設としてつながっていた可能性がある。しかしながら、現状で両者を結びつける根拠は、五条遺跡の立地と遺構の内容、須恵器の器種組成や数量・不良品の混入、鏡山窯で生産された須恵器集積地の不存在^{③⑦}、紀伊・大和南部型円筒埴輪の分布があげられるが、いずれも具体的にとぼしい。今後は、五条遺跡第1次～第4次(野洲市2006A)や兵主神社境内の同第14次・第17次・第19次調査(野洲市2008)の整理をすすめ、遺跡像の解明につとめることが課題である。

C 7世紀～8世紀は、②西河原・吉地地域に西河原遺跡群が出現し、評家・郡家へ発展する。西河原遺跡群は、⑤大篠原地域の鏡山古窯跡群で生産された須恵器の集積(散)地に位置づけるかんがえがある(滋賀県他2001、畑中2008、大橋2008、辻川2010他)。

7世紀前半頃には、⑤大篠原地域の須恵器生産関連集落跡である夕日ヶ丘北遺跡・大篠原西遺跡から紡織具や渡来系遺物が出土している。6世紀には同様の遺物がみられなかったことから、集落の構成員等に変化があったことも推測できよう。当該期は、西河原遺跡群の開始期でもあり、この変化は⑥辻町・小堤地域や⑧小篠原地域他にも連動していた可能性がある^{③⑧}。

西河原遺跡群成立の背景には、ミヤケ(葦浦屯倉⁽³⁹⁾)の設置を契機に、①五条・六条地域と④木部・八夫地域の首長権限を再編し、あらたに②の地域へ①と④の諸機能を統合させた官衙施設⁽⁴⁰⁾を整備するという、政策的な人員・施設配置の転換に導かれようか⁽⁴¹⁾。

D 古墳時代中期以降におけるA-Cの動向は、渡来系集団の関与がうかがえる。これは紡織、製陶、鍛冶等の手工業生産・流通にくわえ、地域開発・文書行政・徴税・貢納・生活文化等多岐にわたっていた。渡来系集団は、古墳時代的な地方統治の方式から律令国家構築へ向かう過程で、王権や国家に課せられた役割や地域社会との関係も変容していったことが推測される。

文末となりましたが、本補遺作成にあたっては、角山幸洋氏、東村純子氏、黒須亜希子氏をはじめ多くの方々の先行研究に依拠していることを明記しておきます。また、花田勝広氏、徳納克己氏、山田謙吾氏(故人)、岩崎茂氏、杉本源造氏、進藤武氏、行俊勉氏、鈴木茂氏、芦塚品太氏、渡邊智洋氏、辻伊津子氏からはご教示を賜りました。山崎賢氏、大黒康弘氏、松下嘉暢氏、中川九英氏には資料の確認等にご協力をいただきました。しるして、感謝を申しあげます。(河合)

注

- (1) (一宮市博物館 1992) には、五条御明山古墳部出土の「鋸打刀(刀打)」の解説文と写真、(注)の写真を掲載されている。(大庭秀 2006) には、「遺物五条御明山古墳部出土の刀打」が表に掲載されている。
- (2) 五条遺跡第6次調査として実施。調査地は、令和5年(2023)現在、五条遺跡の範囲内となる。
- (3) (野洲市 2007B) の53頁、【第3図-12】、E区・最下層出土。
- (4) (野洲市 2007B) の53頁、【第3図-13】、D区・茶褐色土上。
- (5) 8世紀の唐書須銀器杯が、E区・古墳期埋土に混入していた。これは、御明山古墳部第1次発掘調査の概要報告(野洲市 2006A)に【第3図-1】として掲載。同【第3図-14】とあわせて、第2次発掘出土の土器出土。
- (6) (野洲市 2007B) の53頁、【第3図-14】の土器群二重1線がE区北西部から出土しており、その年代層を本製品にあてた。
- (7) 刀打は、弥生時代前期からある輪状式の有機機付機具ともなる本製品で、鋸の形をした「鋸打を打ち込むもの」(東村 2011)。この他、8世紀前半頃には、直状式の有機機付機具に使用された鋸打と鋸織の機能を兼ねた管大柄があらわれる。なお、刀打は、その数を減らしながらも、民俗にもこのころ(黒須 2010B)。
- (8) 遺蹟内から出土する刀打は、守山山下之郷遺跡第42次調査の本製品「アカガニ車」(弥生時代中期後葉)に可能性がある(守山 2017)。
- (9) 本製品の材料は2本の木部と1本の支木とを工字型に組み合わせたもので、支木を側で胸板に糸をからめ取っていくもの(奈良国立文化財研究所 1993)。糸は、「腰り」をかけた糸を巻き取り、鋸(輪状の糸束)の形にする道具(東村 2011)。糸(東村比)は「麻の織かけが得た糸を掛け、①検尺器 ②捻り器 ③染色(黄) ④小舟(藍緑)に巻くなどの用途につかわれるもの(角山 1991)。
- (10) 遺蹟内における特の主な出土事例は、近江八幡市大中の湖南遺跡(弥生時代中期前半)(黒須 2002・2004B等)、守山市赤野井遺跡(弥生時代中期～古墳時代初期)、古墳時代中期～後期(黒須 1998A)・赤野井遺跡(図 7-1-3)(弥生時代中期～、古墳時代(黒須 2009)・大田遺跡等(西加工または別部材カ(弥生時代終末～古

- 墳時代前期)(黒須 2015B)・下長遺跡等(木部貫式カ(古墳時代前期)(守山 2001)、東近江市石田遺跡カ(弥生時代後期末～古墳時代前期)(能登川町 2005)・蛭子田遺跡(図 7-4)(古墳時代中期末～後期)(黒須 2014B)・正源寺遺跡(岡田 TK10 型式～MT85 型式)(林 1999 他)、長浜市国友遺跡(図 7-2)(古墳時代中期後半～後期前半)(黒須 1988)・神宮寺遺跡(古墳時代中期～後期カ)(長浜市 2004)、大津市穴太遺跡(7世紀前半～中葉)(黒須 1997)に確認できた(東村 2004 他)。時期は弥生時代中期～7世紀中葉のものがある。これらは、琵琶湖辺部や沖積地の遺跡で、溝跡、旧道、倉庫跡から出土。
- (9) 経巻具は「糸束を固定する道具」、布巻具は「織り上げた布を巻取る道具」(奈良国立文化財研究所 1993)。経巻具は「布巻具との間に糸を輪状にかけ、織手の足元でこれを保持する具」「直状式の布巻具・経巻具に対して、輪状式では布巻具・経巻具と呼ぶことにする。直状式と輪状式の区別を明確に表す必要があるためである(東村 2008・2011)。
- 県内の経巻具・経巻具の出土事例は、米原市人江内遺跡(図 7-5)(古墳時代前期)(米原町 1987)、東近江市蛭子田遺跡(弥生時代末～古墳時代前期カ)(黒須 2014A)・石田遺跡(図 7-6)(弥生時代後期末～古墳時代後期)(能登川町 2005)・西園遺跡(図 7-8)(6世紀前半カ)(能登川町 1993)、高島市上野原遺跡(図 7-7)(6世紀前半～7世紀初頭)(黒須 2019B)がある(黒須 2010B、東村 2011・2014 他)。
- 以上の経巻具・経巻具から、糸束の長さや糸をかける側(糸束・輪状)の長さは、弥生時代末～古墳時代末として 45.2～54cm におさまる。県内から出土する布巻具の測定幅は、弥生時代が 41.4cm(図 7-9)、42.8cm 以上(図 7-10)、古墳時代前期が 29.8cm(図 7-11)、最大 25.6cm(図 7-12)、古墳時代後期が 29.6cm 以上(図 7-13)。古墳時代後期の布巻具の測定幅は、47.2cm(図 7-14)・49cm 以上(図 7-15)・48cm(図 7-16)。したがって、織布幅は、弥生時代が 40cm 前後、古墳時代前期が 20cm 前後と 30cm 前後、有機機付機具の導入・併用が推測される古墳時代後期は 30cm 前後と 45cm 前後に収束できる。
- (10) 縫かけは、「縫を保持し、回転させて糸を引き出し易くする道具」(東村 2004・2011)。「縫かけ」の上部構造である「舞刀(反転・撥糸・保持器)は「棒状のものに3箇所(不足のために2穴を追加)の穴を明け、2つを十字に組み合わせると縫かけの糸を掛けて糸束、その他に縫りとするもの」「この一まわりは縫の大きさと関係する」(角山 1991、黒須 2010A)。
- 黒須亜希子氏は「糸をまとめるカ」と、糸束を広げる縫かけの出現は、製糸と製織の分離を予測させる」とかんがえる(黒須 2012)。
- (11) 米原市庭遺跡では、大溝跡より組合式布巻具一對(図 7-11)(古墳時代前期)から出土している。報告者は、庄内期における水辺の祭祀資料に「木製紡織具の埋納」をくわえる(近江町 2001)。紡織具の整備使用は、角山幸洋氏にも指摘している。聖具には、古墳や祭祀遺跡から出土する土製・石製模造品、神字等の金属模造品がある(角山 1991 他)。
- (12) 「回転運動によって素材の繊維に力(糸)をかけて、丈夫な糸束をつくる道具」が紡織である。紡織は円盤状の器(紡錘)と、その中心を貫通する紡架とからなる。紡架は回転に慣性を与えるもので、土製、竹角製、石製、木製。鉄製品がある(奈良国立文化財研究所 1993)。
- (13) 東村純子氏は、「木製紡架は、直径が約5～6cmに収まる」と指摘し(東村 2011)、本資料4点は 10.2・10.4・11.2・7.2cm であり別用途か。
- (14) 西河原遺跡群は、西河原森ノ内遺跡、西河原宮ノ内遺跡、西河原遺跡、岡ノ部遺跡、光相寺遺跡、古地樂寺遺跡、古地ノ部遺跡を指すもの(堀中 2008)で、野洲市西河原から古地にかけてひろがる遺跡の総称である。以上の遺跡に、光明寺遺跡、虫生遺跡(出土1号木部/西河原遺跡群出土木部・重要文化財指定)や木部遺跡等々をくわえる場合もある。
- 西河原遺跡群出土木部の時期は、第1期は7世紀中葉、第2期は7世紀後葉、第3期は7世紀末～8世紀初頭、第4期は8世紀前半、第5期は8世紀後半、第6期は8世紀末～9世紀初頭、第8期は9世紀後葉に区分されている(堀中 2008)。
- (15) 前掲注(10)と同。
- (16) 遺蹟内における縫かけの支木(舞刀)の主な出土事例は、彦根市、守山市、米原市、東近江市、長浜市、大津市にある(東村 2004 他)(図 6)。

- ①彦根市松原内湖遺跡 (図6-1) (弥生時代後期～古墳時代初期) (滋賀県 1992)
ア、軸心中心～小孔外側の長さ：図面左/28.5cm、図面右/29cm
- ②彦根市松原内湖遺跡 (図6-2) (弥生時代後期～古墳時代初期) (同上)
ア、(25.5cm, 28.4cm, 31.2cm, 33.8cm ※ (□) は未貫通孔。
イ、小孔中心間の長さ：(2.8cm), 2.7cm, 2.7cm
※報告書では、①②他の紡錘具を調査時代(後期～晩期)に収めている。
- ③守山市下長遺跡 (図6-4) (古墳時代前期) (守山市 2001)
ア、20.8cm, 26.4cm, 30.2cm, 33.7cm イ、5.5cm, 3.9cm, 3.4cm
- ④守山市下長遺跡 (図6-5) (古墳時代前期) (同上)
イ、5.2cm, 5.2cm, 5.3m, 5.3cm, 5.1cm, 5.5cm, 6cm, 5.7cm
※転用された整経台(三重県2000、黒須2012他)。類例は、守山市大門口遺跡(滋賀県2015B)、草津市西宮遺跡・笠寺遺跡・南宮古墳群(草津市2013)、東近江市石田遺跡(能登川町2005)、長浜市塩津遺跡(滋賀県2021)にある。弥生時代末～7世紀前半、近世。
- ⑤東近江市市西遺跡 (図6-7) (古墳時代前期) (能登川町 1988)
ア、25.7cm, 29.7cm, 35.7cm イ、4.1cm, 5.3cm
- ⑥東近江市市西遺跡 (図6-8) [4世紀] (能登川町 1993)
イ、7.5cm, 10cm, 10cm
- ⑦米原市人江内湖遺跡 (図6-12) [陶器 TK23・47 型式→MT15・TK10 型式併用] (滋賀県2008B) ア、27.6cm, 34.4cm イ、7cm
- ⑧米原市人江内湖遺跡 (図6-13) [陶器 TK23・47 型式→MT15・TK10 型式併用] (滋賀県2007) ※長浜市神宮寺遺跡[387]と同型。ア、図面左/23.2cm, 25cm・図面右/22.3cm, 24.9cm
イ、図面左/1.9cm・図面右/2.5cm
- ⑨米原市人江内湖遺跡 (図6-15) [陶器未詳] (同上) ア、21.5cm
- ⑩米原市人江内湖遺跡 (図6-16) (古墳時代後期) (滋賀県2015A)
イ、7.2cm
- ⑪守山市阿比留遺跡 (図6-21) [6世紀後半～7世紀初期] (守山市 1998) ア、図面左/44.6cm, 48.8cm, 52.8cm・図面右/43cm
イ、4.4cm, 4.2cm ※県内出土例では、軸心周辺の加工度も高い。
- ⑫東近江市榎子田遺跡 (図6-23) [7世紀前半] (滋賀県2014A)
イ、9.2cm, 4.3cm
- ⑬大津市穴太遺跡 (図6-24) [7世紀前半～中葉] (滋賀県20197)
ア、48.2cm, 53cm イ、4.9cm
- ⑭長浜市塩津遺跡 (図6-27) [12世紀] (滋賀県2021)
ア、図面左/12.4cm・図面右/5.5cm, 13cm イ、図面右/8cm
軸心中心～小孔外側の長さは、弥生時代後期～6世紀中葉頃が20.8～23.2cm, 24.9～29cm, 30.2・31.2cm, 33.7～34.4cmにまとまりがある。6世紀後半～7世紀中葉は、43・44.6cm, 48.2・48.8cm, 52.3～53cmとなり、支え木と認められる可能性が認められる。富坂遺跡の支え木(図4-7)は、両者の近接値にあわせると、御明田古墳群出土本製品(図3-15)の約85cmは、滋賀県内で同等物の事例をみない。
- 黒須希子氏は、大阪府内出土の礎かけを整理し、6世紀には「礎輪の大きさに一定の規格があったこと」を指摘している(黒須2010A)。
- 県内出土の礎かけは、弥生時代後期～古墳時代前期では交通の要路である拠点的な集落跡にみられ、古墳時代中期末～7世紀中葉頃には渡来系集団が想定される集落跡にみられる。この様相は、市内の御明田古墳群・五家遺跡、三宅東遺跡、富坂遺跡の出土品にもみられる。
- (17) この他に長方形部材(図6-10)がある。市内では、西河原森ノ内遺跡第5次調査の円形板(図6-26/未報告) [7世紀末～8世紀初期]と長方形部材[28] [8世紀初期～中頃] (野洲市2007C)に可能性がある。
- 滋賀県内における本製品の出土事例は、長浜市神宮寺遺跡(古墳時代中期～後期) (長浜市2014)、米原市人江内湖遺跡(図6-14) [陶器 TK23・47 型式→MT15・TK10 型式併用] (滋賀県2008B)、東近江市榎子田遺跡 [6世紀～8世紀中頃] (滋賀県2014B)にある。
- (18) 糸持は、「狭義には回転を利用して、捻かけにかけた糸を巻き小分けする道具」(東村2004・2011)。
- 滋賀県内で出土する糸持は、大津市賀里遺跡 [6世紀後半] (滋賀

- 県20197)・穴太遺跡 [7世紀前半～中葉] (滋賀県20197)、守山市赤井野遺跡・本製品 [古墳時代] (滋賀県1998A)・服部遺跡 [9～10世紀] (奈良国立文化財研究所1985他)、近江八幡市大中の湖南遺跡 [7～8世紀, 9～11世紀] (滋賀県2002B)、彦根市六反田遺跡 [8世紀後半] (滋賀県2013)、長浜市塩津遺跡 [12世紀] (滋賀県2019A)、高島市上御殿遺跡 [6世紀中頃～7世紀初期] (滋賀県2019B)・正伝寺遺跡 [10世紀後半] (滋賀県1990B)にある。大中の湖南遺跡、糸持寺遺跡、塩津遺跡は大型(東村2004他)。
- 古墳時代後期～古代の糸持は、渡来系集団が集住地である大津北部をはじめ、水陸交通路の要衝や官制の権柄を呈する遺跡から出土している。
- (19) 調査担当者である野洲市教育委員会の岸塚氏には、遺物整理中にもかわらず、資料の実見や支所関係図に配慮いただいた。資料の正式な見解については、近年刊行予定の報告書によるものとする。
- (20) 前掲注(9)と同。
- (21) 東村純子氏は、「少なくとも古墳時代には定型化した経送り具が使用されていた」とかんがえ、郡原上野井稲崎山古墳出土滑石製「5世紀」より「上層片型経送り具」を設定した。特徴には、「長さ74～80cm、幅25～30cmの板材」「長側面はならびに均等に割込み、割込み部の長さは約50～60cmで反対側の長側面とはほぼ平行する」「針葉樹の硬材材」等の「強い規格性」をあげた。時期は、「古墳前期から中期に所属するものも多く、後期まで存在していた可能性がある」。また「1側面の割込みは、経が循環する際隙を確保するため、約50～60cmの範囲に経をかけることができる。割込み部と反対側の側面を丸くつくるのは、経への負担を和らげるため」と述べる(東村2008・2011)。
- 黒須希子氏は、大阪府瀬田郡奈良遺跡出土の経送り具を観察し、「平面は平坦に見えるが、中央部が僅かに凹んでおり、左右部分が残存すること、また上面中央は角が摩滅し丸みを帯びるが、左右部分は角が残ることを確認している」(黒須2010B)。
- 古墳時代中期に属する三宅東遺跡の出土部材(図4-15)は、幅(欠損)や木取りをのぞけば、おおむね上記の特徴をあらわしている。
- (22) 総称(総経)およびひもは、経の別名。
- (23) 『木造集成図説 近畿原始遺跡(解説)』(奈良国立文化財研究所1993)には、「古墳時代の標準的平面として系系6本という形が想定できる」とし、付随する木柵は12点が一組となる。
- (24) 滋賀県内では、長浜市鴨田遺跡・M区(自然川原SR1から草袋形土製品が出土している(滋賀県1998B))、京都府知恩院は、滋賀県小瀬原出土となつた皮袋形須恵器(古墳時代)を所蔵している。
- 知恩院所蔵資料は、京都国立博物館「日本と韓国出土の考古遺物」(2018年6月19日～2018年9月2日)展示作品リストを参照した。
(https://www.kyohaku.go.jp/old/jp/theme/floor3_2/3_2_korenade/kouko_20180619.html)。令和4年11月27日検索。本件は、花田勝広氏の情報提供を鈴木茂氏から聞いた。
- (25) 市内遺跡出土資料は、花田勝広氏と徳岡己氏の研究があり(花田1993、徳岡2006)、その一部は(野洲市2007B)に収載されている。
- (26) 三宅東遺跡から製土器が出土している。ひとつは、溝渕から出土した大坂湾岸産 [5世紀末] (野洲市2005E)。他方は竪立柱(竪柱)建物復元する柱穴跡から出土した若狭産 [8世紀] (野洲市2021)である。後者の産地比定は、花田勝広氏のご教示による。
- この他には、木部遺跡・T61・第Ⅱ面の溝渕S60から製土器が出土している(7世紀前半～8世紀) (滋賀県2002A)。生産地は未詳。
- (27) 滋賀県における古代の下駄の出土は、古墳時代前期の拠点集落である守山市下長遺跡(滋賀県2001)をはじめ、長浜市神宮寺遺跡 [5世紀中頃～6世紀初期]、守山市赤井野遺跡(古墳時代前期)、彦根市松原内湖遺跡(奈良時代)の他、渡来系集団の居住が想定される集落跡(大津市賀里遺跡・穴太遺跡 [6世紀～7世紀]、守山市阿比留遺跡 [6世紀]、東近江市榎子田遺跡 [6世紀] 等)、官制的な性格が想定される遺跡(近江八幡市大中の湖南遺跡 [7世紀]、東近江市市西遺跡 [8世紀]、彦根市六反田遺跡 [8世紀]、高島市鴨田遺跡 [9世紀] 等)が一定の割合を占める。また、西河原森ノ内遺跡から出土する南をフグッ状

の4本面に加工した下駄(7世紀後半~8世紀)は、蒲生郡竜王町綾戸道跡(集落跡)[6世紀後半]。県外では大泉町南尾北道跡(渡来系集落跡)(5世紀前半~6世紀前半)、京都府長岡京(都城)[8世紀]にみられる(『温習眼』1992B、守山市2001・守山市立埋蔵文化財センター2019、長井市2004、木村2015・2022)。

市内の遺跡から出土した下駄は、(野洲市 2016) にまとめている。

- (28) ④木部・八丈地域の木部遺跡・下層遺構面の土坑 SK-07 には、土師器長胴甕 1 点〔6 世紀〕が埋設されており、単棺の土器（甕）棺墓の可能性が示唆されている（図 10-27）。

(29) 市内道路出土の須恵器把手付輪は、五条道路〔包含層〕1点（未報告）、昭和59年度（1984）調査の菟波道路〔溝跡〕1点、平成20年度（2008）調査の三宅東道路〔溝跡〕の1点（未報告）がしられる。この他には、昭和57年度（1982）調査の夕日ヶ丘北道路の把手1点（掘振か）に可能性がある。夕日ヶ丘北道路河は、鈴木茂氏の告知による。

(30) 市内の集落遺跡から出土する須恵器台付壺は、五条遺跡〔溝跡〕1点（未調査）、木部遺跡2点、由根・土里遺跡〔溝跡〕1点がある。

(31) 市内集落遺跡出土の遺患器器台は、五条道跡〔調跡・包含期〕4点（未報告）、木部道跡4点、八八道跡〔調跡〕2点、下々塚道跡〔堅穴建物跡〕1点、中畑・古里道跡〔調跡〕1点、北坂南道跡〔北坂道跡〕1点がある。他には、大藤原西道跡を含む14基の古墳から計28点以上を確認できる。

(32) 城ヶ谷和広氏は、『6世紀代の須恵器は主として古墳に供給され、生活レベルへの流通量はまだ少なかったと考え』、「この時期の須恵器は古墳出土品も含めて、融着したもので、ゆがんだもので、亀裂が入っているものが出土する事例が多かった。量的な欠如を補うために失敗品でも使うことができれば使用していた可能性がある」と述べた(城ヶ谷 2007)。

中村智孝氏は、犬上川左岸環状地の古墳に副葬された須恵器の「品類差を平焼成という属性に割付し」、通常品と不良品（焼きむずみのあるものや破れのあるものを）の割合をもとめた。結果、一地域内において一様に不良品が各古墳群に不良品が割合としてと推察した。ただし「不良品の割合が全体的に10%程度しめるという値が、須恵器を焼成する時点において偶然にも生ずる不良品の割合を示しても」は指摘しつつ、「焼成後の一定量の不良品は須恵器が、一古墳群に供給され、その中で各古墳群に何らかの基準をもちて振り分けられた（分配された）可能性」を説いた（中村1997）。

市内道路出土の不良品須恵器のうち、6世紀代まで遡るものは五条道跡、木部道跡、木部天神前古墳、市三宅宅道跡、大篠原西道跡、小篠原道跡、中北道跡、中畑・古里道跡となる。数量は6世紀～7世紀前半が五条道跡に、7世紀後半～8世紀は西河原道跡群に多い。

(33) 小藤原道跡・相田遺跡・第一地区・竪穴建物（弥生Ⅴ様式）内の土坑出土 H-202 は羽釜に、H-128・F-127・H-199 は筒形土製品に、F-201 はカマド形土器か。時期は「7 世紀初頭頃」。土坑 10 の F-1043・F-1044 もカマド形土器か（報告では「土を土器、F」を植楠とする）。第四地区、ビット 48 は土製土製品出土に報告され、調査区を貫通するけれども、カマド形土器、羽釜、土山製、筒形土製品の組みあわせがそろう（野間 1977）。同遺跡は、他にもカマド形土製品出土事例がある。

県内のカマド形土器は、辻川哲朗氏の研究がある（辻川 2017）。筒形土製品は榎岡克己氏と坂清氏の研究がある（榎岡 2001、坂 2007）。

(34) (野洲町 1993)。鉢を反転させた形状。類例には三重県高井 A 遺跡の自然流路 SD31 出土「円筒状（形）須恵器」がある。同流路は上層に中世、中層～下層にかけて古墳時代末期、飛鳥時代、奈良時代の遺物が出土（三重県 1998、鈴鹿市考古博物館 2002）。鈴木茂氏のご教示による。

(35) 相生7号墳・冠面蓋の体部外面には刻畫「此者□□首□□」（7世紀中葉）（滋賀縣他1992A）、②西河原・吉地地区の光相寺遺跡・碗（蓋）（1989外部）に刻畫「康□□九田日作毛比出」（7世紀代か）（岡本1981図）がある。光相寺遺跡出土資料は、所在不明であるけれども、山田謙吾氏より器型や出土状況等について教示をえた。

(36) 第1次～第4次発掘調査では「三遺構面（第1遺構面7世紀初頭、第2遺構面6世紀初頭～末、第3遺構面5世紀中頃～末）の集落跡が検出され、第3遺構面では造付け廻りが付く方形竪穴式建物跡と独立柱式建物跡が保存し、第2遺構面では全て独立柱式建物跡に変遷していること

が確認された。さらに、第3遺構面では、一辺が1 m余りの大型掘方の掘立柱式建物跡が検出され、初期須恵器や韓式系土器等の出土もあり、この時期の首長層の居館であった可能性が指摘されている。(中主町2002)。調査報告には概要(愛媛市2006A)のみで、現在再整理作業中。

(37) 6世紀~7世紀中葉にかけては、地域の需要に応じた生産量である

空場近隣施設で一元的な生産管理・経営をおこなっていた可能性もある。

(38) やや時期は下るが、市内道跡から出土する古代銭貨は、⑤大羅原地域・夕日ヶ丘北道跡・大羅原西道跡、②西河原・吉地地域および④木部

⑥辻町・小堤地域の辻町遺跡に萬年通寶1枚がみられる(辻川 2005A)。なお、7世紀代の紡錘車も、②と⑤の地域から出土している。

(339) 山尾幸久氏は、西河原森ノ内1号本館に記された「三宅達」を「草埔屯倉」に配置され、施設の管理実務を擔掌とした旧難波吉士ではなかろうか(山尾1990B)。「三宅」には「草埔屯倉」の管理施設があり、移住民系の「難波吉士」の(中には「三宅達」氏と称す)が中央から派遣されて管理責任者を務めていた(山尾2016)とかながえる。

大橋創弥氏は、『日本書紀』垂仁天皇八十八年一月十日程、『古事記』垂仁天皇段、『新撰姓氏録』右京諸蕃・摂津国諸蕃をひいて、『三宅連』をアメノヒボコの子孫に、あわせて秦氏系『三宅連』の存在は、跡山古窯跡群と津浦屯倉・西河原道跡群の不可分の関係」と説く（大橋 2017）。

(40) 西河原遺跡群の光相寺遺跡では、『五十戸家』(サトノミヤケ/所在不明)『三宅』(家カ)『土刀自家』(彌)『石邊君』(稲色)『馬』等の墨書契形器が出土している(岡本 1989、山尾 1995、野洲市 2007C 他)。

(41) 龍川修平氏は、『六世紀前半の体制とは - (中略) - 在地首長層を強化

し、再編したものが、大津北郊の集団（志賀渡人）の関与により「六世紀後半から七世紀の体制の組手は、地域首長と言うよりも、職能的な集団。官僚化しつつある首長層が担っていた」とし、その過程において「六世紀前半期に大きな権限が与えられた地域首長層の固体化が進行し」「琵琶湖地域は、（中略）王権の強い管理下に置かれた」ことを説く（細川2012B）。

岸本道昭氏は、律令体制の「徹底した土地の支配は、国家が公地公民的な政策で賦課徴税を目的としたものであった。それは古墳時代社会の首長制的な私権を否定し、領域支配を軸とした律令国家の地方制度を強化徹底するために、在地首長を官人として公権力へ転化させるものであった」とかんがえる（岸本 2013）。

文献

石橋茂登 (2016)「日韓古代木製品についての覚書・タタリ状製品について」『日韓文化財論集』奈良文化財研究所季報第 95 冊、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・大韓民国昭宣文化財研究所、奈良 大樹 (2008)『西河原木部館の再検討』『古代地方木部の世紀-西河原木部からみえてくるもの-』財団法人滋賀文化財保護協会・滋賀県立安土城考古博物館、オンライン出版

市 大樹 (2008)『西河原木部館の再検討』『古代地方木部の世紀-西河原木部からみえてくるもの-』財団法人滋賀文化財保護協会・滋賀県立安土城考古博物館、オンライン出版

一宮市博物館 (1992)『平成 4 年度企画展 織りの流れを探る-古墳時代までを中心に』

井上尚明(1994)「コップ形須恵器の考察-奈良時代の計量器について-」
『考古学雑誌』第79巻第4号、日本考古学会

井上竜也（2020）「西田井遺跡出土の土師質土製品について」『令和元年
筑前県立文化財調査報告書』。

近江町教育委員會(2001)『近江町埋藏文化財調査集報4-礎遺跡第3次調査報告』、近江町文化財調査報告書第22集、近江町編纂。

財団法人大阪府文化財センター・日本民家集落博物館(2006)『シリーズ
ここまでわかった考古学 はたおりの歴史展・古代の織物生産を考える
-「カルチュアはっとり」No.8

大橋信弥(1995)『近江における渡来系氏族の研究-志賀渡人を中心に-』
て『靑丘学術論集』第6集、財団法人韓國文化研究振興財団
大橋信弥(1998)『付論、近江の律令遺跡の諸問題-内野遺跡をめぐる試
論-』『内野遺跡Ⅱ』は縄文館関係遺跡発掘調査報告書 XXV-3、滋賀県

教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会

大橋信弥(2006)「近代における津国国家成立期の一様相-西河原森ノ内遺跡の性格をめぐって-」『淡海文化財論叢刊』第一輯、淡海文化財論叢刊行会

大橋信弥(2008)「近淡海国史と草津遺跡-西河原森ノ内遺跡から見えてくるもの」『古代地方史の探求-西河原森ノ内本拠から見えてくるもの-』財団法人滋賀県文化財保護協会・滋賀県立土佐考古博物館、サンライズ出版

大橋信弥(2015)「近代における文字文化の受容と渡来」『国立歴史民俗博物館研究報告』第194集、国立歴史民俗博物館

大橋信弥(2016)「草津遺跡と近淡海国史-近代における国造の展開-」『淡海文化財論叢刊』第八輯、淡海文化財論叢刊行会

大橋信弥(2017)「龍山古墳群と草津遺跡-フタイ遺跡出土本拠に接して-」『淡海文化財論叢刊』第九輯、淡海文化財論叢刊行会

大橋信弥(2018)「日本古代の織物生産と渡来」『繊維製品消費科学』第59巻第3号、一般社団法人繊維製品消費科学会

岡本武憲(1989)「近江出土の書器土について」『滋賀県埋蔵文化財センター紀要』3、滋賀県埋蔵文化財センター

角 建一(2000)『野洲町出土の初期須恵器』『野洲町立歴史民俗資料館研究紀要』第7号、野洲町立歴史民俗資料館

財団法人元興寺文化財研究所(1998)『竊盗遺跡発掘調査報告』

岸本道昭(2013)「7世紀の地域社会と領域支配-播磨国保原の古墳と寺院、郡民の成立-」『国立歴史民俗博物館研究報告』第179集、国立歴史民俗博物館

草津市教育委員会(2013)『西海道遺跡・笠寺遺跡・南宮古墳群発掘調査報告書』草津市文化財調査報告書95

黒瀬重希子(2010A)「上私部遺跡出土の鉄けについて」『大坂文化財研究』第36号、財団法人大阪府文化財センター

黒瀬重希子(2010B)「機織に関する歴史研究-機織の導人と変遷-」『研究調査報告』第7集、財団法人大阪府文化財センター

黒瀬重希子(2012)「機織り」『時代を支えた生産と技術:古墳時代の考古学』同成社

小池 寛(1995)『陶土器・土器に関する基礎研究』古墳文化とその伝統、誠誠社

小池 寛(1996)『遺跡・墳に関する基礎研究-生産地を中心にして-』『京都府埋蔵文化財調査』第3集、創立十五周年記念誌、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

小池 寛(2022)「古墳時代後期における集落施設の背景について」『京都府埋蔵文化財情報』第143号、公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

熊生 菊(2013)「古代祭祀の形成と系譜-古墳時代から律令時代の祭具と祭祀」『古代文化』第65巻第3号、公益財団法人古代学協会

佐野由美子(2009)『龍山古墳群の成立と機織器』『山典遺物記念論集-考古学と地域文化-』山典遺物記念論集刊行会

滋賀県教育委員会(1973)『国造8号線長浜バイパス関連遺跡発掘調査報告書』

滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会(1973)『湖西線関係遺跡調査報告書』

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(1977)『はま整地関係遺跡発掘調査報告書N-II』

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(1985)『はま整地関係遺跡発掘調査報告書X-9』

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(1988)『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書X-長浜市同友遺跡』

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(1990A)『六条遺跡発掘調査報告書』県道大津市山近江八幡線新設道路改良工事に伴う

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(1990B)『一般国道161号線(高島バイパス)建設に伴う新旭町内遺跡発掘調査報告書1-正伝寺南遺跡』

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(1992A)『板生古墳群発掘調査報告書』びわ湖の川都市対防砂防工事に伴う

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(1992B)『松原内湖遺跡発掘調査報告書II-木製品』琵琶湖湖域下水道管根長引処理区東部浄化センター建設に伴う

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(1994)『小比江・太田遺跡』県道荒見上野近江八幡線改良工事に伴う中主町内遺跡発掘調査報告書(1)

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(1997)『穴太遺跡発掘調査報告書II-一般国道161号(西大津バイパス)建設に伴う』

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(1998A)『赤野井河遺跡』琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書2

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(1998B)『室道跡宮司遺跡I 鴨田遺跡V』長浜新田中小河川改修工事に伴う発掘調査報告書VI

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(1999)『園ノ部遺跡IV-西河原宮ノ内遺跡I』県道荒見上野近江八幡線改良工事に伴う中主町内遺跡(IV)

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(2001)『西河原宮ノ内遺跡II』県道荒見上野近江八幡線改良工事に伴う中主町内遺跡(VI)

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(2002A)『本部遺跡I』県道荒見上野近江八幡線改良工事に伴う中主町内遺跡(VII)

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(2002B)『緊急地域雇用特別交付事業に伴う出土文化財管理業務報告書』

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(2004A)『本部遺跡II』県道荒見上野近江八幡線改良工事に伴う中主町内遺跡(VIII)

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(2004B)『緊急地域雇用特別交付事業に伴う出土文化財資料化業務報告書I』

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(2007A)『夕日ヶ丘北遺跡・大塚原西遺跡』県営農業農村整備関係(県営田園交流基盤・田園空間整備)遺跡発掘調査報告書

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(2007B)『八江内湖遺跡I』一般国道8号米原バイパス建設に伴う発掘調査報告書1

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(2008A)『柳道跡IV』草津川改修事業ならびに草津川放水路建設事業に伴う発掘調査報告書X

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(2008B)『八江内湖遺跡II』一般国道8号米原バイパス建設に伴う発掘調査報告書2

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会(2009)『赤野井河遺跡』琵琶湖(赤野井河)補助河川環境整備事業に伴う発掘調査報告書

滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会(2013)『六反田遺跡I』中山間地域総合整備関係遺跡発掘調査報告書3-I

滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会(2014A)『軽子田遺跡I』産生スマートインターチェンジ設置工事(NEXCO事業区域)に伴う発掘調査報告書

滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会(2014B)『軽子田遺跡2』産生スマートインターチェンジ設置工事(県事業区域)に伴う発掘調査報告書

滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会(2015A)『八江内湖遺跡III』一般国道8号米原バイパス建設に伴う発掘調査報告書3

滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会(2015B)『下長遺跡・横江遺跡・大門遺跡』都市計画道路大津湖南幹線都市計画道路事業(大門工区)に伴う発掘調査報告書

滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会(2019A)『臨津港遺跡I』大川総合流域防災事業に伴う発掘調査報告書1

滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会(2019B)『上御殿遺跡』鴨川補助流域砂防河川改修事業(青井川)に伴う発掘調査報告書3

滋賀県・公益財団法人滋賀県文化財保護協会(2021)『臨津港遺跡2』大川総合流域防災事業に伴う発掘調査報告書2

滋賀県教育委員会・野洲町教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会
(1977)『久野部遺跡発掘調査報告書「七ノ坪地区」』
滋賀県立安土城考古博物館・財団法人滋賀県文化財保護協会(2008)『古代
地方木簡の世紀-文字資料からみた古代の近江-』
城ヶ谷和広(2007)『愛知郡下における須恵器生産と流通』『研究紀要』
第8号、財団法人愛知知教育・スポーツ振興財団愛知知理蔵文化センター
杉本源造(1992)『中郷吉里遺跡出土の陶器』『滋賀考古』第8号、滋賀
考古学会
鈴鹿市考古博物館(2002)『平成13年度企画展 三重のおかしな須恵器』
鈴木 茂(2021)『龜山古窯址群の諸様相について-野洲市所蔵資料の再
整理をとおして-』『野洲市歴史民俗博物館研究紀要』第25号、野洲市
歴史民俗博物館
鈴木 茂(2022)『タケ丘1号墳及びタケ丘古窯跡2・2号窯資料につ
いて-龜山古窯址群関連資料の整理-』『野洲市歴史民俗博物館研究紀
要』第26号、野洲市歴史民俗博物館
鈴木敏昭(1999)『遠江における原始・古代の紡績具』『浜松市博物館』
第12号、浜松市博物館
飯田秀雄(1991)『日本古代の貴族と地方豪族』塙書房
辰巳 勝(1989)『3、長尾湖東岸の平地地形の特徴と光相寺遺跡周辺の
地形』『昭和63年度中土町内遺跡分布調査(Ⅱ)概要報告書』中土町
文化財調査報告書第19集、中土町教育委員会
館野和己(2004)『ヤマト王権の列島支配』『日本史講座』1、東アジア
における国家の形成、財団法人東京大学出版会
中土町教育委員会(1983)『中土町文化財調査報告書第1集』
中土町教育委員会(1984A)『中土町文化財調査報告書第2集』
中土町教育委員会(1984B)『昭和58年度五来道跡発掘調査概報』
中土町教育委員会(1985)『中土町文化財調査報告書第3集』
中土町教育委員会(1986)『昭和61年度中土町内遺跡分布調査(Ⅰ)概
要報告書』中土町文化財調査報告書第11集
中土町教育委員会(1990A)『西河原森ノ内遺跡第1・2次発掘調査報告
書Ⅰ』中土町文化財調査報告書第21-1集
中土町教育委員会(1990B)『古地薬師堂遺跡第2次発掘調査報告書Ⅰ』
中土町文化財調査報告書第22-1集
中土町教育委員会(1991)『平成元年度中土町内遺跡発掘調査年報』中土
町文化財調査報告書第30集
中土町教育委員会(1995)『平成6年度中土町埋蔵文化財発掘調査集Ⅰ』
中土町文化財調査報告書第45集
中土町教育委員会(2001)『平成11年度中土町内遺跡発掘調査年報』中
土町文化財調査報告書第60集
中土町教育委員会(2002)『国兵衛氏土社遺跡保存整備報告書 発掘調査
編』中土町文化財調査報告書第65集
中土町教育委員会(2004)『平成14年度中土町内遺跡発掘調査年報』中
土町文化財調査報告書第67集
辻川哲朗(2003A)『近江地域の円筒埴輪編年』『埴輪調査』第4号、埴
輪検討会
辻川哲朗(2003B)『近江における古墳時代中・後期の円筒埴輪-長浜古
墳群-息長古墳群を中心として-』『平成15年度春季特別展 日知知ら
す可王無し-羅刹大王の出現-』滋賀県立安土城考古博物館
辻川哲朗(2005A)『近江地域出土の古代銭貨』『紀要』第18号、財法人
人滋賀県文化財保護協会
辻川哲朗(2005B)『近江における埴輪研究の現状と課題』『人間文化』
17号、滋賀県立大学人間文化学部研究報告17号、滋賀県立大学人間
文化学部
辻川哲朗(2010)『近江・西河原遺跡群と古代東山道-地方官衙と交通路
の関係をめぐって-』『古代文化』第61巻第4号、財団法人古代学協会
辻川哲朗(2012)『羅刹大王の出現-埴輪を中心にして-』『平成24
年度春季特別展 潮を見つめた王、羅刹大王と埴輪-』滋賀県立安土城
考古博物館

辻川哲朗(2015)『考2 越前塚古墳群・出土埴輪について-野洲地域の
後期埴輪生産』『平成26年度野洲市内遺跡発掘調査年報』野洲市教
育委員会
辻川哲朗(2017)『近江地域のカタナ形土器-渡来系集約の動向把握にむ
けて-』『紀要』第30号、公益財団法人滋賀県文化財保護協会
角山幸洋(1991)『織物』『古墳時代の研究』第5巻 生産と流通Ⅱ、雄山
閣出版
角山幸洋(1992)『出土「舞刀」について』『関西大学東西学術研究所紀
要』第25巻、関西大学東西学術研究所
徳岡克己(1987)『滋賀・光相寺遺跡』『本間研究』第九号、本間学会
徳岡克己(2001)『付家 カマドに伴う壁突について』『平成11年度中土
町内遺跡発掘調査年報』中土町文化財調査報告書第60集
徳岡克己(2006)『野洲市北部の渡来系遺物と遺構について』『淡海文化
財論叢』第二輯、淡海文化財論叢刊行会
徳岡克己(2011)『西河原遺跡群とその周辺』『荏菰園と地域文化-林博
通先生追記記念論集』林博通先生追記記念論集刊行会
長浜市教育委員会(2004)『神宮寺遺跡(1992年)』長浜市埋蔵文化財
調査資料集第54集
中村孝代(1999)『滋賀県野洲町内出土の跡について』『1997年野洲町
埋蔵文化財発掘調査年報』野洲町文化財資料集1999-2、野洲町教育委
員会
中村智孝(1997)『犬上左平塚遺跡における古墳出土の土器群について
』『紀要』第10号、財団法人滋賀県文化財保護協会
奈良国立文化財研究所(1985)『木器集成図録 近畿古代篇』奈良国立文
化財研究所史料第27冊
奈良国立文化財研究所(1993)『木器集成図録 近畿原始篇(解説)』奈良
国立文化財研究所史料第36冊
仁藤敏史(2009)『古代王権と「後期ミヤケ」』『国立歴史民俗博物館研究
報告』第152集、国立歴史民俗博物館
能登川町教育委員会(1988)『能登川町埋蔵文化財調査報告書第10集
斗西道跡』※現東近江市
能登川町教育委員会(1993)『能登川町埋蔵文化財調査報告書第27集
斗西道跡(2次調査)』※現東近江市
能登川町教育委員会(2005)『石田道跡』能登川町埋蔵文化財調査報告書
第58集、※現東近江市
畑中英二(1993)『6世紀と7世紀-須恵器生産における質的問題-近江
における分布状況を中心に-』『滋賀考古』第10号、滋賀考古学会
畑中英二(2008)『西河原道跡群を語る』『古代地方木簡の世紀-西河原
森ノ内木簡から見えるもの-』財団法人滋賀県文化財保護協会・滋
賀県立安土城考古博物館、サンライズ出版
花田勝広(1993)『野洲町出土の埴輪系土器』『埴輪系土器研究』IV、埴
輪系土器研究会
林 純(1991)『近江における古墳時代須恵器生産の特徴』『滋賀考古』
第6号、滋賀考古学会
林 純(1999)『五ヶ荘町正源寺遺跡出土の土器について』『滋賀考古』
第21号、滋賀考古学会
早野浩二(2009)『古墳時代の村落と石製模造品』『研究紀要』第10号、
財団法人愛知知教育・スポーツ振興財団愛知知理蔵文化センター
坂 誠(2007)『陶器・土製品からみた百濟地域と日本列島』『考古学・古
小笠原好孝先生追記記念論集』小笠原好孝先生追記記念論集刊行会
東村純子(2004)『古代日本の紡績技術-林・徳岡・糸持の分析から-』
『史料』第87巻第5号、史学研究会
東村純子(2008)『輪式式原始機の研究』『古代文化』第60巻第1号、
財団法人古代学協会
東村純子(2011)『考古学からみた古代日本の紡績』六一書房
東村純子(2014)『第6章 野洲市遺跡出土の経送具と紡績技術』『野洲市
道跡1』滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会
東村純子(2019)『古代須恵器の生産力構造と女性』『女性学論』日本史
古代から現代まで』誠選出版

- 東村純子 (2021)「古代日本の布生産と女性」『史料』第104巻第1号、史学研究会
- 東村純子 (2022)「機織と女性 古代日本の布の規格に関する考察」『国立歴史民俗博物館研究報告』第235号、国立歴史民俗博物館
- 樋上 昇 (2003)「第Ⅴ章 考古 出土木製品部からみた本川遺跡—古墳前・中期集落の階層性について—」『本川遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第100集、財団法人愛知教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター
- 菱田哲郎 (2005)「須恵器の生産者—五世紀から八世紀の社会と須恵器工人」『人と物の移動』列島の古代史ひと・もの・こと4、岩波書店
- 菱田哲郎 (2007)『古代日本（国家形成の考古学） 諸文明の起源 14』京都大学学術出版会
- 菱田哲郎 (2013)「7世紀における地域社会の変容 古墳研究と集落研究の接続をめざして」『国立歴史民俗博物館研究報告』第179集、国立歴史民俗博物館
- 菱田哲郎 (2019)「地域の開発と後期古墳—ブレイン国家の地域社会の形成—」『国家形成期の首長権と地域社会構造』鳥取県古代文化センター
- 平尾和久 (2021)「紡績研究の現状と課題」『考古学ジャーナル』第753号、ニューサイエンス社
- 平川 南 (2013)「古代の郡家と郷・里」『国立歴史民俗博物館研究報告』第178集、国立歴史民俗博物館
- 広瀬和雄 (2009)「古墳時代後期西構築のための考察 前方後円墳時代は律令国家の前身か」『国立歴史民俗博物館研究報告』第150集、国立歴史民俗博物館
- 穂積裕昌 (2008)「古墳時代後期研究の展開」『研究紀要』第17-1号、三重県埋蔵文化財センター
- 穂積裕昌 (2021)「紡織と祭祀—糸を紡ぎ、布を織り、神を祀る—」『考古学ジャーナル』第753号、ニューサイエンス社
- 細川修平 (1996A)「変遷・野洲における後期古墳時代の典型的な古墳—古墳時代システム論への批判的アプローチ—」『紀要』第9号、財団法人滋賀県文化財保護協会
- 細川修平 (1996B)「集落遺跡から見た古墳時代の特質—古墳時代システム論への予察—」『紀要』第9号、財団法人滋賀県文化財保護協会
- 細川修平 (1997)「古墳時代後期における琵琶湖の水運—琵琶湖周辺の古墳の動向からのアプローチ—」『平成9年度春季特別展 開館五周年記念展 物と人—古墳時代の生産と運搬—』滋賀県立安土城考古博物館
- 細川修平 (2007)「六世紀前半の琵琶湖周辺地域」『考古学論究—小笠原好孝先生退任記念論集—』小笠原好孝先生退任記念論集刊行会
- 細川修平 (2012A)「古墳と舟運」『平成24年度春季特別展 開館五周年記念展—王・継体大王と琵琶湖—』滋賀県立安土城考古博物館
- 細川修平 (2012B)「六・七世紀の琵琶湖」『淡海文化財論叢』第四輯、淡海文化財論叢刊行会
- 米原町教育委員会 (1987)『「人江」内湖遺跡発掘調査報告書』米原町埋蔵文化財調査報告書Ⅵ 幸現米原市
- 米原町教育委員会 (1988)『「人江」内湖遺跡（行司町地区）発掘調査報告書』米原町埋蔵文化財調査報告Ⅶ 幸現米原市
- 三重県埋蔵文化財センター (1998)「一般国道23号中勢道路（6工区）建設事業に伴う高井A遺跡発掘調査報告書」三重県埋蔵文化財調査報告115-8
- 三重県埋蔵文化財センター (2000)「一般国道23号中勢道路（8工区）建設事業に伴う六A遺跡発掘調査報告書（木製品編）」三重県埋蔵文化財調査報告115-17
- 本村充保 (2015)「近畿地方における古代の下駄の様相」『古代文化』第66巻第4号、公益財団法人古代学協会
- 本村充保 (2022)「下駄の考古学」ものが語る歴史シリーズ41、同成社
- 守山市教育委員会 (1998)『守山市文化財調査報告書第69冊』
- 守山市教育委員会 (2001)「下長遺跡発掘調査報告書」守山市文化財調査報告書
- 守山市教育委員会 (2017)「下之郷遺跡発掘調査報告書—総括編—」
- 守山市埋蔵文化財センター (2019)「本と人のかかわり2—木器からみ

- た原始の生産とまつり』令和元年度埋蔵文化財センター秋季特別展
- 野洲市教育委員会 (2004)「1999年埋蔵文化財調査年報」
- 野洲市教育委員会 (2005A)「1984年埋蔵文化財調査年報」
- 野洲市教育委員会 (2005B)「1987年埋蔵文化財調査年報」
- 野洲市教育委員会 (2005C)「1988・1989年埋蔵文化財調査年報」
- 野洲市教育委員会 (2005D)「野々宮遺跡発掘調査概報」
- 野洲市教育委員会 (2005E)「市三宅東遺跡発掘調査報告書」
- 野洲市教育委員会 (2006A)「野洲市内遺跡発掘調査報告Ⅲ」
- 野洲市教育委員会 (2006B)「野洲市内遺跡発掘調査報告Ⅳ」
- 野洲市教育委員会 (2006C)「野洲市内遺跡発掘調査報告Ⅴ」
- 野洲市教育委員会 (2007A)「平成17年度野洲市埋蔵文化財調査概報報告書2」
- 野洲市教育委員会 (2007B)「西河原宮ノ内・比留田山遺跡発掘調査報告書」県道大津守山近江八幡線単独道路改良工事に伴う
- 野洲市教育委員会 (2007C)「西河原森ノ内遺跡第5次・光相寺遺跡第2次発掘調査概報報告書補遺」
- 野洲市教育委員会 (2008)「五条遺跡第14・17・19次発掘調査概報報告書」
- 野洲市教育委員会 (2009)「平成20年度野洲市埋蔵文化財調査概報報告書2」
- 野洲市教育委員会 (2015)「平成26年度野洲市内遺跡発掘調査年報」
- 野洲市教育委員会 (2016)「平成27年度野洲市内遺跡発掘調査年報」
- 野洲市教育委員会 (2019)「平成30年度野洲市文化財調査概報報告書」
- 野洲市教育委員会 (2021)「市三宅東遺跡発掘調査概報報告書」
- 野洲町教育委員会 (1977)「昭和51年度和田遺跡発掘調査概報報告書」野洲町文化財資料集
- 野洲町教育委員会 (1980)「昭和54年度野洲・祖王地区遺跡発掘調査概報報告書」野洲町文化財資料集
- 野洲町教育委員会 (1983)「昭和57年度三堂・野々宮遺跡他発掘調査概報報告書（夕日ヶ丘北遺跡・北坂東遺跡）」野洲町文化財資料集 382-2
- 野洲町教育委員会 (1988)「昭和62年度野洲市内遺跡発掘調査概報」野洲町文化財資料集 1987-7
- 野洲町教育委員会・野洲町埋蔵文化財調査会 (1988)「1986年野洲町埋蔵文化財調査年報」野洲町文化財資料集 1988-2
- 野洲町教育委員会・野洲町埋蔵文化財調査会 (1990)「市三宅東遺跡発掘調査報告書-2 第2次調査」野洲町文化財資料集 1990-4
- 野洲町教育委員会 (1993)「平成4年度野洲町内遺跡発掘調査概報」野洲町文化財資料集 1993-1
- 野洲町教育委員会 (1999)「1997年野洲町埋蔵文化財調査報告年報」野洲町文化財資料集 1999-2
- 野洲町教育委員会 (2001)「史跡大岩山古墳群 天王山古墳・円山古墳・平山古墳調査整備報告書」野洲町文化財資料集 2001-2
- 野洲町教育委員会 (2003)「野洲町文化財調査年報2002」野洲町文化財資料集 2003-2
- 山尾幸久 (1987A)「4. 木簡」『西河原森ノ内遺跡第1・2次発掘調査概報』中主町文化財調査報告書第9集、中主町教育委員会・中主町埋蔵文化財調査会
- 山尾幸久 (1987B)「第3章 第3節 野洲郡成立の前身」『野洲町史』第一巻 通史編、野洲町
- 山尾幸久 (1990A)「第5章 西河原森ノ内遺跡出土木簡」『西河原森ノ内遺跡第1・2次発掘調査報告書1』中主町文化財調査報告書第21-1集
- 山尾幸久 (1990B)「森ノ内遺跡出土の木簡をめぐって」『木簡研究』第一二号、木簡学会
- 山尾幸久 (1995)「第5章 676年の標の本簡」『関ノ部遺跡発掘調査報告書1』県道荒見上野近江八幡線改良工事に伴う中主町内遺跡(Ⅱ)、滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会
- 山尾幸久 (2016)「古代の近江—史的探究—」サンライズ出版
- 古田 晶 (2005)『古代日本の国家形成』新日本出版社
- 守山市内遺跡発掘調査報告書等の一部は、紙面の関係上割愛した。

表1 市内遺跡出土の特徴的な遺物・遺構一覧表（古墳時代～古代）

[illegible][illegible]

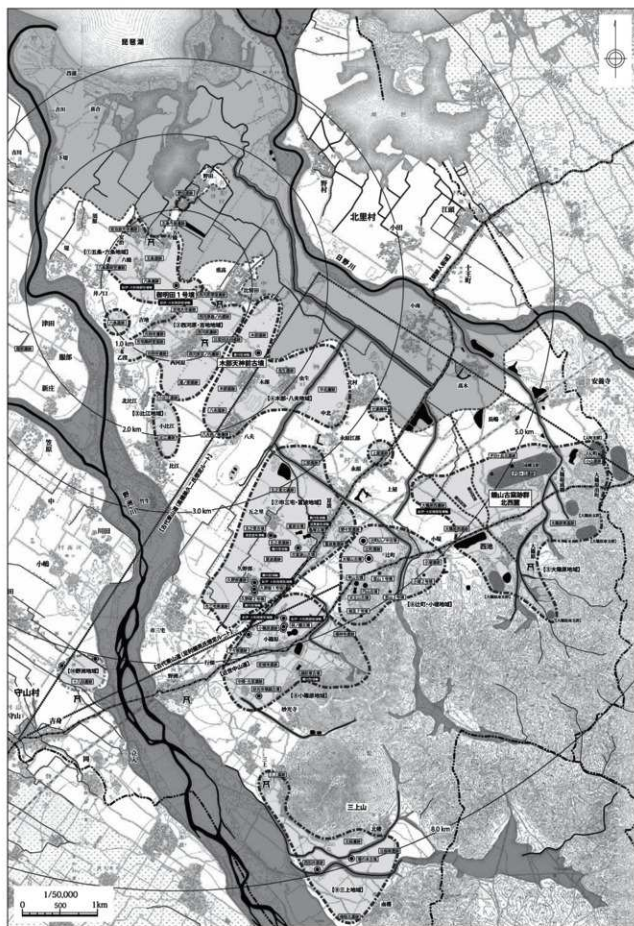


図5 主要道跡分布・古地形復元図

(大日本帝國陸地測量部発行の「八幡」「石部」(明治27年製図)、「和瀬村」「明山」「北里村」「草津」(明治28年製図)をベースマップに使用)



写真1 E区・第2遺構面 刀桴他の出土状況（北から）



写真3 E区・第2遺構面 棒他の出土状況（南から）



写真2 E区・第2遺構面 刀桴他の出土状況（南西から）



写真4 E区・第2遺構面 棒他の出土状況（南西から）



写真5 E区・第2遺構面 木製品の出土状況（西から）



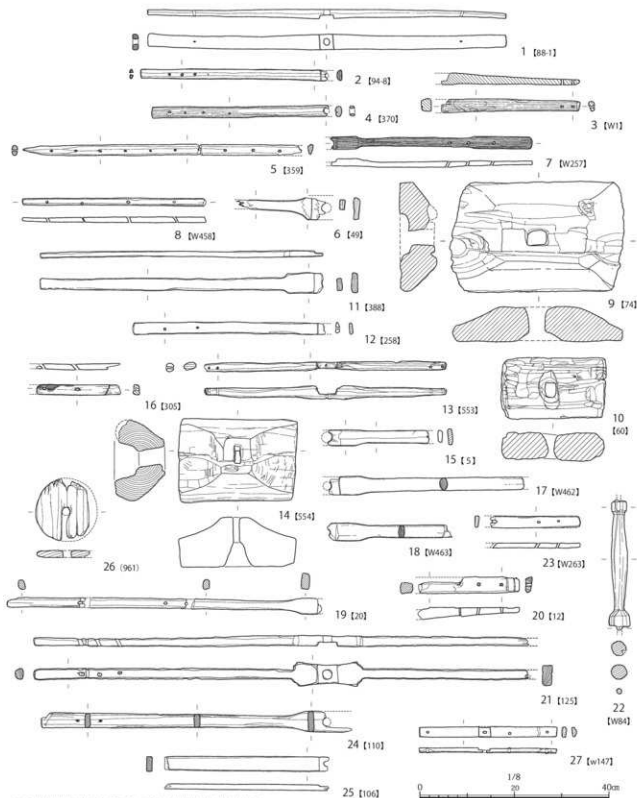
写真7 E区・第2遺構面 木製品の出土状況（南西から）



写真6 E区・第2遺構面 木製品の出土状況（西から）



写真8 E区・第2遺構面 調査地全景（南東から）



1：香取市松原内遺跡第3次調査・T4・第3層（弥生時代後期～古墳時代前期a）

2：香取市松原内遺跡第3次調査・T5・第2層（弥生時代後期～古墳時代前期a）

3：野洲市五之里北遺跡（下層子遺跡）（1976年度調査）・S1K・319号（古墳時代前期）※材料a

4：守山市下長遺跡（1996・1997年度調査）・SD1（古墳時代前期）※中心は未調査

5：守山市下長遺跡（1996・1997年度調査）・S81（古墳時代前期）※整地の土柱用a

6：東原市人江内遺跡（1984年度調査）・包苴群（古墳時代前期）※使用遺物

7：東近江市市西遺跡（1980・1987年度調査）・SD203・下層（古墳時代前期）

8：東近江市市西遺跡・SD01（4世紀末）

9・10：野洲市市川東遺跡（1989年度調査）・SD01（5世紀中頃）※材料a

11：長門市神谷遺跡（1992年度調査）・S801（古墳時代中期～後期a）※未製品a、使用遺物

12：東原市人江内遺跡（2004年度調査）・北調査区T96・第4層（出土TK23・47型式～TK10型式群）

13・14：東原市人江内遺跡（2002・2003年度調査）・北調査区T93・第4層（出土TK23・47型式～MT15・TK10型式群）※13は材料a、14は材料b

15：東原市人江内遺跡（2000年度年度調査）・T4（時期未詳）

16：東原市人江内遺跡（2009・2010年度調査）・北調査区T97・第4層（古墳時代前期）

17・18：東近江市市西遺跡2次調査・SD01（6世紀代）※使用遺物

19・20：野洲市近江遺跡（1999年度調査）・SD10（古墳時代前期a）※10は384.7を左右反転、20は使用遺物

21：守山市阿比留遺跡第3次調査・S81（6世紀後半～7世紀初）

22：長門市神谷遺跡（2009・2011年度調査）・S316・S23（古墳時代前期～後期）※材料a

23：東近江市市西遺跡（2009～2011年度調査）・第5区・S82（7世紀前期）※中心点が調査区にある

24：光州市大津遺跡（1981年度調査）・FD区・第1遺構遺物・遺5（7世紀前期～中期）※使用遺物

25：光州市大津遺跡（1982年度調査）・CA区・第1遺構遺物・包苴群（7世紀前期～中期a）※使用遺物

26：野洲市河原田遺跡第5次調査・第4遺構遺物・包苴群（7世紀初～8世紀前期）※未調査、材料a、材料b

27：長門市神谷遺跡（2018年度調査）・T3・第1遺構遺物・遺5-30（12世紀代）※確認品または使用遺物

※この他には、守山市大門遺跡（調査報告2015）、東近江市市西遺跡（一宮市神谷遺跡1992）、石見遺跡（建設史料2005）、長門市神谷遺跡（調査報告1973他）、高知市土御前遺跡（調査報告2018）の出土木製品にも可能性がある。

図6 滋賀県内の主な総かけと推測される木製品出土事例

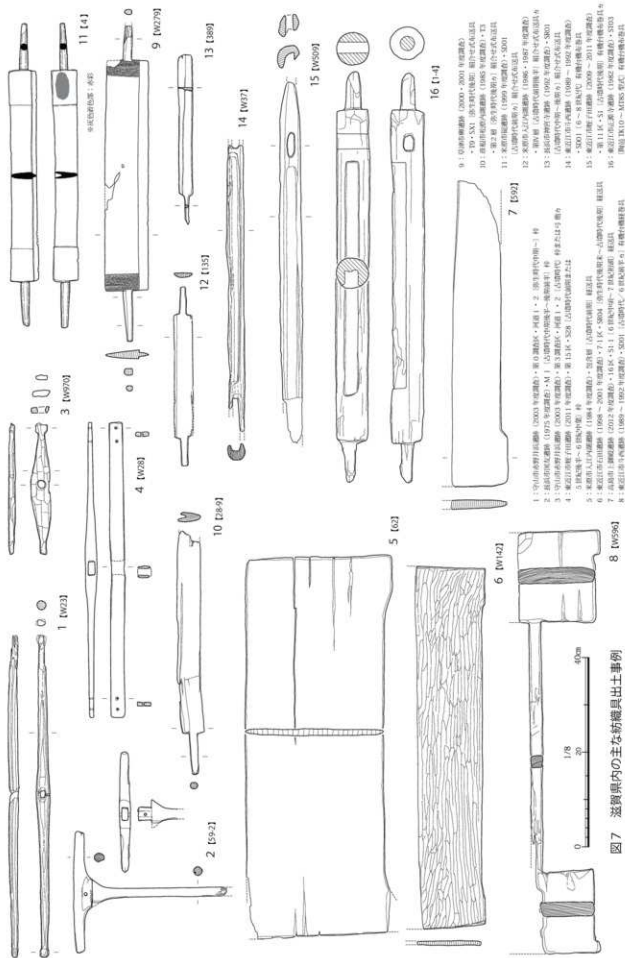


図7 滋賀県内の主な紡織具出土事例

報告書抄録

ふりがな	れいわごねんど やすしぶんかざいちょうさがいようほうこくしょ
書名	令和5年度 野洲市文化財調査概要報告書
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	野洲市教育委員会文化財保護課
編集機関	野洲市教育委員会文化財保護課
所在地	〒520-2492 滋賀県野洲市西河原2400番地 野洲市北部合同庁舎2階 ℡077-589-6436
発行年月日	西暦 2024 年 3 月

ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡名等	所在地	市町村	遺跡番号				
いちのみやけのぼりいせき 市三宅東遺跡	いちのみやけ 市三宅800番地 他	252107	343-085	35°04'18"	136°01'10"	201810～ 20190329	3054 工場建設
ふじりんにまがひあつゝのこ 福林寺磨崖仏に残る 矢穴と中世近江にお ける採石技法の展開							
ごとうよういせき 五条遺跡(18次調査)	ごとうよういせき 野洲市六条字八ノ宮 377番地	252107	342-034	35°06'44"	136°00'34"	19940425～ 0722	198.0 集合住宅建設
ごみょうだふんぐらふ 御明田古墳群	ごみょうだふんぐらふ 野洲市六条字下金光 寺、御明田他地先	252107	342-041	35°11'05"	136°01'35"	19831001～ 19840331	1500.0 県道野洲中主 線改良工事

所収遺跡名等	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
いちのみやけのぼりいせき 市三宅東遺跡	集落跡	縄文～室町	方形周溝墓・ 掘立柱建物・ 土坑・溝・ ピット	縄文土器・弥生土器・ 須恵器・土師器・陶器・ 木製品・土製品・ 石製品	
ふじりんにまがひあつゝのこ 福林寺磨崖仏に残る 矢穴と中世近江にお ける採石技法の展開					
ごとうよういせき 五条遺跡(18次調査)	集落跡	弥生～江戸	井戸・ 掘立柱建物	須恵器・土師器・ 陶磁器	
ごみょうだふんぐらふ 御明田古墳群	古墳群	弥生～室町	古墳	須恵器・埴輪	

令和5年度
野洲市文化財調査概要報告書

印刷・発行 令和6年(2024)3月
編集・発行 野洲市教育委員会文化財保護課
滋賀県野洲市西河原2400番地
〒520-2492 TEL.077-589-6436
印刷・製本 奥野印刷株式会社